
剣舞-Chain of Blood-

兄琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣舞 - Chain of Blood -

【Nコード】

N5738F

【作者名】

兄琉

【あらすじ】

世界が終る時、一人の護法士に世界は力を託した。最後の護法士がたどり着いたのは過去の記憶。護法士・時雨は歴史を書き換えるために動き出したのだった。もし、過去に行く事が出来たならばあなたはしますか？自らを表に出す事の出来ない時雨と八茅草流の人間たちの織り成すストーリーです。

プロローグ 終わってから始めよう(前書き)

はじめまして、兄琉です。

初作品なので拙いところもあると思いますがどうぞよろしくお願い致します。

プロローグ 終わりにから始めよう

とある世界の神殿で世界が終わりを告げようとしていた。
強大な力の下崩壊しかけている神殿には幾多の亡骸が横たわっていた。

命残るは四

一人の強き人

一人の強き人に付き従いし聖霊

一匹の強大なる妖魔

そして、虚無へ向かう世界

舞台に役者は揃った、さあ全てを終わらせよう…

舞台には二人、立っていた。

世界の消滅を望む妖魔。

その妖魔を殺すことを望む男。

二人の願いは相容れず、事態はどうしようもない程進んでしまっていた。

「ようこそ、世界ノ終りへ」

妖魔は招き入れるように、ゆっくりと手を広げた。

強大なる妖魔、弱りこそすれその姿は圧倒的な存在感を持ってい

た。

恐らくは術式に力の大半をつぎ込んでいたのだろう。

「少し…早かったデすネ。まだ術式は完全ではありません…最モ、その姿では何もできないでシヨウが」

侮蔑するような瞳。

しかし一抹の悲しみのある瞳だった。

獲物を追い詰めた肉食獣が反抗しない餌を不思議に思うような…おかしなことであるがそういう瞳だった。

神殿の入口に立つ男は既に疲労困憊、戦闘装束はそのほとんどが剥がれ落ち意味を成していない。

鈍い輝きを放つ刀を下段に構え終局へと歩み出す。

「全てを、終わらせようか…」

終わらせるのは一体何か…。

世界か…。

己の生か…。

生きる苦痛か…。

男は妖魔の後ろに展開している虚無を見据える。

まさに虚無。

世界を終わらせる術式という凶悪なイメージはなく、場違いなほど穏やかな術式だった。

俺自身、虚無を望んでいるのかもしれない…。

男は自嘲気味に微笑み刀についた血を払う。

「さて：あなたは何をしにここに来たのです？虚無ノ術式はほぼ完成。後はこの鍵を入れるだけです。仮に私を倒せたとしても術式の暴走にヨリ世界は無へと帰します。更に暴走を止めたとしてほぼ全ての人間は息絶えタ…。無意味なことは入るべきで八ないと思いませんガ」

最後の神殿は既に崩壊し、世界は妖魔に蹂躪されていた。
仲間は全員が倒れ、妖魔に亡骸を踏みにじられているだろう。
神殿の外には見知った仲間や見知らぬ戦士の亡骸が打ち捨てられていた。

だが、男の心にあるのは世界の救済や人類の存続などという英雄思考ではない。

一つの… たった一つの約束。

何の誓約でもなく、ただ一人の少女との約束。

『た… たす…… くう……』

どうしてもどうやっても届かない距離で少女の顔が歪み、男の名を呼んだ。

少女の姿が急速に、吸い込まれていく。

男の世界の速度が減少しゆつくりと、見せつけられるような光景。
誰が何をしようと助からないその状況で女は微笑み男の頬に震える手を差し伸べる。

男はどうすることもできない悲しみと己の無力さを呪った。

女はこれから男が怒りに染まらぬように祈った。

男は女の頭を優しく抱え、唇を寄せた。

それが少女の最後だった。

「答える必要は…ないッ！」

動いたのは男が先だった。

空間を圧縮することで一足飛びで妖魔の隣に現れた男は鋭く刀を振るう。

「チ…まだ動けたのです力。死に損ないガァ！」

突然の攻撃に体を吹き飛ばされた妖魔は掌から膨大な力を内包した雷弾を乱射した。

いくつもの轟音がなり響くが男にはあたらない。男を見失った妖魔はあたりを見回す。

妖魔の右上に飛来した男は自身の周りに四つの光弾を浮遊させる。それぞれが異なる四つの法則にしたがって妖魔へと放たれた。

妖魔の眉間へと一直線に飛来するもの。大きな螺旋を描いて額へと飛ぶもの。ランダムな軌道を描いて妖魔の顔を目標範囲に指定したもの。ランダムな光弾から先の二つの玉を守りながら飛ぶもの。

次第に速度を上げながら目標範囲へと近づいていった。

「小賢しイッ！」

妖魔の腕の一振りで最初の二つの光弾が消し飛ばされその風圧で男も吹き飛んだ。

男は残った二つの光弾が着弾したことを視界の端に確認しながら凄まじい轟音と共に瓦礫の山に打ちつけられた。

立ち上がった男は白い靄のような物を纏っておりそれが防御境界の役割をはたしていたようだ。しかし、衝撃は殺し切れなかったよううで右手は力を失いあらぬ方向へと曲がっていた。

「ふ…流石に無理…か…」

『翼様…』

男はこの絶望的な状況にすら笑っていた。
決して狂っているわけではない、微笑んでいたのだ。
横に浮いていた己の精霊に向かって顔を向ける。

「彼方、今まで随分と世話をかけたな…俺から離れている…」
『…できません』

彼方と呼ばれた聖霊は視線を合わせていられないと言うように斜め下に視線をうつし俯いた。

聖霊には解っていた。今自分が離れば、自分の力の恩恵により防がれていた傷が一斉に開き致命傷となる事を。

しかし、同時に判っていた。男はそれを分かっている、戦いをやめることがない…と言う事を。

聖霊には主人を止める術も、止める力もなかった。

男は若干のいら立ちを籠め聖霊を軽く睨んだ。

「彼方を切り離し、氣の搬出経路を断つ事で『六道輪廻』を発動する。もう一度言う、有効範囲から離脱しろ」

『ろ…六道輪廻…翼様…わかりました…。最後に、私の我儘を聞いてください…』

「なんだ…？んっ…！？」

男は自分の唇に何か柔らかいものが一瞬触れ、離れていくのを感じ

じた。立ち上がり何かを言おうとしたが聖霊の顔を見ると何も言えなかった。

聖霊が一つ手を叩くと聖霊は一瞬にして神殿の端へと移動し自身に結界を張った。

そうする事で主人との経路を断つ。それが主人との関係すらも断つ行為に思えて…聖霊は顔をしかめた。

その反動で今まで塞がっていた傷から一斉に血を噴き出した。その中精神力だけで立つ。

刀を地面に突き刺すと気を籠め始めた。

大気が振動し始める。

「くそ…油断しまシタ…。む、なんですカコの力は…」

「空、召、変、心、幻、占…我が力を糧に全てを紡ぐ、時代に飲まれし八茅草流奥義を今ここに…『護法・六法輪廻』…！」

「なにっ、それはまさかッ！」

世界を構成する物が男に流れ込んでいく。

体はざわつき、肉体が変異していく。新陳代謝の圧倒的なまでの活性化により、その過程で傷も塞がっていった。眩かった銀髪は闇を内包するような黒髪へ変色し伸びていく。

「やらせぬッ！」

鬼気迫る勢いで妖魔の口から雷弾が放たれる。

雷弾は男に肉薄し、直撃する…はずだった。

「き…消エ…」

雷弾は直撃する寸前で初めからなかったかのように掻き消えた。男の髪の毛の一本すら焦げてはいない。

「光葉…すまない…終わらせる。今全てを終わらせよう」

妖魔に向かって刀を構える。

「くソ…ここに来て予定外の出来事とハ、世界も足掻きますネ。ラストバトルと行きますカ」

「ラストバトルではない…これから始めるのは一方的な虐殺だ」
「…なっ」

次の瞬間、妖魔の右腕が切り飛ばされた。
高々と舞う妖魔の腕。

一瞬の隙に額を切りつける。
赤い血飛沫が舞い妖魔がたたらを踏んだ。

「こいつで全てを断ち切る！六・法・塵・創・陣！」

妖魔の体がガラスが砕けるように飛び散り、またその破片の一つ一つが塵となって虚無へと帰っていく。

「グッ…ぐああアアああアアああアアああアアああ！！！」

妖魔が死の間際に放った魔力の塊が術式へと収まり、術式が発動する。

「世界の終わりを見届けられないトハ…まあいいでショウ…どうでしたか…愛するの者をかたづッ…」

言葉を言い終わるかどうかと言うところで消滅し、世界に静寂が

訪れた。

力を失った男の体は地面へと何の加護もないまま落ちていった。
虚無が世界を一気に侵食する。

苦痛から解放された男はとても穏やかな顔で昔の木漏れ日の中の
約束を思い出していた…。

そんな中、一つの声が男に語りかける。

『あなたに二つの力を預けましょう。血濡れた鎖をあなたに託しま
しょう。あなたに私を委ねます』

男の記憶が途切れ

一つの世界が一つの終わりを迎えた…

ブローグ 終わりから始めよう(後書き)

ブローグどうでしたか？

突然終わってしまいました。が物語はこれから始まります。

評価感想お待ちします。

第一話 異人と、変人（前書き）

お久しぶりです。初めての方ははじめまして、兄琉です。
今回は色々と説明が少ない文章ですが読み飛ばす感じで読んでいただければ幸いです。

第一話 異人と、変人

「さてさて、今日は一体何が起こるか、何が終わるかねえ」

王都タウゼンガルドを一望できる一本の大木の立つた丘の上。
夏の日差しを受けながら一人の男は木のでっぺんに立った。

190程もあろうかという長身を枝のようにピンと伸ばし顔には
薄ら笑いを張り付けている。

風を受けて朱色の長髪が流されていく。

「今日も『観察』を始めようか。さあヴィル『月女神の片眼鏡』を
ここに」

『了解した主殿』

『ケツ、毎度毎度暇なこつて！』

男の後ろには甲冑を身にまとい、竜を体に巻きつけた武人が空中
に立っていた。

武骨な面持ちの武人に気性の激しそうな竜である。

武人が右手に持った縄を振ると、男の手の上につるの部分から月
のオブジェが下がった片眼鏡が現れた。

男はそれを付け、あたりを見回す。

騒がしい市場、あらゆる防御結界が敷かれた王城の内部、熱気に
包まれた町外れの道場。

全てがあらゆる軌跡を描き、日常を刻んでゆく。

それらを『観察』し『記録』するのが彼、鬼頭 汀の楽しみの一
つだった。

同じ毎日に見えて、少しの変化で少しずつ日常が変わっていく。
そうしてたまった『歪み』が一定量に達した時、非日常が突然にや

ってくる。

汀は観察者の立場からそれらを眺め、時に少し手を出す。

しかし最近是非日常イレギュラーがない。

そろそろたまりにたまった歪みが想像を超えるほどの非日常を演出してくれるかもしれないと汀はひそかに楽しみにしていた。

「ふふ、光葉みつばはいつになつたら前に進むのやら」

汀の最近のお気に入りは町外れにある八茅草流武道場のとある二人組だった。

綺麗な黒髪の大人しそうな少年と赤茶色の髪を持つ活発そうな少女が何やら言い争っている。

言いあらそうと言っても一方的に少女が怒っているだけのようだが…。

なかなかお互いに思いを伝えあえず周りから見ればじれったい程の二人組。思春期の少年少女によく見られる光景であった。

『主殿…あまり妹君の逢瀬デートを覗き見るのはどうかと思いますが…』
『ケケッ、さつさとやっちまえばいいんだよ！翼たすくのやつもよお！』

どうやら光葉と呼ばれた少女は汀の妹のようだ。

少しあきれた様子で主に忠告するヴィルはもう半ば諦めていた。
このような忠告を聞き入れる主だとは思っていないのだろう。

大陸随一の変人、唯我独尊、最も関わりたくない人物…様々な呼び名で呼ばれる主を持つヴィルの苦勞は並大抵のものではなかった。

「む…気付かれたか…？いや、私ではないか…空間を凝視して…」

少年が何かに気がついたかのようにこちらを振り向いた。

勿論汀は隠れようとなど一切しない。

突然こちらを向いて、頭を抱え出した少年を少女が気遣うように寄り添う。

ついに少年は膝をつき、体を痙攣させ始めた。

何かがおかしい…少年を注視してしまっていた汀は気がつかなかった。自分の後方に膨大なエネルギーが集束していくことに。

少年が何かを叫んで体を跳ね上げると同時にそれは起こった。

カッと失明するほどの閃光が世界を埋め尽くし、ガラスを千枚擦り合わせて一気に砕いたような硬質な破砕音が耳を貫いた。

細い木は根っこから引き抜かれ、地面は抉られ空へと舞い上がっていく。

油断していた汀は空高く吹き飛ばされ、空中で転がり止まった。

汀は自分の油断にいら立ちを覚えると同時に戦闘態勢を取った。

恐らくは空間を制御する空の術式クウによる効果範囲外に及ぶ反動。

油断していたとはいえ千里の眼を持つ汀に悟られずに術式を展開したその力量。

汀は手にじっとりとした汗を握った。

「ヴイル、敵を補足しろ」

「イエス諾、マイマスター。捕捉完了。サーチ数量二、生体反応微弱、妖魔の瘴オ気を検出しました。」

「何っ…妖魔!？」

風が収まり、災害の中心部へと駆け寄っていく。

ねっとりとはばりつく様な『人間』の血の匂いとなにか禍々しい者の匂い。

心拍数は上がり続け、全身の筋肉が痙攣しそうになる。

災害の中心部には一本の木が残っていた。
そしてそこには一人の男が横たわっている。

夏の日差しを吸い込むようなドス黒い血。

極限まで鍛え上げられたような締まった体躯。

全身を覆う大小新旧様々な傷の数々。

腰ほどまでに伸び広がった全ての黒の中でも更に闇に溶けるような黒の髪。

一枚の絵画のように危うい美しさを持っていた。

どこからかりーん、りーんと鈴の音が聞こえる。

いつ死んでもおかしくないような出血量に傷の数々。

「ふふ、くふふふ…これが歴史の吐きだした非日常ですか。面白い、
実に面白い…この方がどれほどの愉悦を私にもたらししてくれるので
しょうかねえ！」
イレギュラー

汀は狂ったように笑った。

顔がニヤケるのを止められないように右手で顔を覆い顔を歪ませる。

『主殿、何かいっておられるようですが』

死に体の男が何か呟いているようだ。

汀はそばに降り立ちその言葉に耳を傾ける。

「……それは…やくそく………果たせた…か…？」

男は何やら約束をしていたらしい。

思い半ばで何が起こったのか、汀に知る由もなかった。

「ふむ、これは思った以上に楽しいことになりそうですね。一応サンプルとして髪の毛の一本でも貰っておきますか」

長い髪の毛の内の一本を引きぬくと懷から取り出した小瓶に入れた。

引き抜く時なぜかりりり、と鈴の音が聞こえたような気がしたのだが…と頭をひねった。

『ケケケツ、おい！道場のバカどもがやつと近づいてきたぜ！後30秒もしないでここに来るぜえ』

「それではずらかるとしましょうか…彼は一体何をしてくれるのでしょうか」

汀は立ち上がると変異の法により男の傷口を軽く塞いでおき、その場から掻き消えるように姿を消した。

「さあ喜劇となるか悲劇となるか…。久しぶりの非日常、^{イレギュラー}しばらく楽しませていただきますよ…ふふふふ、あははははは！」

この時は誰も知る由もなかった。
^{イレギュラー}非日常如きでは済まない日常が始まりつつあることに…。

第一話 異人と、変人（後書き）

精霊、月女神の片眼鏡、空の術式、変異の法など細かいワードの説明は今回はあえて省いています。

後々…2～3話後くらいに説明を入れようかなと思っています。

あまり話自体に進展はなかったような気もしますがどうでしたでしょうか？

評価感想（+誤字脱字）がありましたらコメントを残していただけると嬉しいです。

それでは…今日はこれにて…

第二話 目覚め、歩き出す思い（前書き）

今回場面転換が数回起こります。

第二話 目覚め、歩き出す思い

男は静かに目覚めた。

古ぼけた、しかしどこか見覚えのある天井を見上げている。頬には爽やかな夏の朝風がそよいでいる。

障子越しに聞こえるのはやはりどこか懐かしい規則正しい声。

古い記憶が呼び起こされるような思い。男はゆっくりと体を起こした。

「ここは…どこだ…？」

体の節々にけだるさを感じる。長い間眠っていたのだろうか…。

自分の着た寝間着を見落とし、周りを見渡す。

六畳ほどの小部屋にちゃぶ台と小さな箆笥が一つ。

普段は使われていないだろう部屋の隅にたまる埃。

「俺は、死んだのか…？」

今一度寝間着に視線を落とし前をはだける。そこには包帯が肌を隠すほどに巻かれており、痛々しかった。

先ほどから感じるジクジクとした痛みはこれからか、と得心するとある事に気づく。

傷から仄かに香る力の残滓はあるはずのない人の力。感じると共に男は自分が死んだことを確信した。

彼女がいるはずがない…俺もなじ場所に行ったのか、と。うつむく男に話しかける者があった。

『^{たすく}翼様…』

聞き慣れた声に振り向くとそこには顕現した彼方かなたの姿があった。
枕元から二対の翼を携え浮く彼方の元には苦痛の生を共にした大
太刀があった。

彼方にしては珍しくひどく困惑した表情を浮かべている。

「彼方…お前もこちらに來ているのか…」

「…こちら…。いえ、それならば私もどれだけ嬉しかったことでし
ようか…」

彼方は俯いたまま何かを言うか言うまいか迷っているように見え
る。

男は聖霊の様子に気を引き締める。彼方とは幾多の戦場を駆け抜
けたがここまで露骨な恐怖や戸惑いを浮かべるのは初めてだからだ。

「翼様…御氣を確かに持ちください…。当面ご自身の身分、名前は
明かさない方が良いと思います…」

「彼方、それはどういう…事だ…？」

彼方は口を閉ざし、男は怪訝そうな声をあげる。

死んだのならば名前などどうでもよいはず。

それよりも翼は会いたかった。

生の苦痛より解き放たれた今、翼は会いたかった。

もう会う事はないと思っていた彼女に。

「光葉みつは…光葉みつははこの世界のどこかにいるのだろうか…」

男は再び天井を見上げ、物思いにふけり始めた。

それよりも少しばかり前、廊下を忍び足で息を殺して歩く者があった。

赤茶色の短く切った髪に袴姿。この道場に通っている少女である。目指す先は先日森の中に轟音とともに現れた死にかけの男が養生している小部屋。

八茅草流当主代理の手によって治療は成功したが、その前に応急処置が施されていた。

その時は誰にも言わなかったが少女には確信があった。

あの術式は悲しいながら愚兄による物であると。

（あのバカ兄貴が治癒を施すなんて何かあるに決まってるわ）

少女は男がなにか兄に関わりがないか聞きに来たようだ。

ようやく部屋の前について中の様子を探るため障子に耳を当てた。すると、部屋の中から声が聞こえてきた。

「…は…光葉^{みつは}はこの世…どこ…のだろうか…」

思わず「え？」と声をあげそうになりなんとか喉でとどめることができた。

聞こえてきた名前は間違う事のない自分のそれ。勿論、この男に会ったことはない。

何故…なぜ…と疑問が頭をぐるぐるとまわり、頭が真っ白になる。

気がついた時には鬼頭^{きとう} 光葉^{みつは}その場を静かに離れ、走り出していた。

「なつめねえ棗姉、みつは光葉知らない？」

鍛練場で指導を行っている女性の元へ一人の少年が話しかけている。

なつめ棗と呼ばれた女性は仄かに青みがかった艶やかな長髪に同性からも評価が高そうな整った顔立ち。長身の体躯に引き締まったスレンダーな体つき。

身につけた男ものの道着ですらそれらの美貌を減らすことはなかった。

しかし今その顔は少しの怒りを含んでおり、少年を見下ろしていた。

「道場では、なつめしはん棗師範…そう言ってるでしょう？たすく翼分かってる？」

「あ、ごめんなさいなつめ棗師範…」

とたんにしゅんと頂垂れる翼と呼ばれた少年は小動物のように可愛らしく、棗は思わず抱きしめたい衝動に駆られる。

しかし父のいない今、当主の娘として威厳を示さねば、と気を引き締めた。

華麗な舞を踊るような剣を扱う。

一つの流派の当主の娘としてその技を磨きに磨いてきた。

八茅草流師範…やちくさ八茅草 なつめ棗

それが彼女の名前だった。

そして隣に立つのはとある事情により棗の弟になった、やちくさ八茅草翼。たすく短く切りそろえられた美しい灰色の髪に整った顔立ち、細く見

える体つき。

仕娘らに人気の高い彼はそれだけで年上の門下生からの虐めを一身に受けていた。

「んゝ光葉^{みつは}は見てないわね…どうしたの？」

「もうそろそろあのお客人が目を覚ますころだと思って、一緒に見に行こうかなって」

翼はあの男の事を妙に気にかける。確かに男の子と言うものは強いものに憧れるものだし不思議ではないが…。

棗自身彼の事は気になっていた。

鍛え上げられた野性味を帯びた肉体に数多の傷跡。人の物ではない血がこびり付いた刀。

そして何よりも気にかかったのは胸に走る幾筋かの巨大な爪痕。自身の知るどれでもない獣による傷跡…いや、獣ですらないかもしれない。

明らかに規格外の獣による致死的な傷に関わらず男は未だ息があった。それが不思議であり、恐ろしかった。

「そうね、光葉^{みつは}いないみたいだし私と見に行ってみましょうか」

「んゝわかった、光葉^{みつは}とは今度一緒に行こう」

少しの逡巡の後、翼の返事を受け、二人は小部屋へと歩いていった。

第二話 目覚め、歩き出す思い（後書き）

評価感想お待ちしております。

第三話 邂逅、名有る者（前書き）

随分とお久しぶりです…初めての方はよろしくお願いします、兄琉です。

生活の方が忙しく随分と書き進められませんでしたorz。2月は忙しくないので書きためたいと思っています…。

では、短いですがどうぞ…

第三話 邂逅、名有る者

この世界には精霊、と呼ばれるものが存在する。

更に精霊たちを使役し、その力を引き出すものの事を護法士と呼ぶ。

神靈護法しんごういほうと呼ばれるその術式は生物霊等の生霊、自然界に数多存在する精霊、統括者である聖霊などの力あるものと契約し、己が身に宿す事によって行使することが出来る。

神靈護法を行使する者を一般に護法士と呼ぶ。契約の儀を行い精霊に自らを認めさせ、聖霊の宿りし武器を駆使し、人外の力を追い求める。

八茅草流もそうして力を求める武術の一派である。

武納倉むなくら、八茅草やちくさ、黨まゆずみ、藤堂とうどうの四家がこの国、タウゼンドの武術の礎であった。

古来、乱世であつたこの大陸を統括し一大王国を作り上げた当時の四人の王子である護法士、その四人がそのまま流派をつくつたのである。四人の話は御伽噺おとぎばなしとなつてこの王国に古くから伝わっている。

また、神靈護法を扱つたため、契約をするためには肉体的にも精神的にも強靱でなければ精霊に心体が壊されるため、受け皿となるための修行が不可欠であるが故の伝統でもあつた。

いつかその力を必要とする時のために『契約の儀』と共に四家の秘術として受け継がれてきたのだ。

だが今では国家の利権にありつこうと滅んだ黨家まゆずみを除く三家、特

に武納倉^{むなぐら}、藤堂^{とうどう}の二派は醜い争いを続け、武術は衰退、消滅の一端を辿って行くのであった。

「（とはいえ…八茅草^{やぼくろ}も伝統と共に消えるか、這ってでも生き延びるか選択を迫られる時期にあるわけですが…）」
「……………」

棗^{なづめ}は自らの聖霊に語りかけるように腰にさした短刀に指を這わせた。
しかし、『天^{てん}』は何も語る事はなかった。棗は軽いため息をついた。

「棗姉、どうかした？」

弟の翼^{たすく}が心配げな瞳でこちらを見上げてくる。
どうやら棗の心の曇りに気がついたようである。

翼は人の感情に敏感だ。

優しいと言ってしまうばそれまでののだが、この八茅草家の中で特別な境遇にある翼が人の心に敏感になるのは仕方ないことなのかもしれない。

感受性が高い者は高位の精霊と契約を結びやすいが、深すぎる契約は身を滅ぼす。

剣の腕はかなりのものだが優しいゆえに戦いに向いていない。
それが当主と棗が翼を師範代にしない理由の一つであり、棗が戦いから翼を遠ざけておきたい理由であった。

「いえ、なんでもないわ。」

「んゝ何かあったら相談してね？」

翼は人差し指を唇にあて腑に落ちない表情を浮かべている。
これではどちらが保護者なのやら…と苦笑する。

「さて…翼。客人の前では余計な事を話さないようにね、基本的には私が話します。わかった？」

「え？うん、棗姉がそういうなら…」

武納倉が藤堂の間者である可能性が高い、と棗は考えていた。
確実な証拠はないが、その二家以外で八茅草にちよっかいを出す者がいるとは考えにくいのだ。

棗は翼の頭を一撫ですると男のいる小部屋の前で気合いを入れる。
一瞬躊躇^{ためら}ってから障子に手をかけようとして…。

「どうぞ、お入りください」

棗の心臓が跳ね上がり、障子がガタリと音を立てる。
まるで何か悪い事をして見つかった子供のようにであった。

そしてゆっくりと開けると幾分か血色の好くなった男の顔が見える。
布団から体を起こして座禅を組んでいたようだった。

座禅を解き、その双眸を開きこちらを見つめてくる。

「ほら、翼も入ってきなさい」

「はい、棗様」

「……え……」

棗は僅かながらの殺気を瞬時に感じとると翼に向けていた視線を戻し、腰に帯びた刀に手をかける。

男の眼は見開いており、いつの間にか刀を構え居合いの態勢をとっていた。

「くっ・・・!!」

やはり間者ですか！と軽く舌打ちをする棗に対し呆然と立っている翼。

守りながら戦えるか考えてると棗は違和感に気がついた。

男の刀を持つ手が震えているのである。それも尋常ではないほどに。

そしてその顔には明らかな怯えの表情が浮かんでいた。

しばらくの緊張感が漂い、男が刀を鞘から抜きかけたその時。

りりーん、りりーん。と、鈴の音が響き渡った。

双方、特に男は刀を思わず取り落とし震える手を掴んだ。

そしてその震える手で顔を思いつきり張る。震えは止まり、呼吸も正常に戻る。

落ち着いた様子に棗もようやく刀から手を離れた。

「突然の無礼、申し訳ない」

刀を脇に除け、男は額を地面に擦り付けた。

「いえ、神経が過敏になるのは仕方ないというものの、顔をあげてください」

「だ、大丈夫ですか…？」

翼が歩み寄り、男の手をとり視線を合わせると再び体を大きく震わせた。

棗が駆け寄った時には既に遅く、翼の顔は男に叩かれていた。

「つつう…」

「あ…」

（彼が怯えているのは私と言うよりも…翼…？）

男の怯え方は明らかに翼に対するものであった。

「翼、今のは不用意に近づいたあなたが悪いのですよ」

棗は男が謝罪をする前に翼に釘を刺しておく。

翼は少し腫れた頬をさすりながら少し落ち込んでいるようだった。

「ごめんなさい…えと…お名前は…？」

名前…。

「なにか、言えない理由でも？」

なかなか答ええない俺に対して棗姉が少しきつめに問いかける。
しかし唐突に言われてもそう簡単に思いつくものでもない…。

自分から出来るだけ遠い人間の名前考えていると思わずある人物

の名前が口に出てしまっていた。

「時雨^{しぐれ}…時雨^{しぐれ}とお呼びください」

そうしてここに、歴史^{イレギュラー}外の人物の時雨^{しぐれ}の歴史が刻まれ始めた。

まるでこの歴史に突然介入した自分自身を表すようであり、この過ちを後に悔やむ事になるのを未だ誰も知らない。

第三話 邂逅、名有る者（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございました。

今回は最初の方に簡単なこの国の知識をつらつらと書き連ねました。（これがのちに大事になるかは知りませんが…）

そして短い…部屋に行って会っただけじゃないかと…。

主要人物が出そろい話が進みだすのが10話くらいになる気がしますでしたが…そんなものなのでしょうか？

何かご意見ご感想がありましたら評価を送って頂けると嬉しいですよ。

累計ユニークアクセスが1月27日現在930人になっていました。

目指せ一万人！という事で今後共々よろしく願います。

第四話 底知れぬ、力（前書き）

更に短い四話です…。

いつになったらピシバシ火花散る戦いをお見せできるのでしょうか…。

第四話 底知れぬ、力

「時雨^{しぐれ}…時雨^{しぐれ}とお呼びください」

時雨…そう言った時、俺と言う存在は初めてこの世界に在る事を許され、翼と言う男と別の存在になった気がした。

棗姉^{なつめねえ}は俺の事を油断のならない目で軽く睨んでいる。まあ当然といえば当然の反応。

そして棗姉が俺の知る棗姉という証明は腰に帯びる短刀の独特の波動から読み取る事が出来た。

「そうですか、時雨^{しぐれ}殿。本来ならばまだ動かすことのできない体、安静になさいますよう…」

棗は構えを解き立ち上がると、翼の背中を押して部屋から出て行くとした。

ここで俺は嫌疑^{けんぎ}の種子を棗姉に埋め込むことにした。

「重ね重ねお気遣い感謝いたします。私、八茅草の師範殿に命を救って頂き幸せで御座います」

「家の敷地内で死人が出れば噂になりかねないですので、それだけです。腕の良い薬師を呼びましたので、あまり動かぬよう。最近は間者が多いものでして」

時雨の言葉にピクリと眉を動かした棗は顔だけを時雨に向け、にっこりと笑った。

暗にこそそと嗅ぎまわるなという釘を刺しながら二人は出て行った。

二人が出ていった後一人残された男の顔は見る見るうちに歪んでいった。

その肩は震え、何かが漏れるのを必死に押し留めている様でもある。

「はは…ふははは…」

「翼様…やはり…」

彼方^{かなた}の心配事が的中したようで心配そうに主人の顔を覗きこむ。

「彼方…つまりは、そういうことかッ…!!!」

「ということはやはり…」

彼方は主人が気絶している間、刀の中から見えた少年の顔で確信していた。

あの瞳は『目の前の男の瞳^{それ}』と全く同じであると。

「ありえない…光葉^{みつは}、棗姉…いるはずがないッッ！」

男の爪が畳に食い込み、削り取る。

男は狂気を顔に浮かべ、齒を食いしばった。

「ここは…俺の過去とでもいうのかッ！」

時雨は拳を地面へと叩きつけた。

「八茅草の師範殿…ですか…」

棗は後ろの翼に気がつかれないように小さく呟いた。

初対面でしかも先程目を覚ましたばかりと見える。

それにも拘らず、ここが八茅草であることを理解し、私が師範であるという事を看破した。

（やはり隠密の類でしょうか…）

棗はそのしなやかな指を腰に携えた短刀へと伸ばした。
いざとなれば闇から闇へ…。ぐっ、と拳^{こぶし}を握りしめる。

そしてその時、自分の手がじっとりと汗をかいていることに気がついた。

あの男に反応してしまったのか。

あの男が刀を持った瞬間、棗の闘争本能が全開になった。危険…と感じたのだ、この八茅草流師範である棗が。

一人の武人としての本能が告げていた。

（本気で戦っても敵わないかもしれませんね…）

「時雨さん…一体何があったんだろうね。普通の人じゃあないみた
いだったけど」

「そう、ね…」

単なる一介の武芸者、というわけではないだろう。

あの気迫、眼力、まとった雰囲気全てが一流のそれであった。あの気に少しでも男に恐怖した自分に嫌気がさす。

そして同時に思う。

もし、敵だとして襲ってきた場合、私はこの子達を守れるのだろうか。

そして棗にはもう一つ、気になる点があった。時雨の携えていた刀である。

確かに男は武芸者として一流であるが、それだけでは棗に敵う事はほぼあり得ない。

護法士として、八茅草流の師範としてその力量に驕りはない。人外の力を求めた護法士と人の力の限界を求めた武芸者には純然たる壁があるのだ。

ましてや一つの流派の師範であり、守りや癒しの力を持つ棗である。

しかし、同じ護法士なら話は別だ。

護法士としての力のランクは当然契約した精霊のランクに直結する。

下より順に

生物霊等の生霊^{せいれい}

自然界に数多存在する自然現象の担い手である精霊^{せいれい}

それらの統括者である聖霊^{せいれい}

一般に神と呼ばれる存在の星霊^{せいれい}

勿論受け持つ力により得手不得手というものは存在するがそれは

またいつか説明する事にしよう。

棗が契約しているのは八茅草に古くより伝わる守護霊の一柱、聖
霊アメノムラクモ：天叢雲。通称てん：天

護法士として契約している師範、師範代が今現在この道場に3人
しかいないことを考えればその希少性がわかるだろう。

しかし、時雨の刀より一瞬洩れた力から察するには
(少なくとも中位の精霊、もしかすると聖霊の可能性も…)

てだれの者ともなると自分の力を隠す事が出来る。
事実時雨の底は棗には見切る事が出来なかった。

「誰か…見分役けんぶんやくを置く必要があるかしら…」

「え？何か言った？」

何もこの子らに無用な心配をさせる必要はない。

棗は首を振ると、昼飯に行きましようといって翼と連れ立って
いった。

「あ、そうそう…薬師さんをおかかないと…」

「汀さんみぎわ？それなら今日か明日あたりに来るって言ってたよ」

「そう、それなら問題ないわね」

当分は派手に動くことはできないでしょうから様子見と行きまし
ょうか。

貴方が何であれ八茅草に、この子たちに害をなすようであれば容
赦はしませんよ。

棗は夏の青空を見上げながら、平穏な日々を願った。

願わくば、血濡れた道が未来へと伸びていませうように、と。

第四話 底知れぬ、力（後書き）

どうも読んでいただきありがとうございました。

ようやく人と人が絡み合い始めました。

次は（多分）時雨と光葉との対面です。

時雨の言葉を聞いてしまった光葉、彼女は時雨に会った時何を思うのでしょうか？

評価感想お待ちしてます。

後、1月29日現在累計PV2,000、ユニークアクセス1,000人超えました。

これも読んでくださった皆様のおかげです。

これからも精進いたしますのでどうかよろしくお願いします。

第五話 木漏れ日、秘密の場所で（前書き）

お久しぶりです。はじめの方ははじめまして
生活の都合上更新が途絶えてしまっていました。

今回も短いですが…（汗）

第五話 木漏れ日、秘密の場所で

何故…なんで…

私は知らないはずなのに…

彼は一方的に私を知っている

何かが私の心の中につつかえてとれない
それを私は無理やりに心の奥底に押し込めた。

「気にしすぎ…なのかなあ？」

私はふらふらと立ちあがって伸びを一つ。

「んっ、きつと兄貴のせいで考え過ぎてるだけだよな」

ああ、そろそろ戻らないと…お昼御飯を食べそこなうかも…。

もうそろそろここに二人は来るだろう。

ここで3人で食事をするのも随分久しぶりな気がする。
最近特に棗さん忙しいみたいだったしねえ。

そう思っただけ私は秘密の場所から出て、男のいる小部屋を避けて台
所へと向かった。

「あれ？光葉^{みつは}、どこにいたの？」

丁度、昼ご飯をもらって出てきた二人にはち合わせた。
私は平静を装って、何かをいいかけた翼たすくを視線で制す。
きつと翼は勘付いているだろうから。

「ん、ちよつとね。裏山に涼みにね、あはは」
「まったく…午後の鍛錬を倍にするわよ」

いつもと変わらない他愛ない会話。
棗なつめさんの心労を増やすわけにはいかないもの。

それは勘弁といいながら私達はいつもの場所へと向かった。

八茅草の道場の裏庭の林を少し入ったところに少し開けた場所がある。そこは外からは分かりにくく、しかし日の光が十二分に差し込む場所だった。

その場所に男が一人。

「まだ…新しい」

男はその包帯の巻かれた指で巧妙に隠された木の枝に結ばれた紙を手を取った。

その口元には幾らかの微笑が浮かんでおり、何か懐かしむようでもあった。

「翼様…それは？」

「彼方かなた、ここでは時雨しぐれだ。いつ人に聞かれるか分からない」

「すみません…し、時雨様」

時雨は静かに立ち上がり、背後に顕現している彼方へと語る。

「御神籤おみくじ、と言うモノがあつてな…これはそれをした際の作法のよ
うなものらしい」

『は、はあ…』

彼方には何の事かさっぱり分からなかったようで、首を傾げた。
時雨は瞳を閉じてしばらく考え込み、立ちあがって樹に寄りかか
った。

「道場の雰囲気、季節、字の新しさから考えて恐らく『アレ』の前
だろう。となると…」

前髪を一房摘み弄りながら記憶の海へと潜っていく。
その内に何かに気がついたのか目を見開いた。

「……棗姉がまだ…という事はッ！」
『し、時雨様…？』

時雨は破顔し、その顔には狂気が宿った。

「彼方、喜べ。歴史は数日中に歪みだすぞ」

一步を踏み出す

歴史の紐を紡ぎなおす

それは罪なのかもしれない

世界を救うなんてどうでもいい

妖魔に世界が支配されてもいい

でも

それが俺の目的に繋がるなら

俺は喜んで罪を犯し罰を受けよう

その為に神の歯車になろう

さあ全てを始めよう

「そういえば棗さん、あの人どうするの？」

光葉は昼ご飯の入った籠を持ち直すと斜め上を見上げた。

周りは木々が生い茂って涼しくなっており、木漏れ日の日差しが眩しい。

「え？ああ、彼は…汀さんに診てもらってから数日後に適当な路銀を持たせて出て行ってもらうと思うわ」

「ふ…ん」

それが普通の処置。

というか八茅草以外の場所であれば怪我を負っていたとしても放り出されたであろう。

長居はしないのであれば、兄貴に関係あるうとなかろうと余計な心づもりは不要…か。

ただでさえ道場がピリピリしてるこの時期に不安要素を増やした

くないしね。

光葉は軽いため息を吐くと籠で翼を叩いた。

「イタツ！なにをするのさ…」

「なんでもなくいい。気分よきぶ…！」

翼が唇を尖らせてこっちを睨んで来るのを適当にごまかし光葉は顔を戻し、言葉を失った。

同時に棗も顔が一瞬顔が険しくなり場に静寂が走る。

静寂を破ったのは棗だった。

「私は、部屋で養生なさいますよう、言った、はずですが…？」

一語一語を区切るように。

心中を悟られないように。

「いやあ、すみません」

男は飄飄と。
ひょうひょうと

あくまでも仮面をかぶり。

「こないいい日に外に出ないのはもったいないでしょう？そしたら偶然ここを見つけてまして…」

「偶然…ですか」

「ええ、偶然。ここはいい場所ですね」

そこにはにつこりと微笑んだ時雨という男が佇んでいた。

第五話 木漏れ日、秘密の場所で（後書き）

次こそ…次こそお昼御飯です（長かった…）。

そしてやっとテーマの一つである軽い歴史改編が行われる……予定です。

では意見感想お待ちしております。

第六話 おにぎりと、宣戦布告（前書き）

光葉が何故かすごい変な子になってますが本当はそんなに変な子じゃないです…多分…。

第六話 おにぎりと、宣戦布告

「おや、もうお昼時ですか」

時雨はこちらに一步近づき軽く微笑んだ。
しぐれ

「美味しそうな匂いがしますね。いやあ、羨ましい」

そして持ってきた籠をガン見…。

口到人差し指を当てて可愛こぶるサービス付きだ。(気持ち悪いが)

睨んでいたこっちがアホらしくなってくるほどだった。

「あんたが『お願い』するなら分けてあげない事もないわよ」

「分けて下さるんですね、ありがとうございます。ささ、こちらの方へ」

私が腕を組んで喋っている隙に翼と棗たすく なつめさんは男に連れられてもう座っていた。

「そこのお嬢さん、どうしたんですか？」

男はまるで話を聞いてなかったかのように手招きをしていた。

(……………)

「話聞かんかい、コルアアアアアア！」

林の中に紫電が走った。

「なに、気にしてませんよ。おいしいご飯の代償と思えば大したことでありません」

「……………」

目の前の男は相変わらずへらへら笑っていた。

やっぱり、普通じゃない。アレだけの電撃を浴びて平然としているなんて…。

私が睨んでいると手を軽く叩いてこちらを見てきた。

「そういえば自己紹介がまだでしたね。私は時雨というものです」

「あんたすぐ出てくんではよ、教える必要はないわ」

「みつは光葉！」

棗さんが厳しい視線を向けてくるが私は口を固く結んでそれ以上の追及を避けた。

男が軽く息を吐くがそれすらバカにされているようで、私は持っていたおにぎりにかぶり付いた。

「申し訳ありません…、一応師範代なのですが少々口が悪くて」

「いえ、見ず知らずの男に声をかけられては仕方ないと思います。ですが…すぐ出ていく、とは？」

「そのままの意味です。本来であれば今晚にでもお伝えするつもりでしたが…」

棗さんが表情を変えずに淡々と伝える。

翼が驚いた表情を向けたが、さっき私が棗さんに聞いたのを聞いてなかったんだろうか。

「そう、ですか…」

男は少し項垂れて前髪を一房いじっていた。

棗さんは相変わらざる無表情、翼はおろおろとしていた。

男がふと自分の刀を手に取り、男と棗さんの間においた。

「身分不詳の単なる怪我人を長く置くわけにはいかない、という心は分かりました。では、どうでしょう…」

一呼吸貯めて、男の口から飛び出た言葉は私たちを十分に驚愕させるものだった。

「用心棒…いえ、外部からの意見を取り入れるという事で顧問…雇う心積もりはありませんか？」

「……………は？」

『時雨…様…？』

場を静寂が支配した。

顧問…ある組織に関与し、意志決定を行う権限を持たないが、意見を述べる役職やその役職に就いている者の事。

何言っただこの男は…。私の中のイライラが頂点に達した。

腰紐に下げた十手を力任せに引き抜き、男の眉間に向かって突き付ける。

「あんた何言っただの！？棗さんはあんたが邪魔だから追い出すって言っただの！傷の手当てまでしてもらっておいて大層な口のきき方ね！」

一度洩れた怒気は留まる事を知らずにどんどん口から溢れ出てくる。

「大体何？顧問？弱っちそうなくせにチョーシ乗ってんじゃないわよ！」

「光葉！！」

棗さんかと思いきや翼が割って入ってくる。

いつになく怒った顔が見れるんだろうと見るとそこには、とても哀しそうな顔があった。

「光葉どうしたの…？すごく怖いよ…」

光葉は十手を腰に戻すと押し黙り、時雨を睨み続けた。

心から怒っている様には見えないので棗も怒るに怒れないでいた。時雨は光葉に向いていた視線を棗に送り、真剣な目つきで問う。

「光葉さんが師範代という事は本当ですか…？」

「え、ええ…聖霊との契約も済ませてます」

「ふむ、それでは…光葉さんと私が模擬戦をする事で私の実力を測る、という事でどうでしょう。光葉さんも病み上がりの旅武者相手ではその実力を存分に振るえないかもしれませんかね…」

時雨はチラリと光葉を覗き見て反応を確かめる。

「まさか、一流の師範代が負ける…なんてことはあり得ないでしょうから、勝ち負けではなく私個人の技量を見てほしいのですがね…」

「なっ…」

「貴方を置くつもりはないと…」

「じよ、上等じゃない！！あんたのそのにやけっ面ぶち抜いてやる

わよー」

時雨の小馬鹿にするような物言いに対して棗の言葉をさえぎるように光葉が吠える。

棗の厳しい視線が光葉に向けられる。

「棗さん、とめちゃだよ」

その顔には確固たる意志が宿っており、翼も棗もこうなった光葉は止められないと分かっていた。

夜襲などでも完遂させるならいつそ目の届くところで…と思ったのか棗はため息を吐いた。

「…わかりました。しかし、勝負は三日後。わかりましたね」

「了承しました」

「わかった」

思ったよりも…簡単にいったな…。子どもの頃の光葉はこんなに短気だったつけ。

昔を思い出して時雨は微笑んだ。

やっと全員が落ち着いて食事は再開されたが剣呑な雰囲気は相変わらずであった。

こうして、旅の武芸者と師範代の試合はいつの間にか道場全体へと広がり、お祭り騒ぎへと発展していくのだった。

第六話 おにぎりと、宣戦布告（後書き）

顧問の説明？はWikipedia参照

翼の影が薄いのは気のせいでしょう。
そして光葉キレまくりです。

次回、『変態、兄貴再来（予定）』

意見感想お待ちしております。

第七話 毒矢、腰抜けちゃった（前書き）

サブタイトルの最後に を付けるかどうか悩みました。

第七話 毒矢、腰抜けちゃった

（時雨様しぐれ…わざとですね）

彼方かなたは不機嫌そうな顔で刀の中から見ていた。

三人が来ると同時に聖霊刀に押し込められた彼方は柄にもなく頬を膨らませていた。

時雨のからかうような言動にどこか楽しそうな表情も見えて少し悲しくもなった。

でもこんなに楽しそうに話す主人を見るのは実に久しぶりでどこか嬉しくもあった。

いろんな感情が巡り巡ってそれを全部時雨のせいにして駄々っ子のようにゴロゴロと転がっている。

「…え？」

その時、彼方の結界センサーに誰かが引つ掛かったのを感じた。

【それ】は気配を隠していたが物質量そのものを感じ取る彼方の結界センサーには意味を成さない。

見事なまでの隠形。その証拠に四人の誰も気が付いている様子はない。なかった。

そしてそれはこちらに何かを用いて狙いを定めていている。

「たす…時雨様！！」

彼方は聖霊刀から躍り出た。

時雨は一瞬彼方の方に反応しかけたがおにぎりを頬張る動作に戻

り、念話で改めて話しかけた。

幸いにも三人には勘付かれていないようで食事は続いていた。

『彼方、どうした。隠形を察知したか』

『…え、何故知って…』

『それはいい、方位は？』

彼方は隠形を察知していたかのような時雨の反応に驚くが、本来の使命に平静を保った。

『方位は東よりの北、守護結界等の術式は皆無です』

『ふむ、好都合だ。相手の攻撃に合わせ【ルカの羽毛】の迎撃術式を組め』

『了解しました』

彼方は聖霊刀の上に立つと羽を一度、大きく羽ばたかせた。

『玉座より望^{のぞ}み方位は東に傾く北、結界は蒼^{ファイルド}、灰に染まりし意思に照準を…』

言葉が空気を振動させ、魔方陣が紡がれていく。

何十もの音が交差し、歌声のように広がっていった。

『敵意には純然たる断罪を、舞い落ちし我らが羽毛に慈悲の炎を乗せる』

言霊が魔方陣となり地面へと吸い込まれていく。

吸いこまれると同時に茂みより吹き矢が放たれた。

「【百合咲く水辺に宿りしは贖罪の炎】」

「え？」

ずっと押し黙っていた時雨が突然放った言葉に棗は疑問を浮かべる。なつめ

棗が時雨の方に顔を向けた時すでに言い終わっており、同時に棗の顔の真横を時雨の右手が突き抜けていった。

長めの髪が風圧で広がり、瞳を開けた先には時雨の真剣な眼差しがあった。

「え、え…ええ…？」

「棗殿、落ち付いてください。誰かは知りませんが、あなたを狙うものがいたようです」

時雨はそう言うとき棗から離れ、右手の人差し指と中指で挟んだ矢を見せつけた。

茂みからギャツというめき声上がり、それに反応した光葉みつはが茂みに十手を投げ飛ばす。

しかし、十手は茂みを貫通し地面に刺さるだけだった。

「チツ、逃げたみたいだね」

十手を拾いに行った光葉が戻ってきて告げる。

棗はまだ呆然としていた。

「棗姉、大丈夫？」

「えっ、…あ、ええ大丈夫よ」

翼が駆け寄り、顔をうかがう。

意識を取り戻した棗は狼狽して言葉に詰まらせた。

「どうやらかなり強力な毒薬のようですね。強力な神経毒の類でしょう。いったい誰が…」

「…武納倉^{むなくら}か藤堂^{とうどう}の連中に決まってるじゃない。奴等^{こせんじあい}御前試合^{ごぜんしあい}が近いからってッ」

その言葉を聞いて時雨はやはり、と一つの確信を得た。

この世界は自分という存在（彼方含む）を除けばまさしく自分の過去そのものであると。

「なんにせよ、道場の方に戻った方がよさそうですね。棗殿、立てますか」

「ええ… ってあれ…？」

少し腰を浮かせたがとすんと落ちる。

「棗さん…」

「棗姉…」

「棗殿…」

「あ、あははは… 腰、抜けちゃったみたい」

棗の乾いた笑いと共に3人が重い息を吐いた。

「仕方ありませんね、… よつと」

「きゃっ！ な、何を」

「何をといわれましても、抱っこですよ抱っこ」

そこには俗に言うお姫様だっこを時雨にされた棗がいた。

「おろしてください〜」

棗はその屈辱的な恰好から恥ずかしいやらなんやらで降りようと
もがく。

それを冷静に見つめていた時雨はにっこりと笑った。

「あまり暴れると毒矢が刺さりますよ」

「……………」

効果てきめんだった。

後ろの方で鈴がひっきりなしに鳴っているのに時雨はふと気付き、
翼に持ってきてもらっ事にしたのだった。

第七話 毒矢、腰抜けちゃった（後書き）

一瞬ですがやっと戦闘？というか技が出ました。

そして兄貴登場せず（笑）

しかし次回のしょっぱなから登場します（もう書いたので）。

【ルカの羽毛】についてですが護法士の使う技には二通りあり、契約した精霊の力の一部をこの世に顕現させる術（これが神霊護法）と術式と呼ばれる空召変心幻占の六つの属性からなるモノがあります。後者の術式は護法士にならずとも使う事が出来ますが聖霊と契約し、聖霊の力の一部借り受ける（若しくは術式の一部を聖霊が負担する）事により飛躍的に術式の威力、効果が上昇します。【ルカの羽毛】に関しては前者の神霊護法であると言えます。この物語では護法士がメインとなりますので主に神霊護法の方が登場機会は多いと思います。

では次は比較的早くに会えると思います。
意見感想心よりお待ちしております。

第八話 未来、必然の苦痛（前書き）

第一話以来消えていた変態が登場です。

相変わらずのスロー更新ですができるだけ早くあげることができ
るよう頑張ります。

第八話 未来、必然の苦痛

ワタシは今非常に貴重な映像を見ている。

ワタシは今日専属の薬師としての責務を果たすためにとある道場を訪ねていた。

目当ての人物が見当たらないので道場をしらみつぶしに探していた。

そして裏庭へと足を伸ばしたのだが…

道場の当主の一人娘としての責務を全うするために仮面を被っていた女性が、在りし日の少女へと戻ったかのように真赤な顔をして俯いているではないか。

しかもお姫様だつことというオプシヨン付きで。

更にお姫様だつことをしている男は私が先日応急処置を施した男だった。

早くもこの男はイレギュラーを起こしてくれたようだ。

本来ならば…

この女性が元気な姿で

この林から出てくることは

あり得なかったというのに…

ワタシはワタシ自身の先見の才を疑うよりも前に目の前の男が特

殊な存在である事を確信した。

確信したと同時にいやらしい笑みがこぼれそうになり、思わず手で顔を覆い、隠したのだった。

「…いやまさか八茅草やちくさの師範のこんなお姿を拝見できるとは」
「あ、兄貴…」

林から出てきた四人を出迎えたのは王国一の変人だった。

「み、汀さん！^{みぎわ}」
「ご機嫌麗しゅう、棗様。^{なつめさま}今日は薬師として参ったのですが…後の方がよさそうですね。客間で待っていることにします。では後ほど」

用件だけを伝えると大した興味もなかったかのように去っていった。

「あの方がここの専属薬師さんですか」

「汀さんはね、大陸随一の変態さんなんだよ」
「翼、^{たすく}それ説明になってない…そうだよ、うちの専属薬師だ」

時雨は翼に毒針を持たせ調べてもらうように言い、翼は走っていった。

光葉は弁当箱を戻しに行くと言って炊事場へと行った。
必然的に二人だけになり、妙な空気が10秒ほど流れる。

「えと…そろそろ下ろしていただけると嬉しいのですが」
「もう少し、抱っこしていたいと言ったらどうします？」
「ッ、お・ろ・し・て・ください！」

顔をほんのり赤くする棗を可愛く思いつつ廊下へと下ろす。

「ありがとうございます…」

「お安いご用ですよ、軽かったですし」

「…ッ、では私はこれで…」

棗は顔を赤くしたままで立ち去ろうとする。

まだ若干足元がおぼつかない様子で見ている方が不安になった。

「もう少し、話をしませんか？私に聞きたい事もあるでしょう」

そんな棗の手をしっかりと握って引き戻した。

二人の間に心地よい風が流れる。

風がくすぐったそうに目を細めていた棗は少し真剣な目で尋ねる。

「では一つだけ…聞かせてください。貴方は、私たちの、敵ですか…？」

一語一語を区切りながら、確かめるように訊ねる。

「これはまた難しい質問ですね。そうですね、敵…ではないと言っておきましょうか」

「そうですか…」

再び、静寂…。

それが自然であるかのように心地よい無言の空間が二人の間を抜けていった。

「棗殿は、今のこの世界をどう思いますか？」

「あなたも随分と難しい質問をするんですね…」

世界、自分たちがいる王都タウゼンガルドだけでなく広い大陸小さな島国をすべて含む空間。世界では今でも戦火が飛び交い、飢餓に喘ぐ国も多くあるのだろう。

しかし、私は聖人君子では、ないのです。

棗は逡巡の後、重い口を開いた。

「私はこの世界、今の私たちがこのまま続いてくれればどれだけ幸せなことが…そう、思います」

少し顔を俯かせ、目を軽く閉じた棗は腰の短刀を握りしめた。それを見た時雨は自分の刀を引きよせ、空を見上げた。

「私も、そう思います。在るべき未来のために…」

時雨の治療は薬の関係上明日という事になり、汀はそそくさと帰っていったのだった。

そしてその日の夜

『時雨様ツ…時雨様あッ!』

「あ…ぐおお……ぐう。か、彼方、大丈夫ツ…だつ。取り乱すな…」

布団を捲り上げ上半身を起こし、胸を掻き毟る。

月明かりで仄かに明るい小部屋には爪を一枚一枚剥かれていくかのような苦悶の表情を浮かべた時雨がいた。

隣で彼方は泣きそうな顔をして時雨の身を案じている。

「はあっ…ハアツ、まさかこれ程までとは…な」

心臓の上を鷲掴み、発作のようなものが治まるのを待つ。

次第に調子が戻り、手を離れた時には全身から汗が噴き出していた。

息を整えると立ち上がり、彼方を引き連れ縁側に腰を掛ける。

綺麗な星空に下弦の月が輝いていた。

「これで、複雑に絡まり合った歴史の紐を一つ、結び変えることができた…」

『やはりあの時【世界】が言っていたことは本当だったのですね』

「ああ、実際に行って実感したよ」

握り拳を固く握り、口角を吊り上げた。

俺は道化でも僕でも何にでもなろう。
俺は道化でも僕でも何にでもなろう。
全ては【在るべき未来】のために…。

第八話 未来、必然の苦痛（後書き）

なぜ変態は棗が怪我をするという事を知っていたのでしょうか。
そして時雨さん死にかけ。最後の戦いの怪我が原因ではないです。

次回タイトル告知『変態、怒ってさあ大変♪（嘘）』

ご意見、ご感想心よりお待ちしております。
何か言われたらモチベーション上がる気がするので（笑）

第九話 血鎖、流浪図書館（前書き）

もうすぐユニークアクセスが2、000を突破しそうです。

第九話 血鎖、流浪図書館

これはいつの事だったか…。
とても大事な、事だった。

ここは…どこだ？

ここは、終末世界への入口…
全てのものが辿り着き、また消えていく場所

俺が何故ここにいる？

あなたが血の鎖を解き放ったから…。

おまえは、だれだ。

私はあなたのいた世界、世界そのもの。

世界と名乗った奴は語った。

細くなって細くなって消えてしまいそうな声で…語った。

破壊と崩壊の連鎖に世界は耐え切れなかった。

一つの世界が一つの終わりを迎え、虚無へと赴く事が判ってしまった時。

世界は憂^{うれ}いていた、嘆^{なげ}いていた、哀^{かな}しんでいた。

この世界自身である自分の弱さに。

自分が創り出したものに引導を渡される悪夢に。
自分のした事の愚かさに。

世界は残り僅かな自分の力を使い、二つの力に一縷^{いづる}の望みを託した。

歴史の紐を結ぶ力

●●を●●する力

それを制約と共に世界の破壊者に埋め込んだ。

願わくば、世界を蝕^{はしむ}むモノを討つ者に力が与えられるように…と。

しかしもう一つが何だったか、それだけが記憶から抜け落ちて全く思いだす事がない。

元からなかったようにすら思えた。

まあそんなことはどうでもいい

俺はそれが俺の目的と一致する限り

在^{たど}るべき未来に辿り着くために

俺は喜んで今の場所を投げ渡そう

何かを成すには

今いる場所に留まらないことを決心しなければならないのだから

「時雨^{しぐれ}さんは私を馬鹿にしているンですかねえ？」

「馬鹿になどしていない、全て真実だ」

明朝、小部屋に汀^{みぎわ}と時雨の二人は会合していた。

「確かに私は変人と言われているが、未来^{みらい}から来た等^{さう}という戯言^{さげ}を信じるとても？」

つまらない…。

時雨を見る汀の視線は厳しいものがあつた。

汀にとって、時雨は面白くないことこの上なかつた。

イレギュラーが自分自身をイレギュラーだと認識していることが、だ。

それ以前にそもそも未来からという言葉がナンセンスだ。

未来などという不確定なものは確かめることが実質的にできない。

未来を予測してもそれが本当に確信してからの言葉だったのか、憶

測なのかは判別しがたいからだ。

しかし、既に興味が薄れ始めている汀にとって爆弾となる言葉が投下されたのだった。

「では、こう言い直そう。俺はこの世界の終末から飛ばされて来た八茅草翼^{やまつくさよく}そのものである、と」

「!!」

汀の表情に驚きの色が初めて見える。
しかし直ぐに元の顔に戻った。

「……口では、なんとも言えますからねえ」

「まだ、認めないか。調べたいのならヴィルを使役すれば分かるだろう。まして、【流浪図書館】の館長なら、な」

先ほど以上の驚愕に目を見開き立ち上がった。

時雨は初めて見た、彼のこんなにも恐怖に染まった顔を見るのはしばらくの間汀は呆然となり、動きを止める。
軽くよろけると障子を引き、外へと出た。

「貴様が持ちえるはずのない知識を持っているのは理解した。しかし私の愉しみの邪魔をすれば容赦はせんぞ……」

汀は首から上だけを部屋の中に向け、顔面を手で覆い歪んだ笑みを投げつけた。

その眼光は万物を射殺せそうなほど鋭く、善の意志が欠片も感じられない。

隠そうとすらない殺気に道場全体が包まれ、肌が粟立つのを時雨は感じた。

「では、また会おう。真言・トルリーズヴ【Vivai】」

額の手を時雨へと向けると一言を残して汀は立ち去った。

引き留めようと立ち上がる時雨だったが刀を構えざるを得なくな
った。

なぜなら、前方の時空の狭間から三筋の暗黒がのぞいていたからだ。

「くっ……」

虚無にも似た暗黒は螺旋を描き時雨へと肉薄する。

時雨は咄嗟とつさに前方へと踏み出した。

暗黒が一点に収束する所へと狙い澄ました一撃はトルイーズヴを切り裂き、漆黒のエネルギー体は霧散していく。

しかし、半ば無理やり弾いた反動は大きく時雨の手は軽く痙攣けいれんしていた。

真言だけでこの威力。

時雨は改めて汀という男の暴力を垣間見たのであった。

衝撃が消え、静まった小部屋で彼方かなたが静かに口を開く。

『時雨様…痛いのですが…』

「……すまん」

今夜は彼方の刀の手入れをしてあげようと強く思う時雨であった。

第九話 血鎖、流浪図書館（後書き）

これで貯めておいたストックが切れたので隔日か3日ごと更新できよう頑張ります。

どこかにたどり着きたいと欲するならば今いるところに留まらないことを決心しなければならぬJ・P・モルガン
私の好きな言葉の一つです。

そして汀のキャラ（喋り方）が確定しません（最後怒った時はわざとですが）。

因みに、この世界には精霊の力の一部を行使する力と聖霊を介する事で発動する術式の二種類があります。

前者は殆どその人にしか使えませんが、後者は術式が確立しているので誰でも使う事ができます。【ルカの羽毛】や【トルイーズブ】は前者です。

叱咤激励、意見や感想、質問等なんでもお待ちしております。

第十話 屋根裏と、なっちー（前書き）

どうも、兄琉です。やっと十話です（プロローグ入れると十一話ですが）…長かった。

そして新キャラ登場です。

楽しんでいただければ幸いです。

第十話 屋根裏と、なつち

「先程のは一体何ですか!？」

よほど急いで走ってきたのであろう、なつめ棗は少し肩を上下させながら勢いよく障子を開けた。

既に小部屋には争いの後はなく時雨しぐれが布団の上で座禅を組んでいるだけであった。

時雨は閉じていた目を片方だけ開きすぐにまた閉じる。

「治療はしていただきました。二日後、戦いまでにはある程度は回復するだろうとの事です」

治療の結果だけを伝える。

暫くは聞き出そうとしていた棗だったが、時雨が話さないと分かりそのまま立ち去っていった。

再び座禅を再開するが、気になって仕方無い事がひとつあった。

「屋根裏の方、降りてきて話をしましょう」

上に向かって話しかけると、カタリと小さな音が立った。

少しの間まの後屋根裏の板を外して褐色の肌の少年が顔を覗かせた。人懐っこそうな顔に少し尖った耳が特徴的だ。

ひらりと軽やかに、全く音を立てずに飛び降りると少年は時雨の正面に座った。

「やあ、ボクは誰でしょう」

ニッ、と白い歯を見せて質問を投げかける。

「なち 那智、むなくち 武納倉 なち 那智だな」

「ご名答！ところで、いつから気が付いてた？」

「昨日の昼過ぎからだな」

「……それって最初からじゃん」

那智は頬を膨らませて不貞腐ふてくされるようなポーズを取った。
どうやら自分の隠形が見抜かれたのが悔しいようだ。

「俺もお前とはまた違った探査方法があるんでな」

「ちえ、まあでも…本当にたすつちなんだね」

那智には不思議な力がある。

本人曰く、人には色がある、そうだ。そのお陰で那智には変装の類が一切効かない。

恐らくは翼と時雨の色が全く同じだったのだろう。

更に時雨の知る限り最高レベルの感応性を持っており、聖霊を隠すことすらかなわない。

それが時雨が那智に直接ではないにしろ隠さずに話した理由の一つであった。

「ああ… なっちーの方は棗姉の差し金か」

「あはっ 大人になっても『なっちー』って呼んでくれてたんだ」
「お前がそう呼ばないと無視するからだ…」

時雨は軽いため息をついた。
少し昔の事を思い出す。

『おい、那智』

『……………』

『那智……く……な、なっちー』

『なあーに？たすっち』

『なあこれなんとかならないか……』

『んゝ無・理かな』

これ以外にも寝ている間に『なっちーと呼びたくなる』等と言われたり

弁当の上に海苔で『なっち』と書かれていたり

ほぼ洗脳に近い形で自然に出てくるまでに至ったのだった。

「うん、ボクはなつつんに言われて監視してたんだよ」

こんなにあつさり依頼人をばらす隠密はいかなものかと時雨は額を手で覆った。

ニコニコと笑って話す、らしくない隠密に時雨は話を進める。

「まあ俺の事はどうか内密で頼む……」

「え、どうしよっかな」

「代わりと言ってはなんだが、お前に幾らでも協力しよう。零^{レイア}亜の事も俺は知っている……」

那智の顔から笑みが一瞬消えた。

次第に那智の顔が険しいものへと変化していき、ふと何かを諦め自嘲気味な顔になる。

「そっか……ボク姉様の事話しちゃったんだ……」

「ああ… かなり前だが、お前から聞いたよ」

外の明るい日差しとは打って変わって少し雲が小部屋にかかった。ここにいる那智もまた秘密を抱えていた。それ故に明るく振る舞うしかなかったのだった。

那智は顔をフルフルとすると頬を両手で叩いて時雨に笑いかけた。

「うん！ なつつんには黙っとくよ」

「ありがとう、なつちー」

『…ぷっ』

どこからか思わず洩れてしまったような笑い声が聞こえた。

二人が時雨の傍らにあった聖霊刀に目を移した瞬間、中から彼方が転がり出てきた。

彼方は我慢のあまりふるふると震え、羽から羽毛が舞い落ちていた。

「この子が時雨の聖霊？」

「ああ、彼方と言う。…そろそろお前の後ろで殺気立っている零亜を落ち着かせれくれないか？ 精神的に悪い」

「あ、あれ… 時雨にはわかつちゃんだ。姉さん、大丈夫だよ…」

那智がそう言うつと隠形を解いた那智の生霊である姉の零亜が姿を現した。

『… 私はあなたを許したわけではありませんから』

「…………… ああ、それでいい」

零亜は厳しい視線を、時雨は優しい眼差しをそれぞれに向けてい

た。

何やら訳ありのようだ。

「これからもよろしく頼む、なっちー」

「うん、よろしくね時雨！」

二人は固く手を握り合い、微笑みあつたのだった。

那智はその後少しの会話をしてから「報告があるから」と言つて
屋根裏へと戻つていった。

一方時雨は暫く考え事をすると思方のご機嫌取りのために打粉を
探しに小部屋を出ていったのだった。

第十話 屋根裏と、なっちー（後書き）

新キャラですね、なっちー。

気づいた方もいると思いますが、彼の苗字……一応ここによ
とした理由があつたりします。その話はまたいつかですが…。

5月5日11時36分現在累計PV6,029人にユニーク2,
360人いただきました。ありがとうございます。

ただ、評価感想が少ないので些細な事でも思ったことがありまし
たらぜひ送っていただけると嬉しいです。

読者とのコミュニケーションが容易というのが小説家になろうの
利点だと思っていますので…。

意見評価感想お待ちしております。

第十一話 発見、深夜の特訓（前書き）

今回いつもより若干短いです。

場面転換の都合上と言う事でどうか一つ。

第十一話 発見、深夜の特訓

「……そう、ですか。引き続きお願いします」

軽く息を吐くと重たい本を閉じる。

その本の重さがそのまま心の重さになる様に感じた。

報告は簡単なものだった。

目的は不明。護法士ではあるが實力は不明。ましてや所属すら不明。

唯一わかるのは八茅草やちくさに取り入る、入り込もうという意思があるという事だけ…。

政権に取り入ろうとする意志があるならば武納倉むなぐらが藤堂とうどうに行くはず…。

そう考えると近くに控える御前試合の妨害を目的とした武納倉が藤堂の間者…。

「前もそう考えたんだけど…」

棗なつめは書き物を中断すると立ち上がった。どうも深く考え込むのは得意ではないようだ。

寢室を出て深夜の散策を始めた。

「御前試合の出場者も考えないとね…」

近くにこの王国の大掛かりな祭りとして御前試合がある。簡単に

いえば武術大会、この王都で毎年開かれており、開催時には各国から人が集まるのほどの大規模な大会だ。

今でこそ様々な人が参加しているが昔は四家（まゆすみ 黛はもう滅びているが）がほとんどの参加者を占めていたらしい。

国内の武術の発表場として、また国外へ武力を示す場所として大きな役割を担っている。

団体戦と個人戦とがあり、五人一組の団体戦の優勝チームと個人戦の上位五位までの人物は『王の五本指』と呼ばれ一年間王の右手、左手として働く栄誉と望むモノを手に入れることができる。

最近では武納倉と藤堂が寡占状態にあつたが今年こそは…と棗は考えていた。

自分に師範代である光葉（みつは）、もう一人の護法士の師範代を入れて三人の護法士がいる。加えて翼（たすく）が加われば…と考えて棗は頭を振った。

「あの子は…戦わせるわけにはいかない」

呟いた瞬間、棗の脳裏に嫌な想像が走った。

「あの男…自分も出るなんて、言わないでしょうね…」

言ってみてその可能性を否定できない棗であつた。

夜風が顔を撫でて、目を細める。木々が擦れ合つて細かな音に耳を傾けるとおかしな音が混じる事に気がついた。

音の方向にあるのは裏庭の林。

棗は嫌な予感がして気配を消して走り寄った。

裏庭の縁側に誰かがいるのを見つけて慌てて隠れる。

そこには予想した通りの人物がいた。座禅を組み、膝の上に刀を置いて手を組んでおり、まるで修行僧のようである。

「何を…」

やってるんでしょ、と言いかけたところでおかしな音の正体に気づいた。

乾いた破裂音が裏庭の林の近くで小さく響いている。
よく目を凝らして見るとそれは。

「舞い落ちる木の葉が空中で弾けてる・・・」

すごい…と棗は心より感心した。

木の葉を粉碎するのではなく、あくまでも中心の一点にのみ力を凝縮させ弾く。

繊細な力加減と微細なコントロールができれば到底できない芸当だ。

感心こそすれやはり護法士であるという事に強く警戒を強めた棗であった。

「棗殿、ですか…」

いつの間にか瞳を開きこちらを見つめていた時雨に棗は体を固くする。

「お邪魔…でした？」

「いえ、もうすぐ終えようと思っていましたから」

時雨は刀を手にとると立ち上がる。少し棗を気にしたように視線

を向けるが、裏庭に降りて中央へと向かった。

刀を腰に当て仁王立ち、棗をしっかりと見据えた。

「勝負、明後日ですね」

「ええ貴方の目的を達するための第一歩と言ったところでしょうか？」

「……………いえ、一步はもう踏み出してますよ」

「え……？」

「なんでもありませんよ」

ふと見上げた夜空には一面に星がちりばめられ、綺麗だった。

「それでは私は寝るとします…棗殿も夜更かしは美容の大敵ですよ」

「わ、わかっています！では失礼します、時雨殿」

その日、時雨は彼方の手入れを忘れてたままで次の日大層機嫌をとるのが大変だったそうなの…。

第十一話 発見、深夜の特訓（後書き）

今回は特に進展があつたわけではないですが…幕間みたいなもの
だと思ってくれば幸いです。

そして次回から2〜3話に渡り光葉との試合です。

さて、時雨は八茅草に入る事が出来るのでしょうか…。

評価感想どしどし募集中です。

メールでもよろしく願います。

第十二話 盗難、未遂（前書き）

今回もまた短いです。

第十二話 盗難、未遂

早朝から八茅草やちぐさの道場には少し浮ついた、しかし緊張した空気が流れていた。

誰もが久しぶりのイベントに楽しみになり、そして誰もが触らぬ師範代たに崇りたなしと周囲を警戒していた。

そんな中道場の端でひそひそと話をしていた三人組がいた。

「なあ、どう思うよ…」

「まあ大丈夫だとは思うが…」

「念には念を押しとくか…」

三人組はこっそりと稽古場を抜け出して裏庭の方へと向かっていったのだった。

『今日は光葉みつはさんと戦いの日ですか…』

時雨しぐれのいない小部屋で彼方かなたは独りごちた。

彼方は正直時雨にはここに關わって欲しくないと思っていた。

できる事なら人里離れたところで…ゆっくりと暮らしてほしかった。

『ここには悲しい思い出が多すぎます』

睫毛まつげをそつと伏せ、布団の上で丸くなる。彼方にはある程度の自由が許されていたため、こうして刀からある程度自由に入出入りすることができたのだった。

朝日の中まどろんでいると誰かが近づいてくるのが分かり、彼方は慌てて刀の中に戻る。

刀の中から覗いていると三人の門下生らしき青年が入ってきた。

「お、いないぜ」

「えーっと・・・あ、あつたぞ」

その内の一人が彼方を指差して喜びの声をあげる。

見つけた青年がその汗まみれの手で彼方を拾い上げる。

彼方は時雨以外に触れられるという事に大きな嫌悪感を抱きながら為すがままにされていた。

時雨のなす事に反対したいとはいえ、ここで自分の存在が明らかになれば問題になると思ったからだった。

「へへ、コイツさえなければあの野郎何もできねえぜ」

「これで我らが麗しの光葉ちゃんに傷をつける輩は消えるってわけだ」

刀の中から彼方は驚愕の声をあげるが、もちろん三人には届かない。

どうやらこの三人は時雨と光葉が戦うことをよしとしない考えらしい。

それよりもなによりも彼方はその後にくと予想される言葉に脅えた。

「じゃあ早速売り飛ばそうぜ」

彼方はその言葉に我慢の限界を感じた。

いくら時雨がいなくて彼方にもある程度自由に使える力がある。感情のままにその力を解放しようとして、覚えのある感触にその

力を収めた。

「誰の、何を、売り飛ばそうだった？」

彼方を掲げていた青年の手から忽然と刀が姿を消した。

「あ、あれ…？」

「あっ！お前は…」

「げっ…」

「俺のモノに手を出すとはいい度胸をしているな」

鋭い眼光を宿した時雨が入口に彼方を持って佇んでいた。

長い髪の間からのぞく双眸にははつきりと憤怒の感情が浮き上がり、圧倒的な威圧感を出していた。

しかしそこは曲がりなりにも八茅草流の門下生、腰を抜かすというような事はなくなるとかではあるが立っていた。

「お、おうなんだあ？やんのかよ」

凄んでみるが声が震えて全く無意味だった。

すると忽然と三人の前から時雨が姿を消した。

「え、あれ…？」

「に…逃げたのか？」

「誰がお前からかなんぞ逃げるか」

「「「ひっ！！」「」」

一瞬の内に背後に移動した時雨は彼方を肩に担ぎゆっくりと歩み寄った。

一歩歩くことに三人は一歩後退していき、ついには部屋の外へと出た。

「…去れ」

「お…」

「「「覚えてろよおおおおおおおおお」」」

やられ役のチンピラだった。

「彼方、大丈夫か？」

「はい問題はありません」

刀を撫でるように手を滑らすと彼方は猫のように目を細めた。

「さっきの方々は…？」

「あれは…光葉の親衛隊みたいなものだな、平たく言えば狂信者だ」
「な、なるほど…」

なんとか身の危機から脱出した彼方は胸をなでおろすのであった。

第十二話 盗難、未遂（後書き）

次こそ……いや、次の次から戦いが始まると思います。いちいち次の場面までが長くなる作者ですみません。

因みに小説は一話2,000字前後、2,500字を超えるようであれば二話に分けております。まあだからなんだという話ですが。

そしてPV10,000が夢ではなくなってきました。それに伴って評価感想も増えてくれたらなあとコッソリ思っております。

では、今日はこのあたりで
評価感想お待ちしております

第十三話 雷神、刹那の攻防（前書き）

結局今話で戦い始めてしまいました。

さて、二人の戦いの行方は…そして戦いの後時雨はどうするのか…。

第十三話 雷神、刹那の攻防

まだ角度の浅い夏の日差しが時雨しぐれを照りつける。
雲ひとつない青空は嫌味なほど清々しかった。

勝負の場所となる稽古場へと歩を進め、その内に奇異の目を浴びるようになる。

道場にいる部外者など珍しい以外の何物でもないから当然と言えば当然の反応であるが…。

しかしその時雨の前に一人の男が立ちはだかる。

「これはこれは連日訪れるとは珍しい方ですね」

「可愛い妹光葉みつばの試合を見逃すわけにはいきませんよお…私には観察者としての使命がありますしねえ」

ククク、と顎に指をあて笑う男がそこには居た。

片眼鏡を鼻に掛け、朱色の髪をなびかせたその男は稽古場の前に立ち塞がる様に丁度いた。

「汀さんみぎわ、私に警戒しても無駄ですよ。わざわざ月女神そんなものの片眼鏡を使わなくてもね…」

張りつめた空気がつつみ、風だけが動くことを許されたかのような空間が出来る。

「……………」
「……………」

「あれっ？兄貴なんているの？」

なかなか来ない事にじれたのか稽古場からひょこつと顔を出した光葉に二人の顔の緊張は一瞬にして霧散した。

「このあいだの診察の事で聞きたい事があつたので話していたのですよ」

「あ、アンタもやつと来たんだ」

光葉の顔が一転して敵を見るそれになり、二人とも稽古場へと入っていった。

そこには八茅草の門下生ほぼ全員に仕娘達までが集まっていた。夏の熱気を二乗するほどの熱気が籠っていた。

「来ましたね… それでは只今より八茅草流師範代・鬼頭光葉と時雨との試合を行います」

稽古場の奥に正座していた棗が立ち上がると高らかに宣言する。喧騒は瞬時に収まり皆の視線は入口に立つ光葉と時雨に釘付けとなった。

「それでは、両者中央へ」

誰かの喉が鳴る音と光葉の足音だけが稽古場に響く。

今、歴史にない戦いが始まるうとしている。

「勝負は二本先取の三本勝負。相手の動きを封じる、面胴に一撃を入れる、降参、以上で一本とします。相手に著しい損傷を与えた場

合は即刻試合中止後敗北とします。審判は不肖私、八茅草流師範・八茅草棗が務めさせていただきます」

只、淡々と感情のない声で棗が定型文を読み上げる。

光葉は十手を既に構え、時雨は体を半身に開き光葉を見据える。

「あそうそう…一つ、言い忘れていました」

棗が開始の合図を宣言する直前、時雨は手をぽんと叩き思い出したように言った。

その場にいる全員が呆気にとられたが次の言葉に驚きと怒りを覚えた。

「光葉さんはどうぞ、護法、術式を存分に使っていただいて結構ですよ。私はこの刀のみで戦います」

それはまさに八茅草と言う流派ごと侮辱するに値する言葉であった。

師範代である光葉に戦いを挑み、尚且つ勝つつもりであるはずなのに流れの武芸者は自分は護法士として戦わないという。護法士と武芸者の間に純然たる壁がある以上これは侮辱以外の何物でもなかった。

言われた光葉の方は怒りのあまり髪の毛が静電気で爆ぜ、電気が漏れ出していた。

「その言葉、後悔するんじゃないよ…」

「本気でかからなかったことを後悔させてあげますよ」

時雨は飄飄と微笑み、光葉の怒りを受け流す。

さて、と…もう一押し…。

時雨は心の中で呟き、仮面を被る。

「それでは、そろそろ始めましょうか」

時雨は再び体を真半身に開き、刀に手を添えた。

「そ、それでは、始めッ！」

「…あなたが私に決して勝てない理由、教えてあげますよ」

その一言が引き金となった。

十手を正面に構えた光葉がかぶりを振って吠えた。

「私たちを、私を…馬鹿に…するなアアアアアアッ！！」

稽古場内にプラズマが発生し一瞬目も眩むような紫電が迸る。亜光速とも言えるスピードで紫電へと体を溶け込ませた光葉が一直線に時雨へと肉薄する。

刹那、衝突の瞬間フラッシュのような光で全員の視力が奪われた。

まさに雷神の一撃。

荒々しいまでの一撃は誰が見ても確実に時雨を再起不能にさせるものであった。

光葉の通ったところはプラズマの影響で焦げ、黒くなっていた。

その場にいたほぼ全員が煙が晴れた時、立っているのは光葉だと思っただろう。

ただでさえ絶対数が少ない雷の神霊護法の使い手に、そのスピードは正に神速。

初見でまず避けれるはずがない、いや、なかった。

煙がゆっくりと晴れて行き、誰かが「えっ」と言う驚愕の声をあげる。

ギャラリー全員が目を丸くし、立ちあがる者もいた。

それほど衝撃的だった。

「これが、光葉さんの弱点の、一つです」

受け入れがたい現実がそこにはあった。

誰が予想できたであろう、一流を担う師範代として実力も十分な光葉が

神霊護法すら使っていない

ましてや抜刀すらしていない男に

頭を手で押さえつけられ

地面に組み伏せられている姿なんて

「い……一本……」

棗の震える声だけが稽古場に響いた。

第十三話 雷神、刹那の攻防（後書き）

時雨さん強いですね…。

まあ当然と言えば当然ですが。

一瞬の内に一本を奪われた光葉、動揺を隠せないまま二本目へと戦いは場を移します。

果たして光葉は時雨に勝つことができるのでしょうか…？

意見感想どしどしお待ちしております。

第十四話 真髓、変わるモノ

タウゼンガルドの夏は暑い。

元来湿気の多い土地であるため夏は気温以上の暑さを感じるのだ。

誰もが家から出るのをためらうような日照りの下。

王都の中心から少し外れたところにある八茅草流道場での話である。

「……………」

蝉の音だけが稽古場に鳴り響く。

その静寂を破ったのは、一人の男だった。

「光葉さんは…戦いにおいて素直すぎるんです」

諭すように、ゆっくりと重たい口を開いた。

戦っている相手なのに、教えるように語りかける。

話しかけた相手は口を開かない。

時雨は光葉の顔を押さえつけていた手をゆっくりと話すと開始線まで戻った。

まるで相手などしていないかのように警戒すらせずに

天から覗くように見下ろし

暢気とさえ思えるような速度で倒れる光葉の方へと向いた。

一方、自失呆然とするギャラリーとはまた違う意味での沈黙を保つ男が一人。

『ケツ、あの時雨とか言うヤロオ…なかなかやるじゃネエか』

『なかなかの身のこなしと氣の錬度、一度手合わせ願いたいものです』

（一瞬の攻防故分りにくかったですがあ…あの動きはどおいうコトでしょーかねえ…）

武人と大蛇が語り合う隣で男は思案する。

顎に手をあて、片眼鏡の中から時雨を見据えていた。

『ヴィル、彼の動きどお思いますかあ？』

生来の間延びするような声で傍らの武人にしか聞こえない声で問い掛けた。

武人は重厚な鎧をガチャリと震わせ男の方を向くと低い声で答える。

『……俄かには信じられませぬが、あれは…』

と、そこで一度口を噤んだ。

武人自身、幾多の武芸者、護法士を見てきた。

その経験がそうだと言っているが、その膨大な知識にある前提条件が違うと言う。

それらの齟齬が武人の口を些か重くしていた。

武人が躊躇っているのを感じ取り、男の方から答えを提示する。

『んん…う、やあっぱりヴィルにも八茅草の匂いを色濃く感じますかあ？』

『…はい』

『ありや隠しちゃいるが本流は八茅草だアなあ、ケツ。マア特徴的だから分かり易いわナ』

そう、三人（二人と一匹？）は一瞬の攻防を見ただけではあるが、確かに八茅草の動きを感じ取ったのだった。

しかし、他のギャラリーがそれに気がついた様子もない。

男は周りを見渡しそれを確認すると再び時雨に視線を戻す。

（八茅草の真髓を…見る事になるとはねえ…）

感心するように口を緩め、また元の微笑みに戻る。

他の者たちが気がつかない理由はそこにあった。

現在はまさに泰平と言っても過言ではない世の中。

小競り合いはあるものの伝説に記されるような大きな戦はもうここ百年は起こっていない。

そんな世の中でどうして武術がそのまま残るであろうか。

純度を求める昔から数を求める今へ…。

その中には習得困難と言う事でいつしか廃れていった部分と言うものが必ずある。

しかし、そのようなものに限ってその流派を體現し、古の無双の力を誇る真の武である事が多いのだ。

選ばれた者の非凡な力から誰でも努力でどうにかなる平凡な力へ…。
なんら珍しくもないような現象であった。

男達はそのように消えていった真の八茅草流の力の断片を少なくな
い知識量と圧倒的な知覚能力を以て目の当たりにしたのだった。

無論今の、この男から言わせれば、腐抜けた八茅草しか知らないこ

この者達は何が起こったのかすら分からず…見る事が出来たとしてもそれが八茅草のものだと知る事すら叶わないだろう。

それ程に衰退…いや、現在に合わせた進化を遂げた武術を学んだ者に分かるはずもなかった。

『しかあし…あの時の言葉を信ずるに足るけえつてい的な証拠は提示されてませんねえ』

男はそう呟いてこの試合の行方を見守る事にしたのであった。

まだ一本目、勝負の行方は分からない…。

第十四話 真髓、変わるモノ（後書き）

2009年5月17日7時59分時点でPV10、266アクセス、
ユニークアクセス3,357人。

遂にPV一万人突破しました（いよっしゃああああ）。
次は十万人…。

そして今回はほとんど兄貴の場面のみです。

次は二本目、相変わらず光葉は怒涛の攻めを見せますが激しい違和感に襲われます。

その正体は何か！？そして光葉は一矢報いる事が出来るのか？

意見感想叱咤激励ぜひお待ちしております！

第十五話 苛立ち、紫電来招（前書き）

三本勝負二本目です。

第十五話 苛立ち、紫電来招

普段なら声と汗が飛び交い、激しい竹刀の音が鳴り響く稽古場。今日は様子が違い風と蝉の音のみが響いていた。

稽古場の中央では既に二本目が開始されており、光葉が怒涛の攻めを見せていた。

リーチの短い十手を活かすための至近距離とも言える間合いで息を付く間も無い程の攻撃。

刺突から薙ぎ払い、後ろに避けた時雨に追いつがるように、薙ぎ払った遠心力をそのまま載せた中段への蹴り。その全てが紙一重で避けられる。

だが全く攻撃が当たっていないわけではない。

5〜6合の内一度は危うくと言うところで避け、10合の内一度は軽く捉え小さいが傷を作っている。

相手が刀を抜く隙すら作らせぬ連撃だった。

このまま行けば遂には光葉が時雨を捉え、一矢報いる事が出来るだろう、ギャラリーの誰もがそう思った。

いや、師範である素とその弟の翼、そして汀を除いた一般門下生の全員がそう思った。

戦っている当の本人である光葉は逆に追い詰められていた。

(ッ…戦い、づらい、のよっ！)

光葉は攻撃を繰り返しながら壮絶な違和感に襲われていた。

普段であれば圧倒的なスピードと手数で自分のペースへと引き込み

決着^{ケリ}を付ける。

それが光葉の戦い方^{スタイル}であり、勝利への方程式だった。

事実今でも自分のスピードに相手を引き込み、休む暇すら与えていない。

ここまではいつも通り…なのだが…。

（うつ…また…進みたいところ…に進めないッ）

自分の意志で攻撃しているはずなのに、自分の思い通りに足を運んでいるはずなのに…。

何故かその場所に進まされているように光葉は感じていた。

光葉の頬に一筋の汗が浮かぶ。

焦りは禁物、一本目の時雨の言葉を聞くまでもなく光葉には解っていた。

（でもっ…！負けるわけにはいかないッ）

攻撃を一旦止め、後ろに引く。

時雨は訝しんでこちらには攻めてこない。

『紫苑^{しえん}ッ！』

『応ッ！』

十手を構えた右手と人差し指と中指を伸ばした左手を顔の前で交差させる。

紫苑と呼ばれたのは光葉の雷を司る聖霊である。

「紫電来招^{しでんらいしょう}！」

光葉がそう叫ぶと所々から紫電が進る剛毅な聖霊は光葉の背中から中へと溶け込んでいった。

それを見て時雨はゆっくりと自らの大太刀を抜き、初めて構える。次の瞬間、パリッと言う空気の焼ける音と共に壮絶な打ち合いが再開された。

「ハアアアアッ！」

先ほどとは比べ物にならないスピードで十手を繰り出す光葉。

対する時雨はある程度は紙一重で避け、避けられないものは刀で弾いていた。

しかし、時雨の体の様子がおかしい事に気がつくものが数名いた。武器を合わせるたびに時雨の体が一瞬ではあるが止まるのだ。

（紫電来招…相変わらずの力ね…）

審判として一番近い距離で見ている素は改めてその威力に感心していた。

紫電来招とは光葉の聖霊である紫苑と光葉自身を同期させる事によって、身体及び知覚能力を飛躍的に向上させるという神霊護法である。

しかしこの技にはもう一つの副次効果があるのだ。

（全身を帯電させる事によって起こる相手への感電…私には相性が悪いわね…）

そう、武器を合わせるたびに相手、時雨は微量の電気により全身の筋肉が一瞬痙攣するのであった。

その一瞬の隙をついた最短距離の刺突は遂に時雨の腕を捕らえた。

「ぐっ…」

軽く呻き声をあげ一気に距離をとる。

時雨の右の二の腕を捕らえた刺突は時雨の道着を焦がし、内出血を引き起こしていた。

「まだ…やる？」

さっきのお返しとばかりに挑発をし返す。

だが油断はしない。十手を時雨へと向けながらジリジリと近づいて行く。

3メートル程の距離まで近づいた時、時雨が口を開いた。

「思ったよりも…良い腕をしていますね…」

そう言うとき時雨は刀を仕舞った。

降参するのだろうかと思った次の瞬間…。

膝をついていたはずの時雨は

光葉の目の前に立っていた。

「そろそろ、終わらせましょう」

光葉にだけ聞こえるように、口を寄せた時雨は耳元で囁いた。

第十五話 苛立ち、紫電来招（後書き）

激しい違和感を感じながら戦う光葉。

そして遂に捕らえられた時雨。

次回、遂に決着。

意見感想お待ちしております。

第十六話 王手、溢れる想い

光葉は何が起こったのかすぐには理解できなかった。

目の前には布地が、あった。

顔から10センチと離れぬ場所に突如出現した布。

全身は緊張し、咄嗟に動けない。

「なっ…！」

半瞬遅れて何が起こったのか気が付き、反射的に十手を横なぎに払いながら後ろに下がった。

しかし、身をかがめて回避した時雨は前へとさらに詰めよった。

後ろに出した左足は下ろす場所を失い大きく右足と交差する形を取る。

右足を横に出し態勢を整えようにも時雨が邪魔で動かせずにそのままの体勢で両足を後ろに引きずり下がった。

それすら読んでいたかのような時雨の上半体が光葉へと詰めより圧迫する。

既に上半体は大きく後ろへと逸らされ、空気がまともに肺へと入ってこない。

ヒュッ、と言う音と共に肺の空気が押し出され、頭がクラッとする。

かなり無理な態勢の下、逃げようと十手で右手を狙いながら左へと跳ねようとした瞬間…。

「王手…」
チエック

時雨の人差し指が光葉の顎をチョン、と軽く突いた。

ただそれだけで跳びかけたままバランスを失った光葉の体は横転し、十手は投げ飛ばされる。

同時に想定外の動きに同期することができなくなり、紫電来招が強制解除される。

飛びずさろうとした力そのまま横に転がった光葉は体制を整え直そうと受け身を取ったところでその動きを止めた。

「詰み（チェックメイト）…ですね」

涼しげな微笑みと共に夏の日差しを反射する大太刀が頬に突きつけられる。

左手だけで上体を支える形となった光葉はそのままの姿勢で固まった。

武器は遥か遠く、動くことすらできない。

完全な負けであった。

「棗殿、判定を」

「えっ… あ！ い、一本！」

催促される形での宣告は八茅草の師範代が流れの武芸者に負けたという事実を確かに突き付けたのだった。

宣告を受けると同時に酸素を失った光葉の思考は暗転し、その場に倒れ込んだ。

「ッ…!!」

目を見開き、上体のみを跳ね起こす。

迎撃態勢を取ろうと、体の上に乗るモノを弾き飛ばそうと体を捻り力をためる。

一瞬の猶予もない、躊躇ってもいけない。
そんな焦りの心が体を支配した。

しかし、その体を優しく押さえつける手が一つ。
ただそれだけで全てを察することができた。

「光葉…安静にしないで…」
（ああ…私は…）

慈愛の瞳を向ける棗に視線が固定された。
蔑むようでもなく、嘲笑うようでもなく、慰めるようでもなく。
ただただ慈しみの感情が伝わって、体に染み渡る様に波紋を広げていく。

それが申し訳なくて、情けなくて、悔しくて。

光葉の頬に夏の日差しが反射して一筋の光が流れた。

「棗…さんッ…ひくっ、うっ」
（負け……たん、だ）

そこに言葉はいらない。

聖母であるかのように棗は光葉を抱擁し、頭を撫でた。

癒しの力を持つ『天』の力を強く感じ、自分の中から何かが溶け出していくのを感じた。

光葉は一刻ほどそうしていると、真っ赤になった顔を拭い顔を上げる。

小さな医療室には四人の人影。

遠くからは普段の練習通りの掛け声が響いてきていた。

日常に戻った。全てが無かったことのように感じたが、そううまくは行かないらしい。

光葉は気付く、四人の内の一人に。

先日まではただの道着に身を包み、少しの静養の後消えるはずであった人物の風貌が変わっていることに。

何故か、自分達と同じ紋章の入った道着に身を包み、立っている姿に。

しかも一般門下生の着るそれではなく、

光葉達《師範代クラス》の着るそれであるという事に。

驚愕の表情を見せる光葉に棗は男の方を見ずに優しく、しかし一息で言った。

「本日よりこの道場の外部顧問に就任しました時雨殿…です」

今度こそ、光葉は自分の心臓が止まるかと思った。

第十六話 王手、溢れる想い（後書き）

十六話目にしてようやくここまでたどり着きました。

後三話ほど引きづり、後は新章（？）へと入る予定です。

とはいってもようやく導入部が終わるかどうかと言ったところですが…。

そして全く出番のない翼君…ああ可哀そう。

た、多分もうすぐ出番が回ってくる！…はず（汗）

読者の言葉がある事で作者、作品はより成長することができる…そう思っているので、ぜひぜひ評価並びに意見感想お待ちしております（メールでも全然OKです）。

第十七話 怒声、契約

「棗殿、これで私の勝ちですね」

時雨はそう言うと刀を仕舞い光葉を抱き上げる。

その言葉に音を取り戻した一般門下生からの怒声が飛び交った。

「光葉さんに触るんじゃない！」

「テメエ何卑怯な手使いやがった！！」

まさに暴徒。

未だ時雨に襲いかかっていないのが不思議である程に怒りをあらわにしていた。

そんな罵詈雑言をどこ吹く風と言ったように時雨は稽古場の外へと歩みを進めた。

早く光葉をこの場所から連れ出したかった。

早く自らが傷つけた光葉を治療したかった。

早く光葉に謝りたかった。

そんな時雨の態度に痺れを切らした門下生の一人が立ち上がり、時雨へと竹刀を投げつけた。

荒々しく投げ飛ばされた竹刀は弧を描き確実に時雨の頭を捕らえる軌道に乗っていた。

勿論そんなことをすれば光葉も傷つくという考えは頭から消えていた。

避けようとしてもしない時雨に他の門下生も竹刀を投げつけようとして、

最初の竹刀が時雨にあたる直前に。

一本の水のうねりが竹刀を呑み込み弾き出した。

「静まりなさい！」

それだけで全ては事足りた。

棗の一喝で門下生は怒声を潜め、振り上げた竹刀は行き場をなくし下に下ろされた。

「この戦いは正式なもの。それを穢す行為は誰であれ許されることではありません。以上、普段の鍛錬に戻る様に！」

「……ハイツ!!」「……」

棗はそれだけ言うといつの間にか消えていた時雨と光葉を探しに行った。

時雨はゆつくりと医務室へと歩を進める。
艶やかな黒髪が光葉の顔を撫でた。

（目的のためとはいえ……守る者を傷つけるとはな……）

時雨は矛盾した行為に自嘲する。
光葉の体をゆつくりとガラス細工を扱うように布団に横たえると傍らに座して待つ。

「……ここに……いたのですか」

障子が開き、二人の人影が落とされる。

時雨は音もなく立ち上がり、場所を開けるように部屋の隅へと移動した。

それ以上言葉を発する事もなく、棗は先ほどまで時雨がいた位置に膝をつき診察する。

十秒ほど後、棗は後ろに付いていた翼の方を向き、微笑んで頷いた。それを見て翼はほっとしたような表情を浮かべ、時雨の方にもその人懐っこい笑みを投げかけた。

「流石：と言ったところでしょうか：豪語するだけの力はあるという事を認めましょう」

翼の後ろから棗は時雨と向き合う。

翼が棗の後ろへと下がる事で互いに真正面から視線を交わす事になった。

最低限の賛辞を送る。

時雨の欲するモノはどのような賛辞ではない。

「棗殿、話が…あります」

さらなる目的のために口を開く。

棗は無言の肯定を示し、続きを促した。

「近日に控える御前試合：先程の光葉さんを見る限りでは純粋な実力では上位に食い込むことこそあれ、実際には難題と言えるでしょう」

再び無言の肯定。

御前試合の対戦表は表向きは無作為^{ランダム}とは言われているが藤堂、武納

倉に有利に組まれることは目に見えていた。

しかし次の御前試合で好成績を残さなければ八茅草は更なる窮地へと追い込まれる。

それ故のここ数か月の八茅草流の異常なまでの熱気であった。

「是非！私、時雨に御前試合の専属強化顧問^{トレーナー}を任せてはいただけないでしょうか」

時雨は頭を畳に擦りつける。

黒髪がその勢いのままに扇のように広がった。

「必ずや！必ずや、五本指に名を連ねる事を確約しましょう」

大言壮語と言っても過言ではない宣言。

棗は腕を組み、瞼を下ろした。

「それも…貴方の目的に必要な事なのですか？」

「………はい…全ては、在りし日の約のために…」

「約…？」

「全ては、八茅草を…守るために…」

「………！！！」

時雨は本当の目的を隠して答えた。

八茅草を守るといふのは本来の目的の付随物でしかない。

だが、今はこれでいい…。

そのままの姿勢で一刻程、全員が固まっていた。

棗は瞳を開き、腕を膝まで下ろして口を開く。

「…………名目上の肩書は、八茅草の者の驕りを正すため、外部の武芸に触れるために居付いている旅先で知り合った私の知り合い…。」
と言ったところでいいでしょう」

「…ありがとうございます」

「貴方の目的が私たちの進むべき道と違^{たが}えない限り…共に歩むことを『契約』します」

護法士にとって『契約』と言う言葉は重い意味を持つ。

あえて契約と言う言葉を使ったという事はそれが嘘ではないという意味合いを強く示すものだった。

「私、時雨。八茅草の在るべき未来のためにこの身捧げる事を…『契約』しましょう」

こうして、時雨は八茅草の一員となったのであった。

第十七話 怒声、契約（後書き）

これで次の話が終われば御前試合編へと話を進める予定です。

意見感想お待ちしております。

第十八話 真実、師弟関係

「本日よりこの道場の外部顧問に就任しました時雨殿…です」
（や、やっぱり…）

光葉は布団の淵を握りしめた。

（私が負けたせいで…）

しかし、その事で時雨を恨んでいるわけではない。
自分自身の弱さと過信が招いた結果、これからより一層の精進をすればいい。

光葉は心の中でこの男の相手はしない事を誓った。

…が

「彼には御前試合に向けての顧問として当分働いてもらう事になります。特に光葉と翼のね」

その決意は棗の言葉で脆くも崩れ去ったのであった。
開いた口が塞がらない光葉と翼。

この様子だと翼もそこまで考えていなかったのだろ…という事が容易にわかった。

同時に何故か時雨まで驚いている。

（と、言う事は棗さんの独断で…！？）

三人とも同様の表情を棗へと向ける。

当の棗は落ち付き払った様子で姿勢を正した。

「薄々感じていることかと思いますが…我々八茅草流は現在存亡の危機を迎えています」

棗はゆっくりと事実を述べる。

それは翼と光葉も確かに感じている事であつたし、時雨に至つては過去の出来事でしかない。

「王族から半ば見放され資金援助すらままならず、門下生すら藤堂と武納倉に取られている状況です」

四家は王国からの援助金を得る事で運営できている、というのが現状だ。

しかし、この数年御前試合その他で全くと言っていいほど成績を残していない八茅草は最低限の援助金すらもらえない状況になっていたのだつた。

「先日、王城から正式な書簡が届きました、簡単にまとめると『次回御前試合で成績を残せなかった場合八茅草流への援助を打ち切ると』」

それは資金面だけでなく、四家として受けていた恩恵を全て失うと言つ事だ。

そうなれば八茅草は一年と持たずに全員が路頭に迷う事になるだろう。

「だから…何に縋つてでも御前試合は勝たなければならないのです…」

棗は他の門下生の指導がある。

その為つきつきりで教えるわけにはいかないのだ。

「御前試合に出る者は個人戦は兎も角団体戦は、私、扶羽^{たすは}さん、光葉、なつちー、…翼の五人で出場する事になると思われます」

これを聞いて光葉と翼はさらに目を見開いた。

「ま、まってよ棗さん！白^{しろ}の翼が八茅草を代表する戦いに出る、つてどういう事ですか！」

「そうだよ…僕が出るくらいならもつと上の人が出るのが妥当だと思っ」

二人の言い分は尤もな事だった。

八茅草では最初は「白^{ハク}」と呼ばれる段位から始まり、進むべき道を見つけた者がそれぞれの色をもつ。

更に護法士となり契約した者は二色の帯を付ける事が許されるのだ。因みに棗は橙^{だいだい}に青の帯、光葉は青に紫の帯だ。

「しかし、純粋な実力、チームワークを考慮した場合この五人がベストだと言うのはこの道場の誰もが異論をはさむ事はないはずです。他の道場からの外聞を気にするくらいであれば今回に限り勝利を奪いに行かなければなりません」

棗とて白^{ハク}の翼が出る事で段位が上の者が反感を抱く事くらい承知の上である。

更に個人的には翼を試合に出したくないという思いもある。だが、引くに引けない戦いと言うものもある。

「で、でも！八茅草以外のやつに教わるなんて！流派を穢す行為でしょう!？」

尚も光葉は食い下がる。

だが棗はそれすらも予想していたかと言うように落ち着き払っていた。

「…これは言っているのかどうかわかりませんが…」

棗は時雨をちらりと見て、それに気がついた時雨は軽く頷いた。

「時雨さんは…確実に八茅草の流れを汲んだ武術を習得しています。それも昨今の弱体化した武術ではなく光在りし時の八茅草を」

「…!!」

二人は棗に固定されていた視線を時雨に移し、返答を待つ。

「…詳しくは言えないが、確かに俺は過去に八茅草の武術を学んでいる。俺ならば確実に二人を数段高みへと押し上げることが可能はずだ」

大きな声ではないが確かな意志を持って放たれた言葉。

光葉は隣の翼を見て、すでに翼はやる気である事を確認してから苦い顔をした。

「光葉…お願い…」

「……………分かったわ。でも！最初の三日で、貴方を試させてもらうわ。それで私が納得すれば…続けさせてあげる」

「…いいだろう。その代り、その三日間は俺の言う事を聞くという事を誓え」

「いいわ…」

「僕も…頑張るよ」

御前試合まで後一月。

ここに時雨と翼と光葉の三人による契約が結ばれたのだった。

第十八話 真実、師弟関係（後書き）

次からは御前試合編に突入します。

光葉と翼はどこまで成長するのでしょうか。

そして次に新キャラ登場です。

意見感想お待ちしております。

後、先日短編小説『呪われた幸運の剣』を掲載しました。
ファンタジー（？）な作品ですが他作品共々可愛がってやってくだ
さい。

第十九話 嵐、予期せぬ来客（前書き）

今回は時雨たちは出てきません。

第十九話 嵐、予期せぬ来客

王都タウゼンガルドには一つの店がある。

よろず屋【千里の瞳】

それがその店の名前だった。

店はそこまで広くもないが、両脇に並べられた棚には古今東西の何に使うかわからないモノが無数に鎮座しており、怪しい雰囲気を醸し出している。

入口にはめ込まれた小さな窓が雨を弾いて断続的な音色を奏でる。そのテンポの速さからそれなり的大雨と言う事が予想された。

店には店主が一人、カウンターに足を投げ出して何かを磨いていた。カウンターからニュツとはみ出した長い脚は数分に一回組み替えられ、その度に座っている古ぼけた椅子がギシギシと音を立てる。手に持っていたものを磨き終わったのか店主は椅子から下りて、片眼鏡をライトにかざし眺める。

「ん、イイ輝きですねえ」

店主はそう言うのと片眼鏡を適当に後ろへと放り投げた。投げられた片眼鏡は地面にぶつかると言うところで音もなく掻き消える。

「さあて、雨のせいで外に出るのも億劫…ましてや店の掃除なあって、はなからするつもりもない…」

『……………』

店主がチラリと店内を見ると寡黙な武人が可愛げなフリルのついたエプロンで身を固め、箒で掃除をしているのが目に入った。心なしかその普段無表情な顔が赤くなっているように感じた。

「来客なんてあるはずも……なあい。……と言いたいところですが、その棚の上に隠れている貴方、まあまったく無駄ですからできてください」

「……カッツ、今回もオレっちの負けかいなあ……」

カッカッカ、と不思議な笑い方をして一人の男が棚の上から舞い降りた。

男はそのあくまでもスタイリッシュに短く刈った髪をグシャグシャと掻くとカウンターの前の椅子に座った。

男の背負っている長剣から男が剣士と言う事が窺えた。

「今度からそんなところに隠れないで欲しいものですねえ……貴方の^{いたづらなかせ}【乱流】は私のコレクションによくありませんからねえ」

「カッカッ、細けえことは気にすんな！禿^{はげ}つぞ」

相変わらずよく笑う男だ、と店主は軽いため息をついた。

まあ表に出しているコレクションにはそこまで重要なものは出していない為別に構わないが、こうも来るたびに壊されると何か言いたくなると言つものだ。

「では……何か情報はありましたかねえ」

「ん、特にねえなあ……。ああ、強いて言うなら東方のアホみたいな国土の多種民族国家……ナンつつたつけな……まあいいや、あそこが遂に平定されたってことくらいかねえ」

「ほお……それは興お味深いですねえ」

男は普段その身で諸国を旅している。

その理由も目的も店主は知らないがこうして持ってきてくれる情報は欠かせないものであった。

「ンで、こつちの方はもうそろそろ歪イレギュラーみが来たころじゃねえの？」

「フッフ、勘が鋭いですねえ。歪みも歪み、特大級のが来ましたよ
お」

「外世界か未来からでも使者がやってきた、なんつってか？ カツカツカツカッ！」

「ええ…まさにその通りのようですがねえ」

男の軽い笑いが一瞬で吹き飛んだ。

その軽薄な笑みから一転して人を殺せそうな眼光で店主に顔を寄せ
る。

「よお…オレっちとテメエの情報のやり取りで嘘は絶対厳禁のはず
だぜえ…ブチ殺すぞ」

額がぶつかる数センチまで顔を寄せ、手を背中の剣に回す。

これ以上嘘を吐いたら、その顔と首ブツ千切ってやるうかと言わん
ばかりである。

「…嘘だと思っ気持ちも分からなくもありませんが、嘘ではない
と………思いますがねえ」

その殺気を受け流して何事もなかったように顔を離した店主は顎に
手を当てた。

アア？と間抜けな声を出して、カウンターに凶悪な顔を突き出して
いた男は店主の珍しく歯切れの悪い言葉に毒気を抜けたように元

の位置に戻った。

「どおしたんだよ、テメエが言い淀むなんてここ数年見てねえぞ」

「いやあ、流石の私も信じ難い事…と言う事ですよ。貴方、八茅草流の翼…と言う少年を覚えていまあすか？」

「カツ、覚えてるよ。ありやあ末恐ろしいガキだったがな。あの環境じゃあ育たねえだろうぜ」

やれやれと言ったように過去に一度だけ手合わせをした少年を思い出してやれやれと手を広げた。

「未来から来たと言う男…時雨と言いましたか、彼は自分を翼だ…と言っているのですねえ」

「ああ…？なんだと…！」

男は聞いた言葉を理解するのに一瞬^{ほん}呆^{ほう}け、理解したと同時に再び力ウンターにバンツ！と手を付いて叫んだ。

「やはり、あなたも驚くようですねえ…確かに私も聞いた時は久しぶりに心が動揺しましたからねえ…」

「違エ！！！！俺が言ってるのはそっちじゃねえ！時雨…だと！」

「……ああ…そう言えば、そうでしたね」

店主は得心したと言う顔で男を眺めていた。

雨の…店の入り口の小さな窓を叩くテンポが少し上がったような気がした。

第十九話 嵐、予期せぬ来客（後書き）

新キャラ登場です（名前分かりませんが）。

この話は次回まで続いて、その次からは…御前試合に入れるかと…汗

本来なら次の話しも纏めて一話にしようと思ったのですが3、000字を超えたので二つに分割する事に…。

さて、今回はこの二人が何者なのかが遂に（？）明かされます。
（一人はもう分かっているかと思いますが…）

意見感想お待ちしております。

現在縦書きのPDF形式に対応させるためほとんど改行や段落開けについてのみではありますが、改稿しています。それについても感想がありましたらぜひ教えてください。

第二十話 客間、五本指（前書き）

前回の続きの話となります。元々一話にする予定だったので若干短めになっています。

第二十話 客間、五本指

叫んだ後、男はもう一度握りしめた手でカウンターを強く叩いた。店主はカウンター壊れないかなあとよくわからない方向に心配のベクトルを向けている。

「チッ、ここでグダグダ言っても仕方ねえ…今度問いただしてついでにヤロオブチのめしてヤンよ」

「ああ…それは止めたほうがいいと思いますよお」

「カツ、なんでだよ」

「彼、多分貴方の事知っているでしょおし、何も…神靈護法すら使わずに光葉を軽くのす程度の腕は持っているよおですからねえ」

「カツカツカツカ、まあ確かに知ってるだろおが…まあ戦ってみりやあわかるってもんだ」

男はバシンと拳を付き合わせると高らかに笑った。

余程腕に自信があるのだろう、その笑みに敗北と言う文字はなかった。

「ま…止めはあしませんがねえ。ところで…今回も出^で場えるのですか？」

「カツカツカ、そのためにオレっちは戻ってきたよおなもんだ。当然だぜ！と言うわけで暫く厄介になるぜ」

「拒否はしませんがねえ…せめて手土産の一つでも出しなさい」

店主はほれほれと片手をひらひらとさせて宿代を要求した。

「カツ…テメエもかわんねえな。ホレ、件の東方の国で手に入れたなんつつたつけ…ああ、【詐欺師の仮面】…ってえシロモンだ。効

果は【信ずるに値する笑顔】を与える。後は知らん」

「ほお…これは素晴らしい…その誠意に答えるとして上等の部屋を用意しまあすかねえ」

店主は男から渡されたものをまじまじと眺め、結局ばいと後ろに放った。

当然モノは落ちる寸前で掻き消える。

「テメツ、今まで物置しかねえつつといて本当は空き部屋あったのかよ！」

「さあて、何のことやら…」

左手を握りしめて歯ぎしりをする男を尻目に店主は意気揚々と店の奥に引っ込んでいった。

男は店主について行くしかなく、足音荒げて付いて行った。

「まあ…朝廷の神器を勝あつ手に盗んだ事は隠しておいてあげましょおかねえ」

ギクウ！と音が聞えるほど肩を震わせた男は乾いた笑いを見せるしかなかった。

「こおこが今回の貴方の部え屋ですよお」

「あ？…ここあいつも物置じゃねえか」

「そおとも言えるし違つとも言えますねえ」

店主は左右非対称の笑みを張り付けて男を促した。
開ける、と言っているようだ。

「ん…、おお！こりやすげえ！」

男が渋々開けた先には今まで使っていた雑多な物置などではなく、この店には不釣り合いな様相の客間であつた。ご機嫌な顔で店主に向き合うとこれまた軽薄な笑みを浮かべた。

「んじゃ暫く厄介になるぜ。御前試合が終わるまでな」

「ククク、はい…どうぞどうぞゆっくりとお休みになつて下さい…王の左手【五本指】の二、きよすみ清澄 さいが碎牙殿」

「カカツ、お言葉に甘えんとするぜえ【流浪図書館】館長、鬼頭汀よお」

二人を隔てる部屋のドアが静かに閉められ、店の中は静寂を取り戻した。

汀はこれから起こる混沌の渦を眺めるといふ非常に楽しみな事に期待を膨らませ、笑みを手で無理やり押えて店へと戻っていくのだった。

それから数時間後、王城の客間で寝ていた所を発見された清澄碎牙は何が起こつたのか分からない内に来たドアを開け、それが単なるタンズである事に気がついて死ぬほど驚愕し、窓から飛び出してここが王城である事を知って一通りの悪態をつき、命からがら逃げのびて街のよろず屋【千里の瞳】のドアをぶち破る勢いで開けて店主に一通りの罵声を浴びせてから…いつもの物置に腰を落ち着けるのだった。

第二十話 客間、五本指（後書き）

改行のための改稿をして思ったのですが、汀の言葉遣いが最近一層異常になっているような気が…。

まあ異常な人間なのでこれでいいのかなあと思いつつ書き上げたわけですが。

そして次回から御前試合編となります。修行編？…考えてなかったわけじゃないんだからねっ！

ではでは、意見感想お待ちしております。

遂に累計ユニークアクセス5,000超えました。これもひとえに読んでくださっている読者様のおかげです。一層の精進を重ねて良い作品を見せられるようになればいいなと思いつつ、今日はこのあたりで…また今度お会いしましょう。

第二十二話 狐、抽選会（前書き）

御前試合編です。

地味に新キャラ登場です。

第二十二話 狐、抽選会

『ツウルルルレディース、エエーンドジエントルメエーーン！さあ今年もやってまいりました！王都タウゼンガルドー大イイーヴェント！御・前・試・合！！今年も各地より猛者が集いましたああああ！』

空と変異の術式を用いて作られた拡声器で司会の男が巻き舌全開で叫んでいた。

会場では花火が上がったり、楽団の演奏があつたりとまさにお祭り騒ぎである。

異常な熱気に包まれた会場は叫び声が飛び交い、力の入れようの程が窺えた。

「相変わらずのバカ騒ぎね」

「年に一度のお祭りですし、いいのではないですか？」

光葉と時雨は八茅草の道着袴に身を包み、出店の立ち並ぶ道を歩いていた。

今回の二人の仕事は団体戦の抽選。

登録はしてあるが団体戦に限り、組み合わせの抽選会が初日の午前に開かれるのだ。棗は忙しいようなので代わりに二人が来たと言っただけだ。

光葉は滅多に見ることのできない賑いに興味深そうな視線を振りまいていた。

「何か…買ってあげましょうか？」

「え！じゃあ…って、それ時雨の金じゃないでしょ！」

「あはは、バレましたか。でもそんなにキョロキョロしていると変な人に絡まれますよ?」

「う…確かに…」

光葉は少しばかりシユンとすると俯き加減に歩き出す。

その少し前を歩いていた時雨が急に立ち止まり、光葉がぶつかる形となった。

「イタツ…どうしたのよ…ッ!」

「…どうやら本当に変な人に絡まれたようですね」

「変な、とは随分美しくない言葉を使う人達ですね」

見覚えのある顔に時雨は心の中で微笑み、光葉は慌てて構えを取った。しかしそれを時雨が制し、光葉の緊張を解く。

二人の前には藤ふじの紋を付けた袴を着た背の高い男が二人と小さな女の子が一人つき従っていた。

話しかけてきたのは真ん中にいる目が糸のように細く、髪をまっすぐに腰ほどもで伸ばした男だった。

「藤堂…柳!」
ふじやなぎ

「ふふ、鬼頭光葉さん…去年の恨み、試合ではらせてもらいますよ」

男達はそれだけ言うとその長い髪をかきあげ、二人の隣を通り過ぎていった。

どうやら男達は抽選会場から来たようで、男たちが消えた先に会場が見えていた。

「…行きましょう」

「怒らないようになっただけでも上出来ですね」

「五月蠅いッ！」

ゴインッ！という骨と骨が擦れる鈍い音が道行く人たちを振りかえらせる。

肩を若干怒らせて歩く光葉とその後ろをフラフラしながら付いて行く時雨であつた。

「はい。八茅草流の方々ですね。ではこちらに流派名、チーム名、出場者及び補助者名等必要事項を記載の上あちらの抽選会場の方で抽選をお願いします」

時雨がサラサラと必要事項を記入していく間、光葉は会場にいる人々に注目していた。この会場内にいるのはほぼ全員が参加者、光葉にも見覚えがある者ばかりであつた。

各流派の代表、世界各地で名を馳せる武人達。

流派として名を上げるため、名を売り王城での仕事を求める者。

様々な理由で様々な人物がここに集っていた。

一つだけ言えるのは、己が強者であると全員が信じていると言う事であつた。

「はい、確かに受理しました。ではあちらの会場でお待ちください」
いつの間にか記入は終わったようで時雨がこちらに顔を向けていた。

「さあ光葉さん、あちらで抽選を待ちましょう」
「ええ……」

会場内はさらにピリピリとした空気に包まれていた。いつ争いが起こってもおかしくはない状況に光葉は思わず身構える。

そんな中時雨は悠々と前の方の席に腰掛け、ひらひらと手を振って光葉を呼び寄せた。

「全く…少しは緊張感を持ちなさいよね」

「え？何か言いましたか？」

相変わらずの微笑みを向けられ毒気を抜かされた光葉であった。なんでも、と返すと隣に腰かけて発表を待つ。

「光葉さん、緊張しては本来の力が出せませんよ」

「な、なっ！き、きき緊張なんてしてないわよ」

大変わかりやすい緊張を見せて顔を赤くする。

周りの参加者が光葉に注目し、さらに顔を赤くして静かに席に戻った。

「何も緊張する事はないですよ、彼等は貴女よりも遥かに劣る人たちばかりなのですから」

途端に二人の周りが無言になる。

光葉は口をあんぐりと開け、今度は顔を青くする。

次第に全身に受ける殺気で体中の毛がざわめき出していた。

そして光葉は思った。

どうしてこの男はこうもトラブルを引き起こすのだろうか。

第二十二話 狐、抽選会（後書き）

10,000からそこまで日は開いてないと思うのですがPV2
0,000突破しました。やはり更新頻度の問題でしょうか…（汗）

今回一応新キャラ出ましたね、柳さん。初めての他流派の人です
（一瞬で去って行きましたが）。

そして次回も再び新キャラ登場です。さて御前試合編どうなるの
でしょうか。

意見感想心よりお待ちしております。

第二十二話 偃月刀、人形創り（前書き）

久しぶりの更新です。

どうにもPCの調子が悪い今日この頃。週一回くらい更新できたらしいなあ…。

第二十二話 偃月刀、人形創り

「な、何突然言ってんのよアンタは！」

「はて？私は本当の事を述べただけですが？」

分かつてるのか分かってないのか、時雨は疑問符を頭に浮かべ顔を傾ける。

さらに殺気が増して、近くに立っていた一人の男が立ち上がった。それに気がついた光葉は気がつかれないように十手に手をまわしいつでも迎撃できるように構える。

男が光葉に襲いかかる！と誰もが思った次の瞬間だった。

「ガッハッハ！相変わらず小さいのに目立つ嬢ちゃんじゃのオ！」

並の男よりも二周りは大きい大男が光葉に襲いかかろうと思っていた男の頭を鷲掴み、投げ飛ばしていた。

投げ飛ばされた男は直接席に叩き込まれ気を失っているようだ。会場にざわめきが戻り、今度は大男に視線が集まる。

「あなたは…」

光葉は目を見開き、大男を凝視する。

他の参加者はこの少女が大男の知り合いなのかと興味をそそられた様で大人しくなっている。

大男の方は光葉の言葉を待つように仁王立っているとところを見るとどうやら知り合いのようだ。

しかし…

「え、えーっと…武納倉の…も、モミアゲ男！」

周りにいた全員がずっこけた。

時雨はくすくすと堪え切れなかった笑みを零し、大男は一瞬ポカ
ンとした表情を見せると腕を組んだまま後ろに反りかえり大笑いす
る。

「ガハハ！忘れられとったか！ワシは武納倉流師範、武納倉 一心
じゃ。こいつを忘れたとは言わせんぞお」

一心と名乗った大男は己の武器であろう身の丈以上もある巨大な
長柄刀ながえとうを光葉に向かって突き付けた。

三日月の形をした刃を持つ大刀だいとうはその重量を物ともせず光葉の
眼前でピタリと制止する。

「その偃月刀えんげつとう…思い出した。去年の御前試合では世話になったわね」
「やつと思ひ出したようじゃの。今年も嬢ちゃんと当たるよう楽し
みにしとるからのオ！ガッハッハッハ！」

一心は武器をひよいと担ぎあげるとそのまま満足した表情で去っ
ていった。

「（確か…この前の年に光葉は一心に負けたんだっただかな…）」

時雨は昔を思い出してうんうんと頷くと抽選が始まろうとしてる
ステージへと目を向けた。

ステージ上では巨大な予選チーム分けの表が掲示板にでかかと
描かれていた。

どうやら今回は応募チームが多かったようで、予選ブロックと決勝トーナメントに分かれているようだ。

六つある予選ブロックでブロック内順位二位までが決勝トーナメント出場、予選ブロック成績優秀チームがシード権を獲得できるようだ。つまりは決勝トーナメントは長くて四回戦う事になる。

必然的に予選ブロックでの当たる相手が重要になってくるだろう。

「（抽選方法はボールに書かれたナンバーで決まる様だな…それならば）」

時雨は光葉から見えないように術式を構築していく。閉じた両手の中に緻密な複合術式が形成されていた。

「召喚による理想的な物質を天使の羽を素に構築、変異法もちによつて人型へと変換、後に幻のちによる不可視の装甲を付与…」

言葉により具体的な工程を刻む事でその精度を上げて行く。手の内側で術式が唸りを上げて稼働し始める。

時雨が手を開いた時、その掌にはミニチュアサイズの彼方がふわふわと浮かんでいた。

一言二言声をかけるとミニ彼方はその小さな羽根を動かしてステージへと向かっていった。

「なにやってんのよ、ぶつぶつ言つて気持ち悪い…」

「いえ、ちよつと抽選に細工をしようかと思ひましてね」

「いやいやいやいや！何アンタ怖い事サラつと言つてんの！」

思わず光葉は立ち上がる。そして再び注目を浴びるとその視線に耐えかねて光葉は顔を真っ赤にして、最初の勢いはどこへやらといった感じで小さくなつてた。

「安心してください、ばれる様な事はしませんよ」

「…ハア。アンタのその突飛な行動にはいつまで経ってもなれそうにないわ…」

額に手を当てる光葉を横目に見ながら時雨は左手を繰り始めていた。

第二十二話 偃月刀、人形創り（後書き）

今回も地味に新キャラ登場。武納倉と藤堂がいくら八茅草と敵対勢力にあるからといって全員が全員お互いを嫌っているわけではありません。

一心に関してはむしろ好意的です。

意見感想お待ちしております。

第二十三話 団結、出陣の時（前書き）

相変わらず短めです。

第二十三話 団結、出陣の時

「予選ブロック『ほ組』第三チーム、八茅草流【光鶴翼】」
やちくさりゅう こうかくよく

八茅草のチームが発表され、札に名前が刻まれる。

しばらく後、へ組までの発表が終わり予選ブロックの抽選は終了した。午後から始まる個人戦に向けて全員が足早に会場を後にする。時雨しぐれと光葉みつはの二人も例に漏れずいったん道場へと帰還するために元来た道に戻っていた。

「それで…？あなたの思い通りにはなったの？」

光葉もようやく時雨の突飛な行動に動じる事も少なくなったようだ。半ば呆れたように聞いてくる。

時雨はいつものニコニコとした顔で人差し指を一本立てて光葉に向けて、チツチツと指を振った。

「思い通りになった、ではありません。今から自分たちの手で思った通りにするのですよ。まだ始まったばかりなのですから」

「あ、そ」

それよりも午後の個人戦ですよ、と時雨は追及を避けるように歩く速度を上げた。

「そう、わかったわ。私も丁度仕事が終わったし、準備しましょう」
卓上の書類の束を纏めて脇に寄せると短刀を手にとる。

少しの疑問を胸中に秘め棗は立ち上がった。

「よかったですね、組み合わせに運があったようで」

「ええ、まったく不自然な程に公平なようで」

『ほ組』に割り当てられたチームは五組。

ここ数年の傾向から八茅草は武納倉か藤堂の画策により決勝進出不可能な程の激戦区に入れられることが殆どだったのだが今回は違った。

順当に行けば十分二位にはなる事が出来る組み合わせ。それが時雨の仕業とは知らない棗は首を傾げるばかりであった。

「全く、よく言うわね…」

事情を知る光葉は呆れ声でぼつりと呟いたがそれが棗の耳に届く事はなかった。

午後の個人戦は八茅草の色帯全員と白帯の上位組まで全員が出るという大規模なものだ。早々に会場へと赴かねばならない。

棗は部屋の掛け軸を一瞥すると髪を一つに結び直し、部屋を後にした。

「ついに、この日がやってきました」

平時ならば鍛錬の声が響き渡る稽古場。しかし今は八茅草流ほぼ総員が一堂に会し棗の言葉に耳を傾けていた。

そこには当然、光葉や翼、時雨の姿もある。稽古場の異様な熱気はここ数週間の、いや八茅草の門を叩いてからの成果を試す絶好の

第二十三話 団結、出陣の時（後書き）

これで次回からは個人戦です。暫くは御前試合でバトルバトルする事になると思うんですが間にサブストーリー？のようなものを挟もうか悩んでいるところです。

では意見感想お待ちします。

第二十四話 乱流と、変人

『予選ブロック【に組】 第四チーム、きよすみ 清澄 さいが 砕牙 + α』

「あ～…？なんだ、今年は随分マトモな組み合わせじゃねえか」

男は背中に巨大な両手剣を担ぎ首を傾げた。

周囲からはあからさまとも言える敵意が向けられていたが気に留める様子はない。

そんな男に近づいて行く長身瘦躯の歪んだ笑みを張り付けた男が一人。

「どおやら元々不正な抽選にさあ～らに不正を加えた者がいるようですねえ」

「カッカッカ！テメエの言ってた例イレギュラーの男か！」

砕牙は腰に手を当てて豪快に笑う。砕牙にとっては組み合わせなどはどうでも良いようだった。

みぎわ 汀は片眼鏡をつい、と人差し指で押し上げると視線だけを動かした。

「ダークマター 解析不能な物質を用いた簡易使役魔の行使といったところでしょうかねえ。私にすら解析できないとは…やはりいかなりの腕の術者と言えるでしょおか」

視線の先にいるのは愛妹の隣に座っている男だった。ウイルスを伝い解析したにも関わらず簡易使役魔という事しか分からなかった術式。

完全オリジナル、若しくは時雨の言葉を信じるなら未来の完成さ

れた術式という可能性もある。

だが汀の顔には悔しがるような表情は一切浮かばない。ただ微笑みを浮かべるだけであった。

「ひとまずは今日の個人戦。カカツ！楽しくなりソオだぜ」

碎牙は握りしめた拳を突き合わせると顔を歪ませて笑った。

昨年度個人戦、異例の無所属の五本指は最凶の変人と組み団体戦に乱流を生み出す。

その日の午後、会場は王都、いや王国中から人が集まったのではないかというほどの人で溢れ返っていた。

普段閉鎖的な四家の異能の力を存分に用いた戦いは見る側にとつては一種の娯楽であり、当然ながら賭けも行われている。

「おお！あれ武納倉流じゃないか！？」

「あれが四家、剛の武納倉……。よし！俺は武納倉の第一チームに賭けるぞ！」

王城の城壁内部に入る事が出来るというのも大きいだろう。御前試合用の闘技場自体が王城の敷地内にあるため、式典以外ではほぼ唯一王城へと入る事が出来る機会なのだ。そのため普段以上の厳重な警備が敷かれてはいるが見張りの兵士が浮足立っているため効果のほどは保証し難いようだ。

「あー！あれ藤堂流の師範代様方じゃない？」

「えっホント？はああ、やっぱり麗の藤堂よねえ。武納倉のおっさ

ん達とは物が違うわね」

当然宿もこの時期だけは全部満室になる様で、闘技場に近い宿に至っては半年前から予約が殺到する有様である。この時期だけ家を民宿として開放する家も少なくない。

それほどまでに首都中がお祭り騒ぎに興じる時期だった。

「あれは…どこ…？」

「えーと…たしか、やー…八草？八茅草だ！」
やちくせ

他の二家に比べ、八茅草は知名度が圧倒的に劣る。それもそのはず、門戸の開き方の差が門下生の数に顕著に表れていた。

それに合わせて、時代に合わせて道場を街中に移した武納倉、藤堂と違い八茅草は未だに王都の外れにある半ば隔離された場所にあった。

量を重んじた武納倉、藤堂は護法士の数も十人以上いる。

「ははは、どうやら八茅草は倍率が他の二家に比べかなり高いようですよ。賭けてみます？」

賭けの掲示板を見ていた時雨は腹に手を当てて笑っていた。
それを見た棗は額に指を当てて瞳を閉じる。

「あのですね…出場選手は自分にしか賭ける事はできませんよ」
「わかってますよ…すみません。これ全部、八茅草の団体戦優勝に単勝でお願いします」

時雨はどこから取り出した大きめの布袋をカウンターのの上にドスツと置く。

それを見た受付と八千草の面々は各々の驚きの声をあげて目を見

開いた。

「なっ、あんたそんな金どこから」

「元々の手持ちです。全財産ですから頑張ってくださいね」

その袋の中には平民が一生を過ごせる程の金貨がぎっしりと詰まっていた。

八茅草の顧問の本気を感じ取って八茅草の面々は開いた口がふさがらなかったという…。

第二十四話 乱流と、変人（後書き）

今回も短めの更新でした。

では意見感想お待ちしております。

第二十五話 開幕宣言、最凶タッグ？（前書き）

王様登場です。とはいってもこれ以降出てくるかは分かりませんが。

第二十五話 開幕宣言、最凶タッグ？

『さあさあさあ！会場の皆様！年に一度のカーニバル！御前試合、遂に開幕の時を迎えました！それでは開幕にあたり我等が国王に開会宣言をお願いしたいと思います！』

司会者の一言で会場はシン、と静まり返った。

貴賓席の中央、王族の席から一人の男が立ち上がりマイクを受け取った。

三十代前半という若さで王となった男は観客を見渡し、台座に上る。

『古今東西の流派、王国に限らず世界各地より訪れた一騎当千の戦士達よ』

手を横にゆつくりと薙ぐ。

観客の視線が全て自分に向いている事を肌で感じ取り言葉を紡ぐ。

『太平に近づきつつあるこの世の中、力を持て余す者達よ。喜ぶがいい、今貴様達の飢えを満たす場を与えよう』

尊大に、大袈裟に王は上から語る。

自らの力を、権力を誇示するかのように拳を握る。

『真の強者に望むモノを与えよう。我の望む者はたった十人の強者。我に仕える最初の五本指は無双の者でなければならぬ』

観客に拳を向けると、その五指を弾いて広げた。

『さあ、始めようではないか！宴を！思う存分その力を奮うがいい！今、これより御前試合の開幕を宣言する！』

「「「オオオオオオオオオオ！！！！」」」

静まり返っていた客席から地鳴りがする程の歓声上がる。

王はその歓声に満足すると羽織っていたマントを翻し台座から下り席に着いた。

歓声は暫くの間続き、その間にステージでは準備が進められた。

『只今からステージでは我等の誇る武術四家の一つ藤堂家による演舞を行います。個人戦の準備が整うまでしばらくお待ちください』

広いステージを使い煌びやかな衣装を身につけた男女が様々な術式を用いて舞う。

一般人から見ればそれらは馴染みのない幻想的な光景に見えるのだろう。

「あいつかわらずの趣味の悪さねえ」

藤堂のテカテカとした衣装に呆れた様子で光葉は肩を竦めた。
しかし観客席の一部からは黄色い声援が飛び交っている。

「わあーたしにはなかなかのモノに見えますがねえ？光葉？」

「げ…兄貴」

光葉はすごく嫌そうな顔をして横を見上げるとそこには変人が立っていた。

更にその隣には大剣を背負った男も立っている。

途端に出場者控室がざわざわとし始めた。周りの人間が一步距離を置く。

「おい、ありやあ…」

「ああ、【最凶の変人】きとつみぎわ鬼頭汀に五本指【乱流】きよすみさいがの清澄碎牙…今年
は団体戦でタッグを組むという話は本当だったのか」

そんな周りの声は八茅草の面々にもしつかりと届き…。

「「「はあ!?!」」」

棗や光葉、翼、時雨を含むその事実を知らなかった面々が声を揃えて驚いた。

そんな声もどこ吹く風、二人は何もなかったかのように演舞を見ていた。

「（元の歴史では一人で出場だったはずッ。細かい歴史までが…変わり始めている…?）」

時雨は汗が一筋、頬を流れるのを感じた。

時雨の顔を見て満足したように碎牙が笑みを浮かべた事に気がつく者はいなかった。

第二十五話 開幕宣言、最凶タッグ？（後書き）

次回は個人戦予選ブロックの説明、次々回予選開始の予定です。
意見感想お待ちしております。

第二十六話 指導、解析依頼（前書き）

今回はいつもより少し長めです。切って二話にしようとも思いましたが早く予選開始したいので一話にまとめました。

第二十六話 指導、解析依頼

「まず、個人予選ブロックは乱戦バトルロワイアルで行われることが分かっています」

指示棒を取り出して黒板を軽くたたく。

八茅草流やちくさりゅうに与えられた控室には緊張した空気が漂っていた。

「そして、私の情報筋からの情報ですが単なる乱戦ではなく、特殊ファイールドな戦場を用いた実践形式のものだという話があります」

ざわ、ざわと声上がる。一旦そのざわめきが収まるのを待ってから言葉をつづけた。

「この事からも分かる様に、実戦経験の乏しい我々には大変厳しい状況です。一部の方には実践稽古を行いました」

そう言つてチラリと翼たすくと光葉みつはの方を見る。二人共コクリと軽く頷いた。

棗なつめの厳しい視線を軽くいなしてもう一度黒板を叩く。

「それだけであれば逃げ続ければ勝てると思う方もいるかもしれませんが今回の予選はそういう訳にもいきません。なぜなら得点制ポイントによる審査が行われるからです。一人に対して自分を含め一点、三点を取った者が戦場の一定の場所に辿り着いた時点で勝ち抜けとなります。これの意味することがわかりますか…？」

そこまでを言い切ると一旦椅子に腰を下ろす。そして一時の沈黙が流れた。

誰も沈黙を破る者がおらず、時雨しぐれが口を開きかけたその時。

「あ…えーと、一度ポイントを取られても取り返す機会がある…逆もまたあり、ということでしょうか」

おずおずと翼が声を上げていた。全員の視線が翼に集中する。顔を真っ赤にして小さくなった翼に救いの手を差し伸べるように時雨は指示棒を翼に向けた。

そうする事で視線は時雨へと集まった。

「そう、全くもってその通りです。仮に一度倒され点を失ったとしても三点を得る事が出来れば予選は勝ち抜けます。逆に三点を得る事が出来たとしても指定場所に辿り着くことができない、もしくは点を奪われれば負けです」

油断、其即ち敗北ですと言葉を切り、指示棒を掌に叩きつけた。パシンと乾いた音が部屋に響く。

再び椅子に腰を下ろすともうこれ以上言う事はないというように目を閉じた。

それを皮切りに部屋中で小さな声が上がる。隣同士で話す者、円を作る者、一人で考え込む者、それぞれだった。

そんな中翼と話し込む光葉だけが、その視界の端に時雨を映し鋭い眼光で射ぬいていた。

更に棗が一人部屋を出て行った事にも気がつく者はほとんどいなかった。

「おやあゝ、どおしましたか？ 集団の頭が抜けては纏まりがつかないのではないのですかねえ」

「それは大丈夫かと、今は彼が場を取り持つているようですし」

突然の来訪に変人は少しの驚愕の色を声に乗せた。汀は手に持つていた分厚い本を閉じると来訪者に席を勧める。

席に着いた来訪者は懷から小瓶を取り出した。その中には水が張つてあり何か小さな物が浮いている。

その何かは僅かに発光しており、一對の羽根の生えた人の形をしていた。

「あん？珍しいな、あんたから訪ねてくるなんて」

碎牙がふすまの向こうからひよっこり顔を出して軽口を叩く。だが汀の顔は真剣そのものだった。

「それはあ…まあさかとは思いますがあ…」

「ええ、敷地内を徘徊していたわ、それも複数体がね。そのうちの一匹を水で捕えて封印してあります」

彼女の神靈護法の真骨頂はその蒼の力を用いて古代の神をも鎮めたとする【封印】の力。その力をもってすれば容易いことであつただろう。

汀は小瓶を受け取ると片眼鏡を近づけると上下左右様々な方向から観察した。見れば見るほどに険しくなっていく汀の表情に空気は重くなっていく。

その空気を感じ取ったのか碎牙も寄ってくる。碎牙はその小瓶を覗き見ると思わず大口を開けて何かを言おうとしたがギリギリのところで踏みとどまって汀に尋ねた。

「おい、それはナンだ…」

「これはあ…そおですねえ、この世界のモノではないですねえ…」。

守護霊、いや天使の類でしょおかあ」
エンジェル

「私が知りたいのはそれに関する情報、その及ぼす効果です。対価としてはそれを差し上げるといふ事でどうでしょうか。」

ちらりと汀は来訪者を一瞥すると再び小瓶に目を戻した。心なしか右の赤い瞳が微かに発光しているようにも見える。

一通り見終わると机の上にコトリと置き、腕を組んだ。その眼差しはよろず屋店主の眼だった。

「まあだ一通りしか見いていないので詳しくは追って知らあせますが、恐おらくは外部からの干渉の監視とそれに伴う均一な場の形成といったところでしょうおかねえ」

「実害は？」

「むうしろ、術式などが使いやあすくなるはずですねえ。害はないといえるでしょうおか」

「そう、ですか」

来訪者は立ち上がるとクルリと反転して背を向けて部屋から出て行こうとした。

「最後おにひいとつ…やはりこおれも彼の仕業だと思いまあすか？」
「ええ、そう思うわ」

これ以上用はないとばかりに足早に去って行った。
来訪者のいなくなった部屋に静寂が下りたが、その静寂は碎牙によって破られる。

「オイ、言わなくて良かったのか？」

「ええ、聞かれていませんからねえ…ツクク。こおれに妖魔の氣が含まれていいいるという事はこれが妖魔と同じ次元のものだとい

「うことでえすからねえ」

「逆算すれば妖魔がわんさか、って力？カカカツ、恐ろしいねエ」

碎牙は口角を擦じ上げると舌舐めずりをして笑った。
だがその瞳は一切の微笑みすら浮かべていなかった。

第二十六話 指導、解析依頼（後書き）

因みに個人戦予選の形式は某ハンター漫画の試験が元です。時間区切りではないところや、点数の配点などが違います…。分かる方はそれを思っていただけばいいかと思います。

それでは次回よりやっと、やっと御前試合予選開始です。御前試合が終わるのに何話かかるのでしょうか…（汗）

意見感想お待ちしております。

第二十七話 変容、開戦

「いえ、こうなるとは思っていましたが…。あえて聞きましょう、なぜあなたがここにいらっしゃるんですか…」

なつめ
棗は最近よくするようになった深いため息を一つつくとその原因の大半となっている男へと疲れた目を向けた。

伸脚をして体をほぐしていた時雨は爽やかに微笑むとサムズアップをして見せた。

「当然、選手ですからね。選手が試合会場にいる事におかしなことはないでしょう？」

明らかに無駄な爽やかさを演出する時雨の背後には光が舞っているかのような錯覚を覚えた者がいたとかいなかったとか。

いやいや、そこじゃない、そこじゃ…と額に手を付いた棗は会場の中でも一際注目の集まっている方を向き、彼を囲んでいる歓声の数に再びため息をついた。

王都タウゼンガルド王城敷地内闘技場の予選第四組試合会場には一番多くの注目が集まっている。

その理由は様々だが一番の理由として、四家以外の優勝候補筆頭が見られるということが挙げられる。彼に賭けた者、本選へ向けての敵情視察等各々の理由は様々であるが、共通している事が一つあった。

それは、彼が最強の五本指に名を連ね、名勝負を繰り広げるであ

ろうという確信にも似た予想であった。

「カカカツ！人気者はツライねえ」

件の男は注目を一身に浴びて、上機嫌で佇んでいた。

彼にとっては予選はあくまでも一つの通過点、通過できて当たり前の事である。だが今回に限り、彼はこの予選を楽しみにしていた。碎牙の注目していたのは一人の男。イレギュラー玩具を見つけた子どものような顔と獲物を見つけた肉食獣の顔を併せ持つ表情を顔に浮かばせていた。

その視線に気がついたのか時雨は相変わらずの爽やかさでヒラヒラと手を振り返す。それをみた碎牙は正直、引いた。

「逆に怪シいな、オイ……」

少し遠くに移動した碎牙だった。

『時雨様……』

『どうした彼方、心配事か？』

隣に顕現した彼方を見ずに準備体操を続ける。

『いえ……いつもと様子が違うもので、皆様気にしますよ？とても楽しそうにしていますし……』

『張り切るさ……俺には使命があるからな』

そこで一旦区切り、軽く刀を振る。平時よりも少し重量を感じるそれに顔を顰めると鞘に収めた。

『俺が全力で戦えるのはもう長くないだろう。それまでに全てを終
わらせなければならぬ……』

『え……』

『最後の戦いで怪我だけではない……この世界が、俺を締め出そう
としているのを感じるんだ』

『だが、こっちも悠々と待ってるわけではない。既に打てる布石は
全て打ってある……』

時雨は驚愕を見せる彼方を見やり、招集をかけられた場所へ歩い
て行った。

予選第四組の会場は『岩場』。岩の森とも形容できる背の高い岩
が立ち並ぶステージだ。

因みにこれらの岩は本物ではなく、王の五本指らの術式によるも
のだ。

しかしその再現率はまさに本物。戦闘領域内ではそれらの岩はま
さに現実のものである。

『それでは、各々所定の位置についてください』

個々に渡されたバッチの指し示す場所へと選手が散り散りに歩い
て行く。

二十人の戦士達は昂る心を抑えた。

『時雨様……先程の答えでは答えになっていないのですが……』

時雨が所定の位置に辿り着くころ、彼方がおずおずと時雨の横に浮かび上がる。

「ああ…楽しそうに…か。そうだな、演技でもしないと隠せそうもないんだよ。この昂ぶりをな」

そつと時雨の顔を覗き見た彼方は思わず肩を震わせて後退した。眼を細く開き、舌舐めずりをする主人は殺気だとか闘気だとかいうものではない、獣が持つ【獯猛】な気を垂れ流していた。

「くっはっはは…三つの『結い目』は順調に移動しつつある。世界の闇が解き放たれる日も近い」

遠くで、鐘のなる音が聞こえた。それと同時に客席の方からは歓声怒声が飛び交う。

「さあ…時を与えようじゃないかッ!!」

時雨は大きく一步を踏み出した。

一歩一歩速度を上げて行き、岩の隙間を縫うように滑りぬける。それに追従するように彼方は二対の羽を羽ばたかせた。

時雨の視界に写っていたのは一人の、巨大な両手剣ツヴァイ・ヘンデルを掲げた男だった。

同時に男もまた時雨を見据えていた。同じ性質の獣の笑みを浮かべて、顔を大きく歪ませていたのだった。

第二十七話 変容、開戦（後書き）

お久しぶりです…。ちと最近忙しくて筆が進みませんでした（汗）
これからしばらく忙しいですが最低週一を心がけて頑張りたいと
思います。

評価感想よろしく願います。

第二十八話 観客席、乱流（前書き）

時系列的には今回はほとんど進みませんです…。

第二十八話 観客席、乱流

岩の森：森とは言うものの実際の森と比べれば圧倒的に視界は開けていると言っているだろう。

柱があるとはいえ、枝葉はなく上空も開けている。足ともぬかるんでいるなんて事はなくしっかりと乾燥した硬い地面だ。

「まア、オレっちに向かってくるヤツあいネエだろおし、ゆっくりと行きますかねエ。アイツとは本選で会えばいいし」

砕牙はゆっくりと腰を落として座り込もうとした…。
が、次の瞬間に勢いよく顔を振り上げた。

その視線の先には一匹の獣が写っていた。

砕牙は両手剣を杖に立ち上がると、ゆっくりと獣に向かって構えた。
同時に砕牙の周囲の氣の流れが変わっていく。

「【乱流】…」

戦場から少し離れた客席、翼と光葉はそこから予選第四組の試合を見ていた。

二人は試合前に時雨からしっかりと見ておくよう言われていたのだ。

「こうしてちゃんと見るのは、初めてだね…」

翼は二人に目を向けたまま小さく呟く。

以前戦った時は使われるまでもなく敗北した。

「あれが、護法士と互角以上に渡り合う【剣士】清澄碎牙の能力…」

そう、清澄碎牙は護法士等ではないただの剣士である。

護法士と一介の武芸者の越えられない壁を突破し得る力、それが彼の【乱流】と呼ばれる能力だった。

碎牙を中心として展開されるその能力は範囲内における術式や神靈護法の源である聖霊力や氣を読んで字の如く大幅に乱す嵐を引き起こす。

術式の行使が出来ないわけではないが、十分な制御力を持っていなければ発動を乱され自分へと襲いかかる。その力は一流の護法士ですら下位の術式を打てるかどうかという所であった。

もちろんその影響は術式のみ留まらず術式の付与された物品にすら効果を及ぼす。汀が商品に近付かれるのを嫌うのはこの能力の影響があるからである。

普段は体を覆う程度に留まっている【乱流】は必要に応じて展開される。そして碎牙は前大会では殆どこの力を使わずに戦っていた。即ち、それ程時雨を危険視しているということに他ならない。

「この戦いで時雨さんの本当の力が見れるのかな…」

「時雨の言っていることが本当ならそうなんですよ」

二人は時雨と予選前に言葉を交わしていた。

その時の時雨は先程とは打って変わって真剣な目で自嘲するような微笑みを浮かべていた。

『この戦いで、彼の本気を引き出します。あなた方はそれを目に焼き付け、脳に刻み、自分が勝つために必要な事を今一度考えてください。それが私からのさ…いえ、今はいいでしょう。行って参ります』

そして約束を果たすかのように時雨は開始と同時に碎牙の方へと疾走を始めていた。

他の選手が様子見のために殆ど動かない中、観客の注目をひき寄せるかのように走っている。

観客席からも時雨が誰なのか問うような声がいくつも上がっていた。その声に応えるように拡声器から声が響く。

『おおーっと、予選第四組！開始早々動きがありました！な、なんとあの【五本指】に名を連ね、決勝進出確実とされる清澄碎牙選手に猛然と迫る選手がいます！』

声が響いている間にも【乱流】の効果範囲と時雨は近づいていく。

『えー、手元の資料によりますと…彼の名前は時雨！調査班の調べによると現在あのタウゼンガルド武術四家に名を連ねる八茅草流の客人として滞在しており、指導する様子も確認されているとの事です！…』

どこでそこまで調べたのだろうか…光葉はがっくりと項垂れると同じ会場にいる棗も同じことを思っているんだろ…うなあと思いつつ額に手をあてた。

そしてついに時雨と乱流の効果範囲が肉薄し…次の瞬間時雨の体を乱流の洗礼が襲ったのだった。

第二十八話 観客席、乱流（後書き）

今回は殆どが乱流の説明の話だったような気がします。
拙い説明で分かりにくい部分があったと思います（汗）
その時はぜひ分かりにくかった部分を教えていただければ幸いです。

では次からは直接対決です。意見感想お待ちしております。

第二十九話 暗闇の部屋、衝撃

周りを見渡してもそこは薄暗くて、燭台にのった蠟燭の細い光のみが頼りだった。

時雨と碎牙が丁度戦闘を開始した頃、必要のない光を一切排除したその空間には一つの机と何に使うのか見当すら付かない器具が沢山配置してあった。管が所々から突き出ている蒸気を吐き続けるフラスコのようなもの、ひたすら狂ったように球体の周りを回り続ける輪、それらすべてが稼働しているようだ。

しかし、使用用途の分からないそれらは離れて見ると一定のリズムを刻み、モールス信号のような規則正しい光の明滅を発しており、全てが連動した実験器具である事が分かる。

だが『何をしているか』と問われればそれは器具を扱う本人しか分からない事だった。

それぞれの器具がどこにあつてどうすればいいのかが分かっているかのように見ずに動かし続ける男が一人。

何やら実験をしているようで、男はその行為と部屋の雰囲気実に合ついやらしいマッドサイエンティストの笑みを浮かべていた。

どうやらあるものを実験対象として観察しているようだ。

机の中央から少し左に鎮座した握りこぶし大の水晶の中に浮かぶものの反応をつぶさに観察して、紙に高速で何かを書きなぐっている。

狂気を孕んだような必死さでガリガリゴリツとペンと机が悲鳴を上げる。

少しの後、ガバァ！と顔を勢いよく上げると、真上の天井に向か

つて目を見開き、口を最大限に釣り上げて笑い、手の中にあるペンを最後の一字を書き終えると同時に握りつぶした。

愉悦に浸るように手を横に伸ばし、大きく荒く息を吐いた。

そしてその様子を感情の無い瞳で見上げるモノがあった。

それは机の中心から少し左にずれた所にある水晶玉の中にいた。人をそのままスケールダウンしたような小人は羊水の様な物にぶかぶかと浮かび、体操座りで男を見上げている。

小人は実験器具を放り出したまま満足したように部屋から出て行く男を見届けると、ヒュツと音を立てて主の元へと帰還したのだった。

しばらくして蠟燭の火も消え、部屋にはもう動いていない器具と乱雑に置かれた紙の束が残るだけとなった部屋に一人、入って来る者がいた。

侵入者は少しふらつきながら、しかし迷うことなく机へと歩みより、水晶玉の中を覗く。今はもう静止している器具を一通り見るとその脇に乱雑に置かれている紙に気付き、手に取った。

懷から取り出した紙に一部分を書き写すと元の位置に、それこそ紙一枚一枚の向きすら揃えて奇麗に戻す。

出て行ったあとには何もなかったかのような暗闇がただ残るだけであつた…。

「きゃっ…何、今の」

会場内の廊下を歩いていた光葉は突然の衝撃に軽く声をあげた。戦いの場として作られたこの会場は当然強固に作られている。そ

れなのにここまでの揺れは異常な事だった。
氣づいた時には光葉は翼の元へと駆け出していた。

「翼どうしたの？翼？」

「……………」

「むう、せいッ！」

「うわぁっ！光葉！」

少しの間席を立っていた光葉は固まっている翼の顔を軽く弾くと隣に腰を下ろした。

驚いた翼は一瞬光葉の方を見るがすぐに会場の方に視線を戻す。それを不審に思った光葉は訪ねた。

「で、どうなってる？というか何があったの」
「……………」

時雨と碎牙の戦いは数合の打ち合いの後、睨みあいになった。それを見て当分続くと見た光葉は席を立っていたのだ。
しかし翼は何も答えない。それを見た光葉はもう一度叩いてやろうかと思つて腕をまくったところで、異変に氣がつく。

「（会場が…静まり返っている…？）」

先程の振動にも関わらず悲鳴や退避のアナウンスが聞こえない。という事は戦闘を行っている事で起こった振動である。

そして碎牙は【乱流】の影響で大規模術式は使用できない。

「まさかッ……………！？」

光葉が驚愕に目を見開いて予選第四組試合会場へと目を向け時雨を捉えるのと、会場に驚愕と歓喜の声が爆音となって響き渡るのはほぼ同時の事であった。

戦いの場に時雨は佇んでいた。

周りの岩は全て薙ぎ倒され更地になっている。

その更地に残っているのは時雨のみ。

もう一人の男、五本指の清澄碎牙の姿は…

既になかった。

第二十九話 暗闇の部屋、衝撃（後書き）

なんとこれで全部合わせて30部分でございます。一つ一つの分量が短いのが残念ですが…（汗

番外編の一つでも挿入しようかなと考えているのですがどうしましよう。

それはさておき何やら舞台の裏の部分でも少し動きがあったようです。これがどう影響してくるのでしょうか。

表の予選では結果のみの提示となりましたが次話で戦いを書くのでこうご期待（?）。

ついでにと言ってはなんですがこの作品では現在は時雨が最強です。次第に力が落ちて行くとはいえ基本的に時雨は最強というスタンスで行きますのでどうかよろしくお願いします。

では意見感想お待ちしております。

第三十話 焦り、種（前書き）

ついに戦いが始まります。長かった…。

第三十話 焦り、種

「あ、光葉お帰り厠にでも行ってたの？」

「…乙女に向かって厠なんて言わない！ちよっと…会場の見学をね」

「なんだあ、それなら僕も誘ってくればよかったのに」

「え、いやまあ…そうね、次は誘うわ」

少し齒切れの悪い光葉の言葉に翼は首を傾げるが追及はしない。

二人は一瞬視線を交わすと会場へと視線を戻した。

「で、何が起こったの？結果はまあ見ればわかるけれど」

「うん…すごかった…」

翼は少し震えた声で先程起こった事をゆっくりと話し始めた。

「ふ…久しぶりだな、あの力を目前にするのは」

『【乱流】…、忌々しい力です』

突進後、数回の攻防の後に一旦離れた二人は対照的な表情を見せる。

悠々といつも通りの表情を浮かべリラックスしている時雨と少しばかりの怒りの表情を浮かべて身構える彼方。

よく見ると彼方の姿の所々にノイズが走り、【乱流】の効果範囲内にいることを物語っている。

「今の俺の剣だけであの男に挑んでみたいという気もするが」

『不確定要素を含む戦いは今後の計画に大きな支障をきたす可能性

があるのでは？」

彼方に先を越され、軽く自分の右上を睨む。

「まあそういう事だ」

時雨は今一度剣を構える。己の心のままに。

「どオいうこった…こんなヤツ聞イたことネエぞ…」

一分の隙もなく両手剣を敵に向かつて構えると、自分の頬を冷や汗が伝うのを感じた。

初撃の圧倒的なスピードと当たる気配すらない回避能力。

それらは過去に碎牙が出会った武人の中でも最高位に位置するものだった。そしてなによりも両手剣という重量級の武器を扱う碎牙にとってはこの上なく戦いにくい相手でもある。

現在も間合いのはるか外で悠々と構えを半ば解いている。

「クソッ…とりあえず当たってみネエ事にはわからねえか」

唾を吐き捨てると両手剣を旗を掲げるように上段に構え、地を蹴った。

己の力の絶対的自信を取り戻すために。

「来たか」

砂煙をあげて、大剣で風を斬り、暴走する列車の如き勢いで迫る碎牙に目を細める。

確かに成長した自分の剣技であれば負ける事はないという自信はある。だがしかし、碎牙も五本指に名を連ねる一人、自負は油断を産み敗北をもたらす事は理解していた。

「さて、ここで問題だ。【乱流】という厄介きわまりない能力がある場所で安定した神霊護法を行使するためには？」

『押し流されない程度の制御力で以って力を行使することでしょうか？』

時雨の突然の問いに対して彼方は疑問符を用いて返す。
すると時雨はククツ、と笑い違うねと呟いた。

「では次の問いだ。我らが八茅草流、その極意とは？」

『幻^{グン}…だったでしょうか。幻^{まぼろし}を操り、困惑を引き起こす。』

「そう、幻により八茅草は魔を惑わす。だがこれには少しの誤解がある」

こうしている間にも碎牙は迫るが、時雨は気にした様子もない。

「幻を用いて惑わせる、これに違いはない。だが、その元となる幻はどこから来る？そしてまやかしかただけで本当に魔を討ち倒すことはできるのか？と言う問いを持った者がいた…」

『まさか…、時雨様！それは危うすぎます！もし勘付かれでもしたらッ…』

そこまで言うてから彼方はハツと気がついた。と言うよりも思い出した。

時雨が戦う前に告げた言葉を。

『あなた方はそれを目に焼き付け、脳に刻み、自分が勝つために必要な事を今一度考えてください…』

時雨は幼き者たちを真理に近付けるために、閃きの種を蒔くつもりなのだ。直接教える事は時雨は元より、二人にまで世界からの肅清が及ぶ恐れがある。

だからこそ、種。あからさまに力のある相手に必要以上の力を振り、勘付かれる事だけはあつてはならない。

それ故の碎牙。当然ここで碎牙を相手にするという事は他にも思惑があつての事であつたが、種を蒔くために【乱流】以上の恰好の能力はない。

何故なら、【乱流】をどうにかしなければ、勝てない可能性があるからだ。

「生きとし生けるものならば、打ち倒す事が出来る。例え、それが神であろうとも」

時雨は言葉を紡ぐ。

再度覚悟を決めた、その視線は碎牙ではなくその後ろにそびえるモノに向いていたのだった。

第三十話 焦り、種（後書き）

お久しぶりです。初めての方は初めまして兄疏です。

PCの故障により更新する事が出来ずにずるずると二カ月が経ちました。その間にこのサイトもリニューアルしたようで、ついでに作者の心もりニューアルしてくれと言ったところです。

しかし、その間にアイディアは色々と書きためておきましたので（この作品で使うかどうかは別にして）創作意欲は湧く一方でございます。

2 3日に1回…とまではいきませんが1週間に1話位は頑張つて…、できるだけ…、多分…上げていけたらなと思います（汗）

では、今回はこのあたりで

ご意見並びに評価感想お待ちしております。

第三十一話 欺き、悪戯猫（前書き）

前回から比較的にちを開けずに更新できましたが相変わらず短いです。

第三十一話 欺き、悪戯猫

「生きとし生けるものならば、打ち倒す事が出来る。例え、それが神であるうとも」

【乱流】という前提条件が邪魔であるならば、その前提にうまく乗る、力ずくで押し通す、前提自体を破綻させる等といった方法がある。

「そう、例え神の力であろうとも、絶対の力を持つ法則であろうと、この世にある限り…創造時に定められた、若しくは自ら定めたルールに縛られる。それが真の絶対的法則」

そして一度成り立ってしまった条件や法則はその時点で確定する。どうすればどう作用するのか、どうなればどう反応するのか、それらを変革するという事は全く別のモノにすると断言しても過言ではない。

「だが、それらを歪める事こそが我ら八茅草の真の極意」

ならばそれを定めた者を、定められた世界を惑わせよう。理想を一時的に現実、不可能を疑似的に可能に。

一言で言うならそれは…

『世界をも、欺く力…』

彼方がそう呟くのと同時に、これまで流れていた風がピタリと止まる。

それだけではない。時雨の周囲にある物全てが時を止められたか

のように静止する。

「我、六法を束ねし者。今この時、この場所において我こそが神、我こそが世界也……」

傲慢な台詞を自らが定めた結界に浸透させていく。
フィールド

今回設定するのは自分の周囲ほんの一部のみ、慎重に出力を絞り護法術式を組み上げて行く。

幸い砕牙とは十分に距離をとっているため後五秒は持つだろう。

「其は我が命に従い、己が形を変革せよ。それこそが至福となりえるだろう【護法・六法結陣】」

静寂が一瞬だけ、虚無となる。

後二歩で自分の間合いに入ると言う所で、砕牙は自分の進行方向と同じ向きに力をかけて跳び退く。

そして今日何度目かの冷たい汗が頬を伝った。

「ナンだ…オレっちには深くは分からネエが【アレ】はやベエ……」

心臓の近くがゾワゾワとする。そして右の目じりが軽く痙攣する。砕牙の警戒が最大になった時に起こる現象だった。だが、ここで砕牙は逆に落ち着く。

「落ちつけ、【アレ】が何力まだ分かった訳ではナイ。でも、カカツ…カカくはっ……」

当然自分に言い聞かせる事自体が自分が普段と異なると言っているようなモノだとはわかっている。

だがそれでも…。男は気付いてしまった。

「あア…ヤバい。オレっち…抑えられるかナアああ、カカカカカカ力！」

思わず前のめりになって、腹を抱えて大きく息をつく。目を見開いて口はだらしく開かれていた。

それは未知の財宝を目の当たりにしたような興奮、困難な目的を達した時の様な高揚感等が入り混じっている。

清澄碎牙という男は好奇心と独占欲の塊のような男だった。欲しいものは必ず手に入れ、自分のモノに対しては絶対的な支配を行う。未だ底の見えない男に未知の術式、そしてその男が自分を狙ってきている。清澄碎牙と言う男を奮えさせるには十分だった。

「カカツ、カカカ！オレっちをオ、楽しませてくれヨオオオ！」

碎牙には【乱流】がある。故に殆どが純粋な武器同士の勝負しか経験した事がない。

遠距離からの攻撃なども弓矢など以外は当然受けた事がない。何故なら術式で練られた矢は【乱流】に入ると同時にかき消えるからだ。

つまり、物理的な手段の戦いしかしたことがないと言ってもいい。

そして、碎牙は時雨に襲いかかった。

刀を構えてはいるが受ける構えを見せない。否、追いつけないのか。

半瞬遅れて碎牙の刃を仰ぎ見た時雨は少しの驚愕を顔に浮かばせていた。

充分に加速の乗った一撃。時雨の刀が直接受けとめるという防御を不得手とする以上、避けなければいけない一撃。

「（勝ったッ…！）」

明らかに回避不可能。勝利を確信した碎牙は逆に失望していた。自分が特別視した相手はこの程度のものだったのか、と。しかし、その考えは一瞬の後に逆転する事になる。

ガツキイイーン！

碎牙は目を疑った。自分の【乱流】の中で術式をいとも容易く展開した事。

そして、その壁をすり抜けるように突き出された時雨の手に…。

「ハンニバル悪戯猫の扉…」

時雨の一言がかろうじて耳に入り、碎牙の意識は暗転ブラックアウトしたのだった。

第三十一話 欺き、悪戯猫（後書き）

こんばんわ、おはようございます、こんにちわ、兄琉です。

この戦いが始まってから五話目…五話位で片付くと思ったのですが（汗）

せめて後二話位で終わらせようと思います。長引いたら三十五話位まで行くかもしれません。

では、ご意見、評価感想お待ちしております。

第三十二話 疑問、仕返し（前書き）

決着はまだ尽きません。

第三十二話 疑問、仕返し

「豊穰を司りし王よ、その混沌と厳格なる法の頭脳をもつて、六万の師団をも打ち払いし気紛れな扉をここに顕現せよ。忘れるな、我こそが館の主。二度目の失墜はないと知れ！」

時雨は事前に術式の展開準備を進めていた。

そこへ丁度碎牙の刃が迫る。それに対して時雨はゆっくりと仰ぎ見ると発動のキーを放った。

「ハンニバル悪戯猫の扉……」

一方通行の不可視なる壁は碎牙の剣を完璧に受け止めた。

そして、次に放たれた時雨の掌底はまるで何もないかのようにすり抜け、確実に碎牙の顎を打ち砕く。

十分な強化の術式が込められた掌底こうげきは碎牙を軽く数メートルは吹き飛ばす。

飛んでいる途中で気を取り戻した碎牙は地面を跳ねながら力を逃がして体を止めた。

「ガッ……、イツツ。術式、か」

この時、碎牙には驚愕はなかった。本人にとってはほぼ初めての事だったが戦いにおいて初めて、考えが及ばない等と言う事はよくある。

そこでただ驚く訳でなく冷静に分析する。【乱流】と言う特殊な力を抜きにしても清澄碎牙という男は数多の戦いを生き抜いた本物の武者だと分かる。

砕牙はよく目を凝らし、時雨とその周りの空間を睨む。

すると大きな違和感に気がついた。はっきりと見えるわけではない「そんな気がする」程度感覚。

「なま風……」

全くの風の無い状態、【乱流】と言う荒れ狂う嵐の中であって川の中の石のように在る。

だが、川の中の石と違うのはその淵に沿って流れが動いていないという事。まるで何もなにかのように流れが途切れ、本来繋がるであろう場所から通り抜けてくる。

そこだけが嵐の中からすっぽりと抜け落ちているのだ。恐らくはそれが時雨の使っている術式。

「（何もナイ【静】を作り出す、若しくは高水準での空間の支配の術式カァ……？）いや、それ以前に術式かどうかとも分からネエ」

流石に術式を見極める程の知識と能力は持ち合わせていない。そもそもそんな事できるやつ自体が限られている。

「結局、前提を変更するしか無いって事かァ？」

その小さく呟かれた言葉に対して時雨がピクリと反応するが砕牙は気がつかなかった。

「相手が術式を使えると仮定する。カァッ、面倒だな、オイッ！」

ダンッ！

再び、砕牙は時雨へと迫る。

留まる事のない碎牙の暴風のような攻撃を時雨は躲し、時に軌道に剣を滑らせて受け流す。

時雨も武器の性質上、大振りになりがちな碎牙の剣劇の合間を縫って攻撃を繰り出そうとするが加減速を巧みに使い碎牙も攻撃の隙を与えない。

一分程の攻防の中で碎牙はある事に気がつく。それは「時雨はある一定の空間内から動いていない」という真実。

そこから生まれた考えは3つ。『1．自分の囲む風の技が設置型である』『2．何かを仕掛けており、自分をここから離してはならない』『3．他の者を巻き込みたくない』

与えられた情報の中で考えれば一番可能性が高く、危険が分かりやすいものは1。

「（つーカ、2と3に関しちゃオレっちの知ったこちゃねーだ口。分からないしヨオ）」

脳内会議を終了し、碎牙は普通の斬撃に紛れ込ませるように間合いの短くなった横の大振りの斬撃を混ぜる。これまでの反応を見るに時雨はこの攻撃を上へ飛びながら斬撃を下に逸らす事で回避していた。

そして今回も同じ様に時雨はギリギリ当たらない程度まで飛び上がり、刀の流れに添えた。

「（ここだッ！）」

碎牙はその瞬間、これまで流されていた軌道に敢えて乗っかるように自ら軌道を下方修正する。

それにより碎牙の剣は下方向への力が一層高まり、これまでと違い地面へと沈んだ。

ここで、碎牙が事前に打っておいた布石が生きた。碎牙は踏み込

みの際に少しだけ、足にいつもよりも余力を残しておいた。更に予測し自ら落とした剣はこれまでと違い力が流される事なく、削られた勢いを失う事なく体に力を残す。

勢いそのままに碎牙は剣と力の残る足で踏み切り、今だ宙に残る時雨の懐へと飛び込んだ。

「お・返・し・だ・ぜ・エ！オラアアアアアア！！！」

碎牙の全力の掌底は時雨の顎に向かって放たれ、とてもじゃないが打撃の音とは思えない「ゴガアッ！」という爆音が観客席に届いたのだった。

第三十二話 疑問、仕返し（後書き）

次の次…位で決着しそうです。こんばんわ、兄琉です。

そして、この戦いが終わったらの話になるのですが…。

時雨と碎牙が戦っている裏では当然棗さんも試合している訳です。しかし、棗の戦いまで入れると御前試合編自体が長くなってしまう気がして…（一応棗の話も考えてあって、それ自体はそこまで長くはないです）。

ですがそうすると棗の活躍の場が（汗）、まあ一応団体戦がありますけどどうしようか悩んでいる訳です。

と、いう訳でこっちがいいなーって方がおられるのであれば、評価感想やメッセージ等で受け付けようと思います。

では、次回！碎牙の放った強烈な攻撃で時雨はどうなってしまったのか！？

『第三十三話 粉碎、防戦一方』

評価感想お待ちしております。

第三十三話 粉碎、防戦一方（前書き）

普段より少し長いです。

第三十三話 粉碎、防戦一方

「す、す……」

時雨と碎牙の激しい攻防が繰り広げられている中、翼は少し離れた観客席でその戦いに見入っていた。

ここまで高度な戦いを見るのはいつ以来だろうか。恐らくは昨年、御前試合個人戦決勝戦。

現在の王の左手【五本指】の一である【戦乙女】ルースと同様に【五本指】の二である【乱流】清澄碎牙との試合。

しかし今の試合はまた違った。

圧倒的に攻め、手数が多いのは碎牙である。しかし、翼の眼には時雨が負けているようには映らない。

時雨の戦いに翼は見覚えがあった。それは八茅草家現当主（棗の父）、百年来の天才と謳われた彼は強く、そして戦いを好まなかった。

何度も御前試合に出場^でる事を棗が頼んでいた事を翼は知っている。彼が出れば【五本指】に名を連ねる事は確実だと言うのに。

因みに今回当主は滅亡した黛家の隠れ里の跡地が見つかったという報告を受け、調査へ同行している。棗が代理で当主をしているのはこのためだ。

そんな事を考えているうちに戦いは変容を見せる。一旦距離を置いた二人だが、時雨が何かを行っている。そして【護法・六法結陣】を発動させると同時に翼は勢いよく立ちあがった。

「あれは…【六法結陣】…？」

一度だけ、一度だけ見た事がある。しかし、翼も碎牙と同様に見極める事が出来るわけではない。ただ漠然とそこに【静】がある事を感じるだけだった。

前に見たのは現当主の本気の戦いを一度だけ見た事があるから。だが、その時に感じた【静】よりもはるかに完成されたモノを翼は目の当たりにしたのだった。

この観客席の中にこれを見抜けるモノはどれだけいるだろう。そう考えながら翼は時雨の言葉を思い出す。

『八茅草は【幻】、その極意は世界をも欺き、理想を一時的に現実
に、不可能を疑似的に可能にします』

『この戦いで、彼の本気を引き出します。あなた方はそれを目に焼き付け、脳に刻み、自分が勝つために必要な事を今一度考えてください。』

一つは修行中に教えられた言葉、一つは試合前に告げられた教え。

「なっちー、今の見てた？」

「……むう」

翼が会場を見ながら呼びかけるとどこからともなく那智が現れる。唇を尖らせ、思いつきり拗ねて唸っていた。

「ボク、最近自分の隠形に自信がなくなってきたよ…」

どうやら見つかっていた事が悔しいらしい。翼の席を後ろからガン蹴っている。

痛っ、痛いよっ、と言いながらも翼の視線は時雨へと向いていた。一通り蹴り終わったのか那智は光葉の座っていた席に腰を下ろす。

「ふん、あれは術式じゃないよ」

あれは何ていう術式なの？と問おうとした翼の言葉を遮るように
那智が言葉をはさむ。

「まあ、普通のがつくけどね。かといって神霊護法でもない。ボク
がたすつちに伝えられる事は少ないけれど…あれは、【六法結陣】
は八茅草の秘中の秘の一つ。八茅草の始祖が最強と言われたその力
の一つ。そして、世界を変える力…」

「世界を…変える、力…」

「よく始祖である四人は聖霊の強大な力によりこの地を制したと言
われるけど、八茅草だけは聖霊いなくとも他の三人と渡り合えたと言
われてるんだよ。次でボクが伝えられる事は最後…今時雨の周り
には【乱流】が無いんだ。だから時雨は術式を行使する事が出来る」

那智の口から出てくる言葉はその殆どが翼の聞いた事のない話だ
った。八茅草の始祖が最強であるという話も聞いた事がなく、かろ
うじて知っていたのは【六法結陣】という単語のみであった。

翼が那智を呆然と見ていると、突然爆音が響き渡った。

何事かと翼が見た先には、碎牙の掌底の上に立つ時雨の姿があっ
た。

「なッ…!!」

「残念だが、届かないな」

確かに、当たった。自分の掌底は時雨の顎に向かって一直線に伸
び、防御できなかったはず。

碎牙が既視感を覚えた瞬間、ここが最初に攻撃を防がれた場所だ
と分かる。

要するに誘導されたのだ、この場所へ。

「デメエ…狙ってやがったなア…」

時雨を見上げるような形で碎牙は睨みつける。そして、視線を少し落として自分の前にあるであろう壁を見据えた。

「オラアアアアアアアアアアッ！！」

碎牙は壁を打ち破らんと更に拳に力を込める。見下ろしていた時雨は少し表情を動かす。

壁が、震えていた。

パキイン！という音と共に壁は砕け、勢いそのままに時雨は飛ばされる。かと思いきや、壊れる前に軽く跳び、碎牙の顎を再び強く蹴り飛ばした。

碎牙は再び地面を跳ね、同様に止まる。しかし、違ったのは目を上げたその先に術式を組み上げる時雨の姿があったという事だ。

ノッキング・ベル

【煉獄の檻】、【黒霧雲】、ファイナル・フレア【火炎葬】…。どれもが習得が困難

とされる術式を時雨は碎牙に行きつく暇を与えない程の高速で次々に繰り出す。

だが、流石は【五本指】の二。そのどれもを紙一重で避けているが、剣は時雨の近くにあるためとれないでいた。

そして、時雨の術式が一瞬止んだその隙に剣に向かって疾走する。

「【蝉時雨】…」

聞いた事のない術式が紡がれるが、碎牙は剣に手を伸ばす。

そして剣を手についた瞬間、碎牙は後ろを振り返った。何かが、後ろから狙っている気配がしたのだ。

「どうか、したのか？」

後ろからかかる時雨の声、砕牙はそちらを振り向くが時雨は歩も動いてなかった。だが、先程後ろから来た殺気は時雨のそれ。

気がつけば、自分の周囲全てから同じ殺気が降りかかっていた。

まるで、百人の時雨から一度に殺気を浴びているような感覚。そしてその殺気は実体を持ち、砕牙へと襲いかかる。

砕牙はそれらは全て幻覚であると判断し、正面の時雨のみを見据えた。先程から一步も動いていない時雨は確かに実体を持っている。そして時雨の殺気が一度に襲いかかってきたが砕牙は正面のみを警戒していた。当然正面の時雨も同時に斬りかかっていた。

だが…

「後ろが、空いているぞ」

ゾブリ…、と自分の背後に何かが当たり、それは自分の腹から突き出る。

それは真っ赤に染まった、刀。

「ア…ガア…」

砕牙は自分の腹から出ている異物を見開いた眼で覗き、刀が抜かれたと同時に膝をついたのだった。

第三十三話 粉碎、防戦一方（後書き）

なんとか三十五話程度で終わらせる事が出来そうな、兄琉です。次話で戦闘は佳境を迎え、三十五話で終焉を迎えます（ただし、予定は未定）。

そして今回の少し補足を…。

地味に名前だけ出てきたルーリスさん。彼女は実際に登場はしますが活躍するかは未定です。まあ強さは折り紙つきですが。何せ昨年の御前試合優勝者ですし。

一応設定はあるのですが使いどころがあまりなく、サブストーリー的な形でなら書く事が出来るかな？といった程度です。

そして同じく名前すら出ませんでしたが存在だけ出てきた、八茅草家現当主。彼も活躍の場は未定です。イメージとしては優男な感じ。

他にもいくつか新しい術式が出てきましたが、【蝉時雨】だけは次回で補足を入れようと考えています。分かりづらかった気がするので（汗）

【悪戯猫の扉】は簡単に説明をするのであれば、一方からは堅牢な壁であり、一方からは透過する性質を持った壁です。それ故前回時雨は壁を透過し攻撃する事が出来、今回掌底の上に何事もなく立つ事が出来たという訳です。構成としては変異を主においた術に幻の特性をプラスした術式となります。

では、評価感想お待ちしております。

第三十四話 遺言書、分解（前書き）

次で決着です。

第三十四話 遺言書、分解

そろそろ、本気を出してくれないと困るんだが…、と時雨は心の中で嘆息した。

六法結陣は披露したし、ある程度はなっちーに教えておいたから伝わっただろう。

後は、碎牙の本気がある程度引き出してみせるだけ。

「あまり、手の内は披露したくないんだがな」

そんな事を考えながら、時雨は膝をつく碎牙を眺めた。

おかしい…、そう碎牙は思う。確かに今日知る事はできたがこんな事はない。あるわけがない。

「（コンナ強い奴がいるなんてこたあ、書いてなかったじゃネエか）」

碎牙は刺されて血が出ているだろう脇腹手で塞ぎながら後退する。彼にとつては刺されたという事実よりも重大な事があつたため、よく見ればその脇腹からは血の一滴も出ていない事など気が付きもしなかった。

実はこの清澄碎牙、とある書物について調べ検証する為に世界を渡り歩いていた。

その書物の名前は『テストメント神の遺言書』。その書物はある一文から始まっている。

『世界とは、二本の血の鎖の輪で成り立つ』

不可解なこの一文から始まる書物に書かれた膨大な量の文は、やはり不可解な言葉が書き連ねられており理解に苦しむモノが殆どであった。

以前汀が見た時には何か気付いたようであつたが、碎牙には何か分からなかった。

しかし、碎牙は長年に渡る放浪の末一つの仮説に辿り着く。

歴史は繰り返す事で輪となり、人は輪廻転生を繰り返す。ならばこの書物はその名の通り、昔の世界の遺言書……繰り返す事を前提とするならば未来まで見通す預言書となりえるのでは……と。

それから旅を続け、『神の遺言書』^{テストメント}の記述は真実だと碎牙は確信を持ったのだった。

そして、この御前試合における自分の役割は『嵐呼びし者、忘却の彼方に消えゆく儚き姫の守護者に討たれ、成就へと今一つ歩む』である。

その言葉通りなら、『嵐呼びし者』は【乱流】の碎牙であり、『儚き姫』は病弱の第三皇女、その『守護者』は近衛兵である【戦乙女】ルースが当てはまるはずである。碎牙は彼女に負ける中で何かを得ると言う意味に取っていた。

「（確かに衰退する八茅草流を『姫』、時雨を『^{アイツ}守護者』と置けば間違いではないが……。現八茅草当主は今この場にはいないが、男。そうなれば少なくとも『姫』じゃネエ……）」

「おい」

「（クツ……だとすると『神の遺言書』^{テストメント}が間違えているか、オレたちがここから大逆転するかって事かア？そして、力を削がれた後でルースに倒されるって意味……。そうか、なら久しぶりにガチでやるしかネエかア）」

「おい！」

「アア！？何でえ、こっちは今考え中なんだがナア」
「血」

頭にクエスチョンマークを浮かべた碎牙に呆れた時雨は自分の刀で碎牙が抑えている場所を指す。

碎牙は刀の先に血がついてない事を確認し、そのまま自分の脇腹に視線を移す。

「うオツ…血イ出てねえじゃネエか！！」

「遅いわ！」

思わず突っ込みを入れてしまう時雨であった。

「何で、刺さなカッた」

「いい加減、本気を出してほしいんでね」

二人の視線が交錯する。その瞳には炎が揺らめいていた。

「カッカッカッ！テメエ、後悔すんじゃねえぞオ…」

「まるで負け犬の言葉だな」

ブチン、と碎牙の何かが切れ音がした。

碎牙の甲高い笑い声と共に天に掲げられた大剣が乱流の風を纏っていく。

そして時雨たちの周囲を覆っていた【乱流】が引いていく。否、全てが大剣へと集約されていく。

「カハア…、コイツを見せんのハア久しぶりだぜエ」

観客席は静まり返り、誰かがゴクリと喉を鳴らす音が聞こえた。そしてまた別の人が「漆黑…」と呟いた。

「漆黑の剣…」

「カッカッカ、こいつにはテメエら護法士ミテエな大層な名前はネエよ。コイツを見て生きてるヤツアいねえからナ、付ける意味もねえのヨオオオオオオオ！」

今日何度目か、碎牙は時雨に向かって疾走する。

きつと時雨は碎牙の剣の軌道を逸らして避けるのだろう。

しかし、時雨は今回ばかりは大きく後ろへと下がった。

碎牙の剣は空を斬り地面へと突き刺さった。が、これまで響いていたような轟音は鳴らず、そのまま地面を通り抜けるような軌道を描いて元の位置へと戻った。

「カカツ、やつぱりテメエはオモしれえよ。だが正解だ、コイツは受けちゃあいけネエ。何故ならナア…」

「剣軌道上の物質、いや物質以外の要素を全て【分解】している、な…」

「チッ…一目見ただけでソコまで分かりやあ上出来だッ！死ぬんじやねえぞ！」

しばらく後時雨は先程の優勢はどこへやら、観客から見ても分かる程に戦況は逆転していた。

相手は少しでも触れれば致命傷となる剣と王国でも指折りの剣士。更に術式も触れた時点で分解されてしまう上、蝉時雨を放った時点で六法結陣は解かれてしまっている。

戦いを開始から初めて時雨の顔に苦渋の表情が浮かび、それでも

僅かな勝機を見出すべく次の行動へと移っていったのだった。

第三十四話 遺言書、分解（後書き）

自分の首を絞め続ける兄琉です。こんにちは。

碎牙さん…新しい単語とか増やすの止めてください、本気で…。

このお話が終わった時に回収しきれない話がぼろぼろ出てきそう
で怖いです（汗）

と言う訳で『神の遺言書』や『漆黒の剣』等が出てきました。
テストメント

テストメントについては色々と名前を悩んでいたのですが、分かりやすさ重視と言う事でこの名前になりました。え？分かりにくい…？…ま、まさか（汗）

そして前回のあとがきに書いてあった『蝉時雨』について。

今回殆ど流された形になったのですが、一応解説までに。

『蝉時雨』は自分の気配を一定空間内に浸透させる事で相手の第六感を麻痺させ、その上で心法の術により四方八方からの斬撃を浴びせられたかのような感覚を与えと言う設定の術式です。幻＋心＋空の複合術式。

まあ殺気を全方位から与えて、斬られるという幻覚を見せるって感じでいいかと。

では次にやつと戦いは終わりを迎えます。

分解の剣を相手に時雨はどう戦うのか！そして様々な思いが交錯するこの御前試合は私の手に負えるのか！

評価や意見感想お待ちしております！

特別話 一周年記念、閑話休題

おはようございます、こんにちわ、こんばんわ兄琉です。

今回は『剣舞・Chain of Blood・』開始から一年と言う事で、一つ本編とは違った対談形式で行おうと思います。キャラクターと私の対談（主に言い訳）や話の補完が中心です。話の続編を期待されている方には申し訳ありませんが今回は本編とは直接関係ない内容となっています。

次話更新は12月4日を予定していますのでどうかよろしく願います。

～以下、対談～

光葉（以下：光）「挨拶終わった？」

何とか、適当に済ませてきたよ。

今回のメインゲストはお馴染八茅草の人々でお送りしたいと思います。

あ、因みに見ての通り、今回は地の文が私の言葉なのでキャラクターの言葉の前に名前が付いています。ご了承ください。

時雨（以下：時）「とは言え、こんなもの考える位なら先の文章を考えてほしいものですね」

光「そうよねー、もう一カ月以上更新してないわよアンタ」

棗「そもそもこういう事は50話等区切りが良く、尚且つ話がそれなりに進んだ時にやるものだと思うのですが」

翼「未だに50話どころか、10万字すら書いてないね」

…（汗）

光「それに話しようにも本編自体まだそこまで進んでないしね。あまり本編の先の方に関わる事言えないし？」

棗「1話1話が2,000字程度の癖に更新遅いし、分かりにくいですし」

…ご、ごめんなさいorz

御前試合編の大まかなプロット自体はあるんだけど、細かいところ考えるのに時間がかかって…。

あ、それならこっちにも言う事ある！ちよつと碎牙カモン！

碎牙（以下：碎）「あん？オレっちがどうした」

大体、碎牙のせいでこっちはさんざん悩んだんだから。地味に強いし、しゃべり方意味分からないし…。

碎牙VS・時雨の勝負自体はもう書いたけど、その流れを考えるのにやたら時間食ったんだよ、結局微妙な感じになったけども。

碎「そりゃ、アンタが勝手に決めたからだろオが、オレっちには関係ないね」

時「勝手に設定しておいてひどい言い草ですね」

さあ、それでは次の話に行こうか。

改めてキャラ紹介とかしてみたり。

光「流したね」

翼「流しちゃったね」

棗「流しましたね」

ではまず時雨から。

時雨しぐれ

主人公であり、体中に深い傷を負った正体不明の剣客。名前を聞かれた際、咄嗟にある人物の名前を出してしまう。

比較的冷静だが、その口調や性格から相手の神経を逆なでする事が多い。思慮深い面もある。

長く延びた黒髪に長身。元は銀髪。聖霊・彼方のマスター。武器は白銀の日本刀・太太刀。

考え事をする時前髪を一房いじる癖がある。光葉とはかつての恋人。

好物は漬け物。嫌いな物はタマネギ。

こんなところでしょうか。他にも細かいスペックなどはあるのですが、それを入れると無駄に長いので割愛。

翼「一切話に絡んできそうにないキャラ設定とか作るの好きだもんね、無駄に」

光「無駄に、ね。嫌いなもの玉ねぎって、いらないでしょその設定」

あれ、翼の声が怖い。なんで？

出番か、出番がないからか。

翼「一応、主人公なのに…過去のだけど。メインキャラでまだ武器を振るってる描写がないの僕だけじゃない？」

棗「え、えと…、御前試合の個人戦であるわよ、きっと。この戦いが終わったからね！」

一応言っておくけど、翼と光葉の個人戦予選は描写ないよ。

翼「うわあああああん（泣）」

光「翼泣かせんじやないわよアンタは！バリリッ」

危なっ雷危なっ！

どうしても時雨がいるから翼が話に絡みにくいんだよね。大人しめのキャラだし。話の核心に向かうにつれて出番出てくると思うからそれまで待っておくれ。

で、次のキャラ紹介に行こうと思ったんだけど伏線につながる内容が多すぎて、基本スペックしか明かせないから割愛していい？また50話とか、行くか分からないけど100話の時にやるから。

時「そうですね、正直面倒という考えでない事を祈ってますよ」

むぐ…、では設定についてです。

基本的にこの物語は時雨とその周囲の人の話だけで、世界情勢などは関係なしに進んでいきます。

それは私自身にそれらをまとめあげる力がないと言つのもそうですが、ただでさえ分かりにくく伏線だらけの話にこれ以上戦争や各国とのいざこざを含めて話を進めると中心軸がぼやけてしまうのではないかと考えたからです。

まあ私の力が足りないと言う事なんですけど。

棗「実際には話が進む中でも四家の確執や戦争が起こっているものね」

時「碎牙が世界を旅していたと言つ話もある通り、他にも人があり町があり国がありますから」

なので、これからチヨイ役等で新キャラが出てくると言う事もあります。基本的には今いるメンバーのみで話が進んでいきます。

次に舞台について。第一話に王都タウゼンガルドと言う単語が出てきています。

これは時雨たちが今いる町の事を指していますが、名前からして洋風です。しかし時雨たち八茅草流などは純和風の建物です。

光「そういえば前にイメージにズレがあったっていう感想もらってたわね」

時「作者もその事については考えたらしいのですが、この設定自体は当初からあったものなので変えないでおこうと言う結論に至ったようです」

私の頭の中では王都全体は洋風の石造りの町並み、そして四家などの武術に関する場所のみが純和風の造りだとイメージをしていました。

御前試合のあっている闘技場もコロッセオのイメージで書いていますし、王城も西洋の建物です。

これは四家の始祖である四人の王子が大陸の平定に乗り出した時に学んだ武術（神霊護法）が東方の国の秘術であり、元来王国になかったものである為に武術、即ち神霊護法に関わる建物が純和風であると言った裏設定（？）から来ています。

ただし、出てきてはいませんが藤堂や武納倉は王都の中心部に屋敷を構えているため、多少は洋風に近い和洋折衷の作りになっています。

棗「これまで殆どが八茅草の中での話でしたし、これからは洋風の物が多く出てくる気がしますね」

時「今まではその殆どが伏線を張るだけでしたが、これからは少し

ずつその回収に入り謎が少しずつわかっていきますよ」
彼方『ついでに私と時雨様との絡みも…』

最後の方に不穏な発言がありましたが、今までの様な感じで話は進んでいきます。

感想で質問等いただければ今回のように話に支障がない程度で回答していきますので、これからも『剣舞 - Chain of Blood -』をどうぞよろしくお願いします。

光「ん？なんか落ちたわよ？なにに【私立遊神学園青しゅ…】」

ダツーーーー！それダメ！アウトオオオオ！

翼「何気に次作品の宣伝入れてきたね、セコイよ」

時「何やら懐かしい面々も出てくるようですね、【剣舞】がひと段落するまでは設定いじるだけにしておいてくださいね」

わ、わかってるよ（汗）。

それじゃあもうすぐ3,000字行きそうだし今度こそめるよ。

それでは、これから

一同「『剣舞 - Chain of Blood -』をよろしくお願い
いたします！」

特別話 一周年記念、閑話休題（後書き）

次話投稿は12月4日です。

第三十五話 裁きの天球、油断（前書き）

久しぶりの本編更新です。

言い回しなどが変わっているかもしれませんが…。

第三十五話 裁きの天球、油断

会場の注目はただひたすらに碎牙と時雨の戦いを追っている中、他の者も着実に動いていた。

戦場の端、角にそびえる岩にもたれかかるように座る一人の女性がいた。

彼女の手の中にあるのは一枚のプレート、自らの胸についているバッチを含めあと1点と言う状況である。

ゆつくりと岩から離れ、しなやかな動きで短刀を構えた。

「出てきなさい、いつまでもそうしている訳にもいかないでしょう？」

その一言に呼応するように違う岩の陰から数人の人間が現れる。

5人、それぞれが自分たちの得物を油断なく構えていた。

「八茅草さんよお、あんたにや恨みなんざねえがここで倒れてもらうぜ」

「落ちぶれても四家は四家、潰しておくにこしたことはないからな！」

女は視線を巡らせると、刀を鞘に戻した。そして一瞬目をつむり押し黙る。

それを舐められた事と感じた男たちはじりじりと輪を狭めて行く。一人の男が我慢できずに女へと一足飛びで襲いかかろうと足を出したその瞬間、女の口が開いた。

「八茅草流抜剣術……『ドゴォ！』」

棗は抜剣の途中という中途半端な姿勢で綺麗に固まる。
盛大な土煙の中から現れたのは、一人の男だった。

「…何の用？」

「あー…、追いつめられた。と言ったところでしょうか。申し訳ない」

時雨は眉をハの字にすると頬をポリポリと搔いた。そして棗の視線の先、時雨の後ろにはいつもと違う真つ黒な大剣を携えた碎牙がいる。もう片方の指は何かをしているようだ。

棗は碎牙の黒剣を見て、本気だと悟ると同時に頬に汗が一筋流れる。

「本気、みたいね。大分怒ってるみたいだけど？」

「最近の若者はキレやすいと言いますからね、そのせいですよきつと」

時雨の言葉と同時に碎牙はこちらへと飛び込んでくる。二人はそれぞれ逆へと飛ぶ事でその一撃を回避した。

地面が音もなく裂け、背中越しに碎牙が二人を睨みつける。同時に結界にも傷がついたのか実況が『碎牙選手結界を壊さないでくださいーい』という半ば悲鳴の様な声が聞こえてきたが気にしない。

「ハアツハアツ、クソツ！いい加減にあたりやがれ！」

「無理な注文を…」

今度は碎牙が隅へと背を向け、対峙する。

「笑えないわね、どうするつもりなの？」

「いやあ、どうするもこうするも。もう終わってますよ」

「…は？」

棗はその言葉に目を丸くし、砕牙の方に目を向けるとそこには固まったままの砕牙の姿があった。

固まったと言っよりもつぶされたと言った方がいいかもしれない。膝について何かに耐えているようだった。

「結界はこのフィールド全域、逃げ回るついでに座標を指定しておきましたから。彼の上には今結界内の全ての重量が乗っていますね」

「また変な術式を…って、その術式！」

「そう、八茅草流現当主の考案した術式です。よく見ておいくださいね、もう見る事は出来ないのですから」

時雨の最後の言葉は棗には聞きとる事が出来なかったし、何故時雨がこの術式を使えるのかはわからない。どうせ聞いても教えてはくれないだろうし、教わるつもりもなかった。

だがこの術式が砕牙を封じ込めているというのもまた事実。棗はこの場を目に焼き付けていた。

「グアツ…ガア。テメエ…、なめんなヨオオ！」

砕牙は剣を渾身の力で以って剣を頭上へと掲げ、力を霧散させようとした。だが、その身に降りかかるのは変わらぬ重量だった。

術式は破壊と再生を繰り返し、断続的な衝撃を砕牙へと振りかざす。それを見た時雨は彼方の宿った刀を砕牙へと真っ直ぐに伸ばした。

「そろそろ、お互いに時間が迫ってまいりましたね。またいつか、その時こそは全力で挑んできて下さい」

目を見開く碎牙の顔を見て満足したかのように時雨は棗へと語りかける。

「八茅草の幻とは他の四家と違います。それは一対一の直接攻撃の術式ではなく、空間を掌握する事による一対多の戦闘、陣や結界を敷き自分に有利な戦場を作り出す事にあります。」

時雨は語りながら、仕掛けていたもう一つの術式を仕上げて行く。

「そして魔法陣、方陣、陣形等がありますがその中でも結界、その一つにおいては棗殿、いや天叢雲は圧倒的な力を誇ります。…だから、諦めないでください。貴女は、強く、気高いのですから誇りを捨てないで」

「…え？最後何て…？」

うねりを上げる風で聞き取れなかった言葉を聞きなおすが当然のように返答はない。

代わりに詠唱が紡がれていく。

『純然たる南方より顕現するは太陽を司りし者、フイールド結界は燃え盛る大地、全ての罪人に神の炎と魂の守護を…』

地面の振動が粉塵を巻き上げ、碎牙の身を覆い隠してゆく。
その様は正に審判の時を迎える罪人のそれ。

『開いた右の掌の上には炎を、握りしめた左の手中には天球を感受する』

粉塵が少し風に煽られたと思えばそれらは球状へと圧縮され揺らめく。

罪人の目を覆う布の様に漂う粉塵はその動きを一瞬だけ静め…。

『懺悔せよ、堅忍を貫け、されば閃きを与えよう…』
【裁きの天球】
『エノク・ディサイド』

大地を鳴動させる様な爆発を起こした。

轟音が観客の耳を貫き、大地の震動がバランスを崩す。
神の裁きが、砕牙へと降り注いだのだった。

次第に耳鳴りも収まり、揺れもなくなった頃、
無残に破壊された結界と巻き上がる粉塵だけが残っていた。

その場にいた棗は驚きに目と口を開いたまま、自分の方へと歩いてくる時雨から目を離せない。

「少し、疲れましたね…」

その言葉通り疲れの色を残した口調で時雨は自分で肩を叩いた。
きつとそこで時雨は油断していたのだろう。

だが、時雨の背後を見ていた棗は気付いてしまった。

粉塵の中から覗く、怪しげな光を持った、漆黒の剣を。

音を立てずに揺らめく暗黒の刃

それは時雨のすぐ背後に迫っていて

棗の声にならぬ声に気付いた時雨が背後に体に向けた瞬間

漆黒の刃が、触れたモノをすべて消し去る悪魔の爪が
時雨を斬り付けていた

第三十五話 裁きの天球、油断（後書き）

次回、ついに完全決着です。（結局35話で終わらなかったという）

そして次回更新は12月5日（土）朝7時ごろを予定しています。

それでは評価感想お待ちしております。

第三十六話 消失、不穏な伝令（前書き）

おはようございます。無駄に長かった時雨VS・碎牙もここに終局です。

それでは、どうぞ。

第三十六話 消失、不穏な伝令

時雨が、斬られた。

その事実を棗が理解したのは数瞬遅れての事だった。
時雨が絶対防御不可能の一撃をその身に受けた。

分解の特性を持つであろう剣に斬り付けられた上着がその存在を消失していき、とつさに後ろに跳んだ時雨の体もその制御を失い無力にもその身を地面へと投げ出す。

その様子を見届けた碎牙はニヤリとその口を歪めると、その場に大きな音と共に倒れこんだ。

バオオツ！と、轟音と共に剣から乱流が溢れ出し、粉塵を吹き飛ばして、今度こそ…音が止んだ。

「……え？」

思い返す事があれば棗はこの時の声をなんと間抜けな声だろうと自嘲するだろう。

それ程に信じ難かったのだ。

死に間際の重傷から数日で立ち直り、光葉を軽々と打ち倒し、圧倒的な力で碎牙までも限界まで追い込んだ時雨が。

たった一度の、油断から来る不意の一撃で、死んだ。

「まさか…え？じよ、冗談よね…」

改めて時雨を見て、まったく動かない事を確認する。傷だらけの背中では微動だにしなかった。

ゆっくりと、震える足を抑えて近づいていく。

その足取りとは裏腹に心臓の鼓動は激しく胸をうつ。

そして後数歩と言う所で棗はある事に気がついた。

時雨は軽く痙攣していたのだ。

「……………」

棗は一つの結論に至る。

よく考えればそうだ。

相手は触れただけで物体を消失させる力を持つ剣。

ならば何故、斬られたはずの時雨は消えていないのか。

一気に顔から緊張が失せる。

そして歩幅を大きくし、勢いよく上から時雨の顔を覗き込んだ。

そこにあるのは笑いを堪えて軽い痙攣をする時雨の姿。

「…プッ、『じょ、冗談よね…』…プスッ…」

棗は2歩ほど下がり、大きく足を踏み込んで。

「心配させんじゃないわよおお！」

時雨は再び宙を舞ったのだった。

「つまり、丁度胸にあつた傷跡に沿っていたから服だけ斬られた、
とでもいうの？」

「まあそう言う事ですね。いやはや運が良かった」

試合が終わった後の控室へと向かう道で時雨は髪を掻きながらあ
っけらかんと言った。

時雨の胸元には大きくえぐれた傷跡が走っている。その一つに丁
度沿う形で振りぬかれた剣は時雨の体に触れる事なく、通り過ぎた
というのだ。

「わざとね」

「さて、何が何やら」

因みに試合自体を勝ちぬけたのは三人のみ。【エノク・デイスайд裁きの天球】の攻
撃の余波によつて結界が崩壊し、他の選手は全員リングアウト場外してしまつた
のだ。

元々時雨と碎牙が戦っている間に縦横無尽に戦い回つた結果、大
半の選手はそのとばかりで気絶していたそうだが…。

二人の戦いが決着する前に勝ち抜いていた一人と【エノク・デイスайд裁きの天球】
を防壁で耐え抜いた時雨と棗だけが、ちゃっかり時雨が他選手から
盗んでいたバツチで勝ち抜く運びとなつた。

当然、碎牙は即医療班へと引き取られて言つたが少し目を離れた

すきに消えてしまったそうだ。

「次はあの子らの戦いね」

棗は自分の戦いの前以上に緊張した面持ちで呟く。

「大丈夫でしょう、彼らならば」

時雨はいつもの笑みを浮かべて語る。

そんな二人の前に、一人の八茅草流の門下生が駆け寄ってきた。彼は走った疲れから来るだけではないだろう汗を流し、息を切らせて二人の前で止まる。

棗は何事かと聞き出そうと口を開けた、その時。

「棗様ッ！お伝えしたい事が！」

「何？」

焦りを前面に押し出す男に少し緊張した面持ちで棗は言葉を紡いだ。

門下生は軽く息を整えた後、時雨の方を見る。この男の前で言っているのか、と考えあぐねているようだ。

「いいから、続けなさい」

「し、しかし……」

「いいから！」

「は、はいっ！」

渋る門下生を言葉の圧力で押さえつけた棗は続きを促す。

「先程伝令があつたのですが…」

「ガ、カハツ…カツカツカツ。久しぶりに楽しかったナア…」

薄ぼんやりとした照明の中、男は腹を抱えて壁に腕をつきながらヨタヨタと歩いていた。

体中に巻かれた包帯からは血が滲み、傷が癒えてない事を言葉なしに物語る。

傷だらけの男はふと自分の前に立つ男に気がついた。長身痩躯、朱色の長髪に片眼鏡、見覚えのありすぎる男だ。

「カツ、ドオした。笑いにでもきやがったのか？」

「くふふ、まあさか。むうしろ素晴らしくナァ…イス過ぎるタイミングで来たのが恐ろしい位ですがねえ」

「ドオいうこつた？」

「何者かにですねえ、盗み見されたようですよぉ？例の解析結果がねえ」

「なっ！」

驚きの声を上げると同時に痛んだ腹を護るように支える男に、真っ直ぐに立てた人差し指をチツチツと振る。

「もおん題、ああ〜りませんよ。見られたのはあ途中までの結果ですからねえ。最後まで見られたわけではありませんえん」

長身痩躯の男は、心の中で『ちゃんと面白くなるよおに、断片的な情報を見つけやすいように配置しておきましたかねえ？』と付け

足しておいた。

「フウ…、って事は分かったの力？」

「当うつ然ッ！今しがた！まあさあに、さっき判明したばかりの
ほやほやぬくぬくですよ」

二人の男はお互いに大きく笑うと暗闇の中へと消えて行った。

棗は茫然としていた。

「……………え？」

「本当の…事です…。」

「ま、まさか！」

「本当です！八茅草流現当主、棗様の父上がッ…お亡くなりになりました」

第三十六話 消失、不穏な伝令（後書き）

二十七話から続いたこの戦いにもようやく終止符です…。
間に色々挟んだとはいえもつと短く出来たんじゃないかと思直そうかと考えています。

それでは次話更新は12月6日（日）になります。

午前中、若しくは昼過ぎ（少なくとも夜になる前）には投稿でき
ると思いますのでまたよろしく願います。

それでは、誤字脱字報告、評価感想お待ちしております。

第三十七話 共有、己の苛立ち（前書き）

今回は少し短めです。

歴史改変のポイントについて軽く触れています。

第三十七話 共有、己の苛立ち

「八茅草流現当主、棗様のお父上が…お亡くなりになりました」

棗の頭の中が真っ白になる。

「死ん…だ…？」

「はい、詳しい事はまだですが仕事中に何者かに襲撃を受けたと聞いております」

仕事と言うのはいつもの嫌がらせの仕事。

面倒な仕事を押し付けられるのはいつもの事だけど、意味の無い事が多かった。

今回の仕事は、黛家隠れ里の調査…だったはず。

『まあ何もないでしょうが、一応御上には逆らえませんかね』

そう笑って、三か月ほど前から数人の供を連れて出かけていた。今回は御前試合に出させないためだけの仕事だと思っていたのに。

「棗殿、今は試合が先決です。その事については後ほど考えましょう」

「貴方って人はっ…！…っ！」

眉を吊り上げて時雨を睨みつけた棗はすぐにその表情を驚愕の物へと変えた。

そこには怒りと悲しみを湛えた、齒を食いしぼる時雨の顔があったのだ。

棗は勿論時雨と自分の父親の関係など知らない。だが、自分と同

じような感情を抱いてくれる人がいる、それだけで少し救われるような気がした。

心の中でありがとう、と言だけ言うつと落ち着いた様子で門下生へと向き直った。

「またその件については今夜決めます。引き続き私が当主代理として立ちますので私から皆に話すまでは口外しないように」

「はいっ！」

戻りなさい、と手を払い門下生を遠くへ行かせると一息つくように近くにあつた椅子に腰かける。

垂れ下がった髪で表情は見えないが震えた肩がそれを物語る。

「…私は先に戻ってますね。ここはしばらく人は通らないでしょうし、大丈夫でしょう」

何故なら、とは言わない時雨がそのまま棗を置いて廊下を歩いて去っていった。

同時に棗の下に床に水滴が一滴落ちて、また一滴、また一滴と増えていく。

「……とう……さんッ……！」

当主代理として気丈にふるまってきた少女が少しの間だけ普通の少女に戻った瞬間だった。

影で一連の流れを聞いていた男が一人。

「何、だとオ。八茅草の当主が、死ん…だ？だとすれば『儚き姫』
はやはリッ！…とすれば『神の遺言書』^{デスタメント}は間違っちゃアいなかった
って事力。まだ線は繋がってイル、次の記述は確力…」

【守護天使は玉座を女神の為に退き、天使の愛弟子は女神の寵愛を
その身に受けるだろう】

【知将が己の英知に身を焦がし、その穴に狂戦士が降臨し彼の者達^{セフィラ}
を守護するだろう】

「天使…がキーワードみたいだが…、天使みたいなヤツいたカア？
似合いそうなのは藤堂の奴らくれエカ…」

ボリボリと頭を掻きながら風貌に似合わない紙の束を小脇に抱え
て静かにその場を去っていったのだった。

『時雨様…その…』

「彼方、俺は、最低な男なんだろうか…」

棗と別れてから数分、時雨は人気のない会場の裏に来ていた。
彼方を引き連れ壁際に設置してある木製のベンチに腰かける。

『時雨様には時雨様の目的がある以上、その目的を崩壊させる様な
事象にまで手を伸ばす必要性はないと思います…』

彼方は至極真っ当な、当然の意見を述べる。

目的があるならそれに向かって必要な事をするべきだ。時雨は聖人君子等ではなく、ただの己の欲望を満たすためだけに来たのだから。

「（これは、必要な事だったんだ。姫を仕立て上げるために…俺自身が守護者になるために！）」

棗とは違い、地面に滴り落ちるのは朱紅^{あか}い雫。純粹な悲しみではなく、これから自分が進む朱紅^{あか}き道を改めて見てしまった男のやり場のない怒りの血。

時雨の唇の端からは血が滴っていた。

時は少し前、時雨が八茅草家を訪れてから暫くした頃。棗が毒矢による襲撃を受けた時の事だ。

時雨が襲撃者から棗を助けた、その時まで遡ってみよう。

何故、棗を助けたのか。あの毒矢を受けたとしても棗が死に至るわけではないのに。助けた事で御前試合に彼女が演じるべき【役割^{パート}】はないというのに。

本来の歴史なら棗が毒矢を受け危篤状態になった事で棗の父が大急ぎで帰って来て、棗の代わりに当主が御前試合にそのまま出る。これが正しい歴史^{シナリオ}だったはずだ。

そう、正史通り事が運んでいれば八茅草流当主、つまり棗の父親は死ぬ^{死ぬ}はなかったのだ。

第三十七話 共有、己の苛立ち（後書き）

普段より少し短めですが、次へのつながりを考えた結果こうなりました。

次回に今回の最後に触れた部分についての軽い解説を入れる予定です。

これによって歴史改変がどう行われるか、定めていきます。

それでは、次回更新は早ければ12月6日（日）夜、遅くても12月7日（月）夜までにしようと思います。

それでは評価感想お待ちしております。

第三十八話 配役、麻痺

八茅草流当主は死ぬはずではなかった。

その事実を改めて思考の中で浮き彫りにしてしまった時雨は一層唇を嚙む力を強くした。

防ぐどころか本来起こり得なかった人の生死を自らの手で引き起こしてしまった苦悩。

当主の仕事は棗の考えていた通り嫌がらせの物、だけではなく大きな作戦が組み込まれていた。それが八茅草流当主暗殺計画。失敗に終わるはずだったそれを時雨が棗を助けた事で、暗殺作戦は功を奏した。

そうした事で御前試合が始まった段階で八茅草流の実質的な当主は一人娘である棗に移行していた。

元々の【役者】である病弱の第三皇女『儚き姫』を棗に、近衛兵のルーリス『守護者』を時雨へとすり替えたのだ。それも全ては目的のため。

【嵐呼びし者、忘却の彼方に消えゆく儚き姫の守護者に討たれ、成就へと今一つ歩む】

碎牙と汀に【妖魔】の研究情報を与えるための布石。時雨が『嵐呼びし者』を更なる『成就へと今一つ』進ませるためだけに仕組まれた【役割】のすり替え。

その為に時雨は棗の父親を殺し、碎牙を倒し、後への歴史改変へ

の布石を打った。

時雨に出来るのは事象のすり替え程度の事でしかない。主要な舞台役者^{じょうしんぶつ}を失い、その穴を埋めなければ歴史は歪む。

時雨はこの為に素を御前試合に引きずり出したのだった。

「（目的を見誤るな、俺は何のためにここにいるっ…）」

『時雨様、次の段階^{フェイズ}へと移行するには【守護天使】が必要です。やはり自身でお成りに…？』

【守護天使は玉座を女神の為に退き、天使の愛弟子は女神の寵愛をその身に受けるだろう】

「ああ、そのつもりだ。個人戦に出た理由の一つだからな…」

『余り自身に重責を負わせすぎないようにしてください…。このままでは目的に達する前に世界の歪曲に引き千切られてしまいます』

ああ、と軽い相槌を打った時雨は再び思考の海に自身を沈めて行った。

「時雨さんどこいったのかなあ…」

翼は時雨を探して歩き回っていた。

個人戦が進む中、一次予選がもうすぐ終わるため素に呼んできてくれと頼まれたのだ。

建物の中を探そうとも思ったが、何故か外にいる気がして一人歩いている。

「見てほしかったのになあ、予選」

唇を尖らせて、少し前の事を思い出す。

翼と光葉の二人は予選を順調に勝ち上がっていた。時雨と碎牙の戦いほどではないが八茅草の人間、しかも子どもが勝ったという事で多少の話題を呼んでいる。

予選はまだ全て終わってはいないが、八茅草の人間で勝ち残っている者は多くはない。

翼の心中に些かの自負心と褒めてもらいたいと思う心があっても仕方ないだろう。

しばらく歩いた翼は闘技場の外周に設置されたベンチに座る時雨を見つける。

時雨は左手で右腕をつかんだ状態で頂垂れており、考えごとをしているようだった。

邪魔をしては悪いと思ったのか翼はゆっくりと近づいていくが、時雨の顔の真下に何やら水溜りの様な物がある事に気がついた。

「泣いて……る？……いや、違うあれは！」

翼は叫ぶと同時に駆け出す。

ここまで近づいているのに時雨が自分に気づかない事自体がおかしかったのだ。

涙と思ったその雫はその瞳から出たモノではなくて、口から滴り落ちていた。

「時雨さん、大丈夫ですか！？」

「……………ん？ああ、翼ですか。どうしましたか？」

「どうしたもこうしたもないですよ！どうしたんですか、その『血』」

は！」

涙と思ったその雫は血で、時雨自身気付いていないようだった。翼に言われてはじめて気がついたかのように口を拭い、その手にべつたりとついた血と地面に広がった赤黒い液体を見比べる。

「これは…俺の血、か？」

「それ以外に何だと言っんですか、取りあえずこれで拭いてください」

翼に手渡された手拭いで時雨は口元についた血を拭う。

その血をじっと見つめる時雨に翼は「どうしたんですか？」と声をかけるが返事らしい返事は返ってこなかった。

「いつの間にこんなに血が…」

「先程からずっと、ですよ」

心の中へと彼方が語りかけてくるのを感じ、受け入れていく。

「ついに、感覚器官の麻痺が始まったか…急がないとな」

「そうですね…ですがお気を付け下さい、感覚器官が麻痺し始めたという事は」

「分かっている、戦闘に支障をきたすようなら計画を練り直さねばならん」

彼方が息を漏らす音が聞こえた。

本心では周りにもっと頼って、戦いを楽にして欲しいと願っているのだろう。

だが、今回は協力者を大勢用意するだけの時間も余裕もない。

『難儀だな…』

『ところで時雨様、先程からずっと結構な勢いで揺さぶられていますけど』

時雨の意識が戻った時には既に翼によって激しくシェイクされ、こみ上げるものがあつたという。

「…言ってくれよ。うぶっ…」

「やっと気がついた。大丈夫ですか時雨さん！って、血じゃない物が出たああああ！」

翼の絶叫に森の鳥達が一斉に羽ばたいたとか羽ばたかなかったとか…。

第三十八話 配役、麻痺（後書き）

ついに『剣舞 - Chain of Blood -』も全40部になりました、兄琉です。

今回は主に簡単な説明、そして翼の登場でした。
分かりにくいとお声があればもう少し詳しい説明を入れようと思います。

次回からは本選へのつなぎです。

次回更新は12月7日（月）の夜12時を超えてからです。

それでは評価感想お待ちしております。

第三十九話 変更、指南

その場の後片付けを済ませた二人は棗の元へと向かっていた。途中何度も時雨は大丈夫ですか？と翼に聞かれたが気にするなの一歩張りで通した。

「お帰りなさい、翼。」

「ただいま、棗師範」

「ただ今戻りました」

始めにいた人数の半分以下に控室の人間は減っていた。

その中にも傷を負い包帯を巻いた者等を考えると予選を突破したのは3分の1程度だろうと時雨は予想する。

「お恥ずかしい話だけど、ここにいるものが予選を突破した者たちよ。負傷者には本選は棄権してもらうけれどね」

「本選は？二次予選は出るのですか？」

時雨ははて？と首を傾げた。本来なら二次予選まであつたはずだからだ。

それに対して棗は時雨を一瞥すると脱力したような息を吐く。

「二次予選は、なくなりました。時雨殿が予選第四組を壊滅状態にした事でね」

成程、と相槌を打つ時雨に棗は話を続ける。

「本選は今日の午後から、組み合わせは正午に発表です。発表には

それまで

「ここに戻ってきてください」

「了解しました、ところで…」

時雨がそう切り出した途端、棗の顔が嫌そうに歪んだ。

何か言いだす時には決まって悪い事が起こるとでも思っているのだろうか。

「他の方は分かるのですが、団体戦に出るはずの…扶羽さんたすばでしたか。彼の姿が見えないようですが」

白や一色帯の者ならともかく、二色、しかも聖霊と契約している者が一次予選で落ちるとは考えづらい事だ。

もし負けていたとしたらそれは八茅草にとって大きな戦力が、上位への可能性が激減した事になる。

だが、棗は何だそんな事か、とでも言うように顔の歪みをなくすと今度は呆れたように言い放った。

「扶羽さんなら個人戦には出場してないわ。連戦がきくタイプではないから個人戦は遠慮する、と聞いています」

そうですか、と一つ頷いて時雨は会話を打ち切り部屋から出て行く。

その後を追うように翼も出ていくのだった。

「さて、ここなら人もいませんね」

「そうだね、時雨さん」

二人は先程のベンチの近くまで戻っていた。

走り寄って来る翼の頭に手を置き、軽く撫でる。くすぐったそうに目を細めて翼は微笑む。

「よく頑張ったな、翼」

時雨の様子は普段八茅草の面々と語らう時のそれとは違う、穏やかなもの。

御前試合前の特訓の中で二人に特別な絆が生まれたのだろう。二人の間に流れる空気は兄弟のそれだった。

一通り撫で終わった時雨は翼と少し距離を置き、正面に向き合う。

「さて、と…翼は先程の俺の戦いを見て何か感じるものはあったか？」

「うん…。とは言ってもはつきりじゃなくて少しぼやけた感じで、だけど」

時雨は初めて翼を『翼』と呼ぶ事に大きな抵抗があった。

自分の名前を呼び捨てて呼ぶなど普段の生活ではまず体験できない。そのせいか今でも呼ぶ時に少しのタメが必要だった。

「そうか、ならばいい。本選もこの調子で行くぞ」

「……え？何を感じたのか、とかは聞かないの？」

対する翼も始めは時雨の変わりように驚きがあった。

だが、どこか慣れ親しんだような（自分なのだから当然だが）空気に次第に慣れていき、今の関係がある。

「すぐに全てを分かれとは言わないさ。まあでも本選前に軽く稽古をつけてやろう」

「わかった。いつも通り、だね」

ああ、と時雨が頷くと二人は同時に構える。

いつも通り、とは時雨は刀のみ、対する翼は何でもアリ（とは言え翼もほぼ刀だけだが）と言ったものだ。

「行きます！」

翼の掛け声と共に稽古は始まる。

突進からの唐竹の一撃をその白銀の刃で受け流す。

そこからの静止の一切ない緩急を用いた流れるような連撃をかわしながら、強くなったなと時雨はしみじみと感じていた。

剣術のみならば既に八茅草の『幻』の一端を掴み始めている。

そろそろそれらが形になる頃。

「（…と、考えることをしすぎるのも失礼だったな）」

仕切り直す為翼の刀を弾いて一旦後ろに飛ぶ。

「逃がさないっ！」

「なっ…」

それに追従するように翼が前方に加速し、宙に浮いた時雨の体に肉薄する。

刀を弾かれたままの状態で突っ込んでくるとは思わなかった時雨は焦りの表情を浮かべた。

「いい気構えだ、だが甘いな」

まだ次撃を打てる態勢にない翼を地面を踏み締めた時雨の刀が襲う。

決まった、と時雨は思い直前で刃を止めた、が。

「甘いのはそつちだと思うよ！」

時雨は再び驚く事になる。

伸ばした刀の隣にあるはずだった翼の顔はそこにはなく、未だに刀より前方にあったのだ。

そして次の瞬間、刹那の拍子に再び接近した翼の顔と振りかぶられた状態にある刀が時雨の正面にあった。

「（はっ、速い！）オオオオオオオ！」

パアアアアン！

乾いた音が、周囲に響き渡った。

第三十九話 変更、指南（後書き）

こんばんわ、兄琉です。

本来予定に全く無かった翼君のプチ戦闘でした。

次回、ついに40話です。

次回更新は…12月9日の深夜…に出来たらいいなと思います。
多分無理なので一日明きます（汗）。

それでは評価感想お待ちしております。

第四十話 それぞれの思惑、交錯する奇想（前書き）

本選への繋ぎです。

第四十話 それぞれの思惑、交錯する奇想

パアアアアン！

闘技場の外周、ベンチの近くにいた鳥が一斉に羽ばたいて行く。それが終了の合図だったかのように、音が止んだ。

「ついに…ここまで来たな。よくやった」

「この結果で褒められてもあまり嬉しくないかな、あはは」

最後に剣を握っていたのは時雨。
翼の剣は宙を舞い、地へと落ちる。

先程の弾けるような音は時雨の掌底が翼の剣を打ち上げた音だった。

「いや、俺は刀以外の手を使わざるを得なかった。俺の負けだな」

むう、と翼は黙り込んで刀を拾い上げる。
軽く汚れを払い鞘に収めた。

「でもまだまだ頑張らないとね、いつかは本気の時雨さんと肩を並べる位に」

その瞳には少し前の翼とは違う、覚悟を秘めた力があつた。

「それにしても、上体を残すとは考えたな」

「とっさに戦いに組み込めるようになればいいんだろうけど…まだまだだよ。それに自分で考えたわけじゃあないしね」

ほう、と時雨は嘆息する。

先程の翼の瞬間移動。あれは術式等ではなく体捌きから来るものだ。

突進から上体だけをその場に残して、下半身を少し先行させておく事で前に来ると思っていた人間は錯覚を起こし、上体が来るはずだった場所へと見誤る。

そこへ下半身の位置へ一息で上体を引き寄せ、勢いそのままに前へ出る事で一瞬で移動したと再び錯覚させるのだ。

遅れてきていた刀は上体を残している時の間に引き寄せ、戻す勢いで加速する事が出来る。

翼が行ったのはこの一連の動作だった。

「時雨さんは光葉の戦いで見せてくれなかったら出来なかったよ」

「あの一瞬で気がついただけでも上出来だ」

追いつかれるのもすぐかもしれない…。

縮地。

一般的には縮地法や滑り足等と呼ばれるものだ。

時雨の行うソレは、二段階に分けられる。

まずは前足の膝の力を抜く事で発生する重力の力で以って一種のタメを作り、相手に気づかれずに間合いを詰める。

その一步を詰めた後、相手に気取られる一瞬を狙い、不感知の一步の勢いを乗せ後ろ足からは同時に両足を踏み出す事で二歩を一步に縮め爆発的な速度で相手の目前に現れる。

恐らくはここから上体の動作で動きを錯覚させる事が出来ると考えたのだろう。

「さて、それじゃあ戻るか」

「うん！本選も頑張ろうね」

時雨に微笑みかける翼の頭を一撫ですると顔を背け歩き出した。

「さて、これから本選が行われるわけですが…特に説明するまでもなく本選はトーナメント形式で行われます」

昼食後、八茅草の本選出場者が集まる中再び棗が前に立っていた。本選は一对一の勝ち抜きトーナメント。5回勝てば決勝進出だ。組み合わせでは同じ流派が一回戦で当たらないようになっていただけで後はランダムである。

数試合がまとめて行われ、準々決勝からは個別に行われる。

一回戦の八茅草の相手は光葉が藤堂家の師範代と当たる事以外は至って普通の相手だった。

「それでは、健闘を祈ります」

予選の初めとは違う、落ちついた雰囲気。元八茅草は舞台へと向かった。

「ふふふ、最初からとは些か美しさに欠けますが…仕方ないでしょう」

男は元々糸目な眼を更に細め、手に持った豪華な装飾のフレームを一振りした。

槍を隣に置くと腰まである長髪をポニーテールに纏め、一房残しておいた髪で三つ編みを結う。

「あの穢れた、美しさに欠ける血潮を舞わせてあげましょう」

男もまた静かに、通路へと歩んでいく。

「さて、それでは行って参ります」

「あら…もう行ってしましますのね…」

闘技場を見下ろす位置にある一室。

儚い印象を持つ、まだ少女と言える風貌を持つ彼女は、足元から頭まで一本の芯が入ったように直立して立つ凛々しい女性に少しばかりの悲しみの表情を向けていた。

いつもは少女の部屋にあるベッドは部屋を移され、ベッドの上から十分に闘技場を眺められる位置に備え付けられている。

「必ずや、勝利を持ち帰ります」

「それよりも貴女が怪我をしないかが心配だわ」

首を垂れる姿勢はまさに騎士。^{luck}

そんな騎士に少女は微笑む。勝利を疑わない様に…。

「お強かった碎牙さんも何者かに倒されてしまいました…」

「恐らくは準々決勝で当たる相手。【戦乙女】は貴女の剣となり盾となりましょう…」

暗に少女の為に自分をも殺すと告げる騎士は顔を上げると部屋から出て行き、戦場へと向かった。

「あの殿方…何か不思議なものを感じるのですけど…。何かもっと大きな物を見ているような…。気のせいでしょうか」

騎士のいない部屋で少女は呟く。

様々な思惑が交差し、絡まり合う。

世界を守護する天使は玉座を退く。

空席に伸びるのは数多の手。

だが、天使は分かっていた。

女神はその座につくだろう。

復讐と約束の紫と白

優しさと純真の灰と白

彼の者に寵愛を注ぐだろう。

残る席は後二つ…。

蒼き紺

剛毅なる鉄くろがね

褐色の一人の双子

彼らが一つを取り合い、座った時
狂戦士は己の場所を見つける…。

今、プレリユード本当の前奏曲は終わりを告げる。

プレリユード前奏曲が終わる頃には皆が舞台に注目するだろう。

これから始まるのは奇想曲。カブリッチオ

舞台の上で、カブリッチオ気まぐれな歴史が展開される。

さあ、天使の指揮者の元踊り狂おう。

第四十話 それぞれの思惑、交錯する奇想（後書き）

ついに四十話な、兄琉です。こんばんわ、いや…おはようございます。

縮地（滑り足と二歩一撃を組み合わせたものとしてここでは書いています）については私自身が浅学な為、違う所もあると思います。その為細かい描写はしてない訳ですが…。

もしお気に召さない方がいらっしやいましたら申し訳ありません（汗）。

個人的にはやっとここまで来たかという印象です。

御前試合が終われば物語全体の起承転結の『承』は終息へと向かい、『転回』つまり『転』の部分へと進みます。

後残すところは御前試合個人戦本選、団体戦です。
物語は前奏曲から奇想曲へと変貌していき、その後には…。

さて、どうなるのでしょうか？考えてみるのも面白いと思います。

それでは評価感想お待ちしております。

第四十一話 剛の者、老獺（前書き）

お久しぶりです…。

どうにか22日中に仕上げる事が出来てうれしい限りです（ノ

、*）

今回は棗さんの戦いです。

第四十一話 剛の者、老獺

「私の一回戦の相手は…貴方ですか」

「儂ワシとてこの身動く限り現役、じゃよ」

棗は自分の目の前に正に聳え立つ老人を間合いの外から見上げた。2mは越すであろう長身に、鋼の筋肉と言う重厚な鎧を着こんだ巨軀。正に巨漢と言うに相応しい風貌だった。

武納倉家先代当主、生きる伝説と呼ばれる男。

「（最も、今ではタダの大きな爺おっちゃんですけど」

「おうい…聞こえとるぞう、八茅草の」

老人は右手を額に当て落ち込んだふりをするが、左手に握られた飾りつ気の無い鉤鎌槍こうれんそうは微塵の油断もなく棗に向けられていた。

「それでは、始めっ！」

開始はしたものの、互いに一步も動かない。

その場から動かぬ老人に対し、棗は周囲を円を描くようにじりじりと回っていく。

年をとったとり全盛期より単純な筋力は減退したとは聞くが、この国を長きに渡り守ってきたその実力は本物だ。

それに加えて武器のリーチの差。こちらが短刀なのに対し、向こうは2メートルを超す鉤鎌槍。

リーチ自体は水を用いて刃を伸ばせば問題ではないが…一撃、それだけで勝負がつく事が問題だ。

武納倉は『剛』、その神髄は爆発的な力を持つ『一撃』にある。一撃必倒とも言える攻撃力こそが棗が飛び込むのにためらう理由だった。

「（遠距離の攻撃は無駄でしょうし、やはり斬り込むしか…）」

「老人をあまり待たせるもんじゃないのぉ、八茅草の。…こちらから行くぞ！」

「なっ！」

ズンツ！と空気が重くなる。地面を力強く踏み締めた…ただそれだけで棗は重圧を感じていた。

老人の体が一回り大きくなったかと思うと、大きく振りかぶった鉤鎌槍を地面に叩きつける。

「レックウ ツルギ烈空の剣…【爆】！」

十分な力を込められた技は大規模な爆発の様な音を生み、地面を砕く。突然足もとが砕けた棗は対処できずにバランスを崩してしまっ

った。粉塵が巻きあがり、膝をつくが棗の眼は前に向いている。それが結果的に棗を助ける事となる。

ゴアッ！

何かが風を蹂躪する音と共に粉塵が一瞬にして渦巻き、外へと弾かれる。

その渦の中心にあつたのは体を反転させ、まさに今こちらを振り向き鉤鎌槍を振り降ろさんとする老人の姿だった。

一撃目の直後に勢いそのままに前進、体を一回転させ遠心力を追加で乗せた二撃目は圧倒的な暴力を持って棗へと降りかかる。

極限まで鍛え上げられた筋肉と、幾重にも練られた気で以って地面を爆砕させる十字の二撃を放つ空法の基本的な術。それが武納倉に伝わる、烈空の剣【爆】。

大きなタメを必要とする為大きな隙が生じてしまう二撃目を敢えて地面にぶつけた一撃目の粉塵でカモフラージュする事で、絶対の二撃目を叩き込む。

相手の気配を読み、自らを粉塵の中に置いて相手を狙い打つ事の出来る圧倒的な量の経験と自信が無ければ出来ない芸当だ。

「ぬうおおおおお！」

「くっ……」

老人は皮膚がひやりとするのを微かに感じるが、ようやく視界に入ってきた棗に軌道修正しそのまま鉤鎌槍を振り降ろした。

再び、一撃目よりも重い二撃目が地面を穿ち、轟音が響きわたる。

「むう……流石に一筋縄ではいかんか」

ボコツ、と音を立てて槍を地面から抜き、自分の腕についた水滴を拭う。

既に老人は何が起こったのかを理解し、また棗の技量にも感心していた。

「動けないならば、相手に外させるといわけか。面白いのぉ」

「少しくらい狐に包まれた様な顔でもして下さるのなら、喜びの感情も湧くんですがね」

幻惑の剣【水鏡】、八茅草流に伝わるその技は水を操る事に長ける
棗と相性がよく、咄嗟の事態にも対応できた。

空気中の水分を操る事で光の屈折を起こし、烈空の剣【爆】の衝
撃に合わせて飛んだのだ。

棗は先程まで自分がいた場所を見て、その攻撃力の凄まじさに眉
を顰める。

「せめて藤堂が相手ならやりやすかったのですが……。まあ文句を言
っても始まりませんね」

軽く息を吐くと構えていた短刀を鞘に戻した。

「八茅草家当主として、たまには実力の一つでも見せておかないと
下に示しがつきませんし」

「儂もまだまだイケるところをガキどもに見せてやらんとのお」

対する老人も鉤鎌槍を刃を天に掲げて構えた。

「天、未だ燻り続ける濁りを浄化するわよ」『御意』

「我が聖霊、大規模破壊と停滞の権化レラウム！その暴力を存分に
振るえる相手が来たぞい！」『黙れ爺い』『ヒドイのお……皆』

どこか締まらない雰囲気の中、先に飛び込んだのは棗。

鉤鎌槍を振り上げ待ちうける老人に正面から飛び込み、間合いに
入る直前にサイドステップで腰を捻りながら横に回り込む。

「ハッ！」

勢いよく抜剣された短刀は老人に到底及ばぬ長さだったが、足り

ない分を水が補い鞭のように襲いかかる。

老人はそれを体を沈ませる事で回避し姿勢をのまに鉤鎌槍を突きだした。

「そんな不安定な体勢から、当たらないわよっ！」

体を捻る事で紙一重で回避した棗は老人に第二撃を繰り出そうと水の剣を引き戻そうとした。

「甘いのお、八茅草の。行きはよいよい、帰りはなんじゃったかの？」

老人が不敵に笑ったその直後、棗の背中肉に何かが突き刺さった…。

第四十一話 剛の者、老獺（後書き）

棗とムキムキ老人の戦いです。

因みに老人には名前が無いです。面倒ですし、もし登場機会がまたあれば考えようと思います。

この戦いはそこまで長引かせるつもりもないので次回で終わります。もしかしたら最後の一撃が話跨ぐかもですけど。

それでは評価感想お待ちしております。

第四十二話 鉤鎌槍、知る真実（前書き）

棗の戦いが終わります。

第四十二話 鉤鎌槍、知る真実

ズブリ、と棗は何かが背中に刺さるのを感じた。
斬られた、のではなく背後から刺された。

「な……」

突然の事に気を取られ、水の剣はその構造を維持できずに霧散する。

「殺せば勝ち、ならこのまま引けばいいんだがお。どうする、ハ茅草の」

「くっ…、名前は確か鉤鎌槍こうれんそう…でしたか」

鉤鎌槍こうれんそうとは、通常の槍に鉤かぎを取り付けた長柄武器である。鉤の先端は穂先の逆を向いており、鉤を引っ掛けて引きずり倒す等の戟の様な機能が特徴的な武器である。

この武器により突きだけでなく、手元に引き寄せる際にも攻撃を行う事が出来るのだ。

「いかな知識を持つとも、活用できねば意味はないぞ？」

決断を急かす様に刃が脇腹へと食い込み始める。

「っ…！忠告、感謝しますっ！」

棗は無理やり横に跳び逃れるが、拘束を無理に抜けた事でわき腹が大きく斬り裂かれた。

声にならない叫びが棗を襲うが傷口からは一切血液が流れ出る気

配はない。

「っあ……！！……！！」

本来ならば千切れた血管から溢れ出るはずの血液を術式で操り、入るべき血管へと届ける事で出血を防いでいた。

だがこの方法は血を流れないようにするためだけのモノ。痛覚は依然警告を吐きだし続ける。

「（私は八茅草流当主、まだ負けるわけにはいかないっ！）」

荒い呼吸は次第に規則正しくなっていき、最後には大きな一息を吐きだした。

「終ったかの？」

「余裕ですね、ですがもう情けは無用です」

棗の眼光に満足がいった老人はニヤリと笑うと鉤鎌槍を一薙ぎ、血を振り払った。

「儂あちと疲れた。この老いた身では全力の一撃でいっぱいはいっぱいじゃあ……ゴホゴホ」

「御冗談を、先日も王直属の近衛隊全員と稽古をしたと聞いてますよ」

軽く笑って流すが、頭の中ではどう攻めるか思考を巡らせる。

単純な接近戦ではどうしても力負け、速度で翻弄したとしても薙ぎ払われるだけだろう。

となれば中、遠距離からの手数を弾幕にして……と考えた所で相手に動きがあった。

老人は油断なく構えていた武器を納めたのだ。

棗は驚愕し目で老人を追うが歩を緩める気配はない。一瞬固まっていたがすぐに声を掛けようとした。

だが老人の言葉の方が一步早く、棗は口を閉ざすこととなる。

「僕は元々御前試合に出てくるつもりもなかったんだがお。」

場外一步手前で立ち止まり独白する。

「『八茅草を背負って立てるかどうが見極めてやってくれ』と頼まれてしまったの…。まあ及第点はあるじやろっし、僕の役目はもう終わったわい」

告げ終わるとゆっくりとその足を外に踏み出した。

突然のことに審判も困惑していたが、声高に宣言する。

「勝者、八茅草流！八茅草棗！」

試合後、棗は老人の前に立っていた。

老人の棗を見下ろす表情は少し歪んでいて、哀しそうだ。

「答えて下さい…。父は、殺されることを知りながら、行ったのですか？」

区切り区切り確かめるような口調。それを聞いて老人はより顔をしかめた。

棗の考えはこうだ。

見極めを頼んだのは棗の父親。頼めたのは仕事に行くよりも前のこと。

つまり戻って来ることが出来ないことが分かっていたと言っことになる。

更にこうも考えていた。頼むことが出来、それを理解して承諾した。それは父親の殺害計画を知っていた可能性が高いと言っことが言える。

目の前の老人は八茅草の追い落としを計る武納倉の前当主。計画の中心を担っていたとしてもなんら不思議ではないのだ。

これは父親が武納倉と藤堂の二家が殺害計画を企てたと言っ前提が必要になるのだが棗にはそれが事実である確信にも似た自信があった。

「詳しいことは言えんがのお…」

老人は苦々しげに口を開く。

「僕は反対だったんじゃ。奴を守るためにお主に刺客も放った。だが力及ばず、ただこうして言い訳しか出来ぬ」

「刺客とはどういうっ…！」

老人は首を振り、これ以上は言うことがないとも言っように無言を貫く。

今ここで話しているだけでも危険なのだろう。周囲に気を巡らせているのがひしひしと伝わってきた。

「あれでよかつたんじゃろ？」

「……………気付かれていましたか」

棗が去つた後の廊下、一人の男が影から現れた。

男は白銀しろがねの刀に漆黒しっこくの髪。老人の眼にはうつすらと背後に女性の姿が浮かんでいる。

老人の質問に肯定で答えると手を差し出した。

「儂とていつかは語るべきと思つておつた。お主が約を果たしてくればそれでよい」

「私の方もそちらの願いは叶えるべき事項ですし、儀式のようなものですよ」

渋々手を出し、堅く握る。

老兵の仕事は後一つ。

老兵の願いも後一つ。

願いを叶えよう。

錆びた歯車も機械の一部なのだから。

第四十二話 鉤鎌槍、知る真実（後書き）

明けましておめでとうございます。

棗の戦い、そして棗が少しだけ真実に近づきます。

今回出てきた鉤鎌槍と言う武器は中国の武器で面白いと思ったので使ってみました。特に深い意味はないです。

では今年もよろしく願います。

第四十三話 葦の雷衣、秀麗

「棗サンは…老兵に勝ったようですね、少し美しさに欠ける勝利ではありませんが…」

棗とはまた別の戦場、糸目の男はフラメアを鋭く振り血を払った。武器の血糊の量に反して自身には全く返り血は見られない。目の前の敵に全く注意を払わず意にも介してない様子だ。

「ワタクシも早く終わらせて、休むとしましょうか」

そこで初めて、自分の目の前の敵に意識を向ける。

「はっ…はあはあ…。アンタなんかにつ！」

体に数多の傷を作りながらも辛うじて十手を構える、光葉。

試合続行不可能とまではいかないが顔には苦悶の表情を浮かべていた。

「前回大会の屈辱を晴らすいい機会ではありましたが…ワタクシが美しくなりすぎたようですね、光葉さんは全く成長していない」

「……本当に、言う通りだったわね」

「何…？」

光葉は一月前に時雨から伝えられた言葉を思い出す。

「光葉さんは、今限界にきています。その年でここまで強いと言うのは正直規格外と言えるでしょう。優れた格闘センスに技術、術式

こそ苦手としますが自らの聖霊を高レベルで制御した神霊護法。後必要なのは経験です…とりたいのですが、今回に限っては時間がありません』

『回りくどい事言っていないで早く言いなさいよ』

『…分かりました、単刀直入に言いましょう。御前試合までに【葦^タの雷衣^{ケミカツチ}】を習得してもらいます』
『はあ？』

「本当に嫌になる、何でもアイツの言うとおりになって…私達には理解の出来ないところにいる」

光葉は自らの懷に手を入れると、もう一本の十手を取り出した。黒い漆塗りに金の紋様が描かれたそれは光葉の普段使っている十手よりも遥かに新しく、一回り以上大きなものだった。

「アイツに負けるみたいで嫌だったんだけど…仕方ないわよね」

「何を言っているのかわかりませんが、続けると取って結構ですね？」

改めて対峙する二人、外から見れば二人の差は歴然だった。

観客には二人の勝負は既についたモノと映っていたし、柳自身そう思っていた。

「藤堂、柳…余裕がましてたら悔しい思いするわよっ…！ハアアッ！」

「フウ…美しくない。せめて散り際位美しく散れないのですか」

柳は光葉の周囲に力が集まっていくなを感じたが、敢えて待った。それは彼の美学でもあったし、何をするのか見たいと思う心もある。

だが数秒後違和感を感じる事となる。

これまでと力の集まり方が違う。そう感じる事が出来ただけ、彼は繊細な感知能力を持っていたと言えるだろう。

「タケミカツチ【葦の雷衣】ッ、招来！紫苑、速攻でケリつけるわよっ！」
『応ッ！』

「タケミカツチ【葦の雷衣】とは、一言で言うならば元来光葉の得意としていたしてんらいしよう【紫電来招】の上位型である。

爆ぜる様な雷光を身に纏い、正に雷神のような姿を見せる「紫電来招」と違い、一見何も変わらないように見えてその実、凝縮されたエネルギーによって聖霊・紫苑の力を底上げする。

だが「タケミカツチ【葦の雷衣】の真の力はそこではない。

「フツノミタマノツルギ【神鳴る？剣】、とつが十束四の型！ほのいかずち【炎雷】！」

光葉の構えた二つの十手が雷を帯び、二振りの刀剣を思わせる形に延びて行く。

一つは一メートル足らず、黒塗りの十手は延びに延びて光葉よりも巨大な直刀の様相を示していた。

そしてその巨大な直刀は光葉の【炎雷】の掛け声とともに燃え盛るように激しく雷光を散らす。

ダンッ！

激しく地面を蹴った光葉は以前を遥かに凌駕する速度で柳の背後に回り込む。

「もらった！」

「何がです…？」

十手の一つを振りぬき、柳を斬り払った光葉は背後から聞こえてくる声に思わず後ろを振り返ってしまった。

目の前には華の花弁が舞い、視界を阻害する。

「人は空を見上げ、その輝きに目を焦がす…秀麗なる刃【飛爪】。学習しない女だ…」

一定座標上に空間の断絶を作り出す事で飛ぶ斬撃を作り出す【飛爪】。柳の最も得意とするこの技は確実に光葉を捉えた。

だが、華吹雪が止んだその場所には光葉はいない。

「流石は一流派を担う師範代ね、油断していたのはこちらだったわ。でもごめんね、私勝たなきやいけないの」

「なっ…ガアアアアアッ！」

光葉の【炎雷】ほのいかずちが柳を背後から唐竹に斬り裂いた。

柳はその場に崩れ落ち、フラメアの音だけが空しく響いていた。

「勝者！八茅草流！鬼頭光葉！」

「お疲れの様ですねえ、随分ずっいぶんと怪我を負ったよおで…」

光葉が試合後の廊下を一人で歩いていると、ここに来る事が分かっていたかのように一人の男が姿を現した。

顔を見て露骨に顔をしかめるとそのまま隣を通り過ぎて行こうと

する。

最後に斬られた肩の傷を早く治したいという思いと話したくないという思いが同時に芽生えた。

「タケミカツチ【葦の雷衣】、彼に教わったのですかねええ？」

「だとしたら？」

「クツクク、クハハハ！やあはり、やああはりですかああ！これらは面白いですねえ、じいつに面白おい」

男は頭が地面に着く程に背をのけぞらせ笑う。

誰もいない廊下に反響し、やまびこの様に何度も何度も笑い声が聞こえてきた。

「何が、言いたいの？」

多分に苛立ちのこもった声を聞いて男の笑い声は一層大きくなる。光葉には嘲笑にしか聞こえない笑い声はしばらく後に自然におさまった。

「タケミカツチ【葦の雷衣】というのはですねえ、秘中の秘、なんですよお…ハ茅草のねえ」

「けどアイツはハ茅草について学んだと言っていたわ」

「そおれでも、おかしいんですよ。何故なら、タケミカツチ【葦の雷衣】と言うのは名前ならともかく、誰も知らないはずの神霊護法なのですからねえ」

光葉は自分の背中に冷たい汗が流れるのを確かに感じたのだった。

第四十三話 葦の雷衣、秀麗（後書き）

こんばんわ、お久しぶりです。兄琉です。
ほぼ一月空けての四十三話更新です（汗）

今回は光葉の戦いでした。

光葉の「葦の雷衣」のタケミカツチタケミカツチとは日本神話の神様です。

そして光葉の作った剣は某星間戦争映画のラ。トセイバーが日本刀になったような見た目と考えていただければ幸いです。雷なので物理的に人を斬る事は出来ないですけどね。

では、評価感想お待ちしております。

第四十四話 古き雷、知る権利（前書き）

お久しぶりです、今はただそれしか言えません……。
それでは第四十四話です、どうぞ。

第四十四話 古き雷、知る権利

八茅草流に限らず、四家には長い歴史がある。

その中で何人もの天才、神童…等と称賛される人物を輩出してきた。

彼らはその時代において、指導者に立つ事も多かっただろう。だが、時には陰謀で、またある時には時代嫌われて命を落としたものも少なくはない。

そんな中、八茅草家に一人の天才と称される人間がいた。

現在でこそ八茅草流当主に棗が座ってはいるが、八茅草隆盛の時は違った。

彼女は当時の当主初の子であり、才覚に溢れていた。生まれた時から既に聖霊に祝福される程に。

そして、数分後に生まれた長男の母親の嫉妬を買ってしまっ……。

少女はその才覚を現し出した途端、幽閉された。

長男より強い当主の子はいらぬ。

まして女性が当主などありえぬ。

少女が八茅草の牢を破り、自由を手に入れる為に生涯一度のみ行使した技。

それが【タケミカツチ葦の雷衣】。

八茅草を永く守護してきた聖霊の名前からつけられたその技を見

た者は例外なく、この世から消えていた。

八茅草の八大守護聖霊の一つが消えた事件だった。

「とまあ、こおれが、【葦の雷衣】^{タケミカツチ}の由来なあのですよ、当然歴史には記されず…ましてや初代八茅草当主でさえ雷神^{タケミカツチ}は完全に制御できなかったと言いますからねえ」

「私が教わったのは【紫電来招】の強化技よ、偶然じゃないの？」

光葉の言葉は幾らか弱弱しく廊下に響く。

「【葦の雷衣】にはまあだ、先がありましたねえ……。十束剣の、どおこまで教わりましたかあ？」

「っ……！」

今度こそ、光葉の口が止まった。

汀は光葉の反応で悟った様で、満足した笑みを浮かべている。

「クククッ……やあはりあの男は面白い。どおのような筋書きがあるのかは知りませんが……楽しませてもらいましょおかねえ」

道化の様に大袈裟に着ていた上着をひるがえすと、汀は闇に紛れるように消えていった。

廊下に一人残された光葉は、新しい十手を強く握りしめていた。

光葉の戦いが終わった後も御前試合は滞りなく進み四回戦、準々決勝に差し掛かるうとしていた。

会場を異常ともいえるざわめきが満ちた。それもそのはず、残っ

ている選手は八人、その内五人が八茅草なのだから。

他流派の主力を悉く時雨が削った事が大きな要因ではあるが、確実に他の四人も力をつけている。

だが、周りの人間達から見ればイレギュラー以外の何物でもなかった。

「そろそろ、私の出番ですね」

「知っているとは思いますが、貴方の相手は……」

「棗殿の心配には及びません。相手は【戦乙女】ルリス……一筋縄ではいかない相手でしょう」

八茅草の控室で時雨と棗は向かい合ってお茶を飲んでいた。

お互い沈黙を貫いていたが、時間を確認した時雨から口を開いていた。

「ですが、既に最悪でも光葉か那智……どちらかが五本指に入る事が決定しました。これで私も心おきなく戦えるというものです」

そう、現時点で既に残りは八人、その内五人が八茅草と言う時点で確定していたのだ。

組み合わせは時雨とルリス、翼と武納倉一心、光葉と那智、棗と藤堂の師範である。

「そう、ですね。その事については感謝しています……」

「……では私は行って参ります」

これ以上語る事はないとでも言うように時雨は話を切り上げ、立ち上がり控室から出て行った。

『彼方、解析の方はどうなっている』

『はい、順調に進みこちらの予想通りのところまで進んでいます。このままで問題はないかと』

『では計画に変更は無しだ、このまま五本指を決めるぞ』

『はい……』

彼方と意思疎通をしていた時雨はふと、前方に呆然と立っている光葉に気が付く。

普段と違う様子に気になった時雨は駆け寄っていった。

「どうされました、光葉さん？ お腹の調子でも悪いのですか？」

出来るだけ何も分かっていない様に茶化しながら声をかける。

だが光葉の耳には正確に届かなかったようで瞳だけがゆっくりと時雨を見上げた。

「アンタは……何を知っているの？」

「え？」

「アンタはどこから来て、何をしようとしているのか……私は知らない。でもアンタは私達は何をしたくて、何をすればいいのか知っている……なんですよ」

光葉は疲れ切った表情で、時雨を睨み続ける。

微かな震えの止まらない体からは恐れや不安といった負の感情が流れ出る。

「……在るべき未来の為に……私から言えるのはそれだけです」

光葉の頭を撫でながら絞り出した時雨の言葉に、光葉は思わず目

を見開いた。

握りしめていた道着を離すと時雨から目を逸らす。

「終ったら、ちゃんと……聞かせなさいよね」

「必ず……」

体を横に向けて道を開けた光葉の隣を通って、時雨は歩きだす。
戦いの場へと向かって……。

第四十四話 古き雷、知る権利（後書き）

実に五カ月以上ぶりの更新……自分で考えた設定を正直忘れていた部分がある兄疏です。

これからもかなり不定期の更新になると思いますが、更新はします。

では他作品共々再びよろしく願いしますm(_____)m

第四十五話 八人の戦士達、絡まりゆく鎖

いつから、だろう……感じていた強烈な違和感が限りなく薄れたのは。

なぜ、だろう……私がこんなにも恐れているのは。

どうして、だろう……答えをもらってもいないのに、こんなにも心が安らぐのは。

「少しくらい……調べてみても大丈夫だよね？」

少女は男からもらった十手をしっかりと胸に抱きとめると、歩きだした。

その行動が何を意味するのか、どういう結果をもたらすのか、彼女は知らない。

色を見分ける事ができる。その力があれば全てを見極められると思っていた。

だけど、今ではなまじ見えているばかりに、分からなくなっている。

今までこんな事はなくて、初めての事ばかりで……。

「ボク……一体何を信じればいいんだろう……」

自らの爪を研ぎ澄まし、暗闇で震え続けていた。

いつか光の中を大きく手を振って歩けるその日を信じて、更に深い暗闇へと潜り続ける。

最初は会う度に感じていた嗚咽が、気が付けばほとんど感じなくなっている。

偶然が重なって、気が付けば僕はこんなところまで来ていた。

あの御神籤の約束は果たせるのだろうか……だけどその為には……。

「こんなに、何かに勝ちたいなんて思ってた事は……初めてかなあ」

初めて生まれた感情に気が付いた少年は、何を欲するのだろうか。男から受け取った確かな技術と曖昧な知識を胸に、少年は考える為に歩みを止めた。

理解した時にはもう、師範なんていう動きのとれない場所に囚われていた。

力を求めるだけだったあの頃に受けた一筋の稲光、それが男を変えた。

理解するよりも遥かに早く、男は確信を得ていた。

「嬢ちゃんじゃないのは非常に残念だがのお、ワシにも目的がある以上譲れんよ……ガッハッハッハ！」

変わってしまった自分の居場所を取り戻す為に、男は大地を踏みしめる。

だがその歩みが徐々に遅くなっている事に、男自身気付いていなかったのだけれど。

何よりも美しく、気高くなければならない。それこそが至上の目標だった。

だが美しい薔薇には棘がある様に、美しい都市の地下には汚水が流れる様に、美しくある為に汚れもした。

男は想う、自分達のしている事は本当に美しい事なのだろうか、と。

「正しく美しいのは我々なんだ……それを証明するっ！」

清くある事を捨てた男は美しく、ただ美しくある為に戦いを真つ向から受け止める。

それがどんなに醜くとも、それが自分たる所以なのだから。

最初はあるなにも敬遠されていたはずなのに、気が付けば私達を引つ張っていた。

かと言つて必要以上に深く踏み込んでくる事はなく、時々儚く見える。

いつかまるで幻の様に消えてしまうのではないかと考えてしまう。

「まずは五本指に……それから、考えましょう」

下を向いて歩く事を選んだ女は、歩みが遅くなった。

だが遅くなったと言う事は、考える余裕が増えたと言う事でもある。

る。

自分の信じた未来を創る為に、男は世界を駆け抜ける。

自分の犯している罪を知りながらも世界を騙し続ける。

英雄である等といった勘違いはしない、それがせめてもの免罪符であると信じて。

「止まる訳には、いかない……俺が鎖を握り続ける限り……！」

信じたモノだけを信じて、自らを守り続ける。

だがそれ故に、傲慢だと分かっている男が歩みを止める事はない。

女が願うのは、使える姫の幸せのみ。

そこに私情はなく、ただその笑みを絶やさない為だけに戦い続けた。

自分がどのようになっても構わないという想いが、心の深いところで根付いていた。

「全ては、我が姫の為に……」

だがその献身が姫の心を縛っている事を女は知らない。

お互いがお互いの為に、心を偽っているかもしれないのに……。

鎖を握りしめた男と、盾の為の剣を携えた女。
二人が今舞台に躍り出る。

その戦いの行く末がどこにあるかは、誰も知らない。

第四十五話 八人の戦士達、絡まりゆく鎖（後書き）

今回はサブタイトルの通り、残った八人の選手の思いを書き連ねました。

次回からは時雨とルースの戦いが幕を開けます。
では次回を早く更新できる事を七夕で祈っておきます……。

第四十六話 朱紅き鎖、予測

一時は嵐の様な喧騒にあった会場も、今では幾らか静かになっていた。

それでも一大イベントというだけあって全くの静寂と言う訳にはいかないのだが。

『皆さああああん！ 遂に、この時がやってまいりました！ 御前試合個人戦……準々決勝つ、です！』

若干音割れのする拡声器が休憩の終了を告げる。
それまで散り散りだった意識が一か所に集まっていた。

『想定外、大波乱、最大級の戦いが繰り広げられてきた個人戦も、後八人の戦士たちを残すだけとなりました。己の力一つで勝ち上がってきた戦士達、彼等の胸の内は如何なるものかつ！』

声の増大に応じる様に、津波の様に湧く群衆。
開会式の時以上の興奮が会場を包み込んでいた。

『それではっ、準々決勝第一戦目はいきなり波乱の予感大！ 今大会最大のダークホース、八茅草流……時雨！ 対するは前御前試合個人戦覇者、【戦乙女】ルーリス！』

闘技場の両端から中央へと歩みよる二人へと地響きのような歓声が上がる。

その中で一言も言葉を発する事なく、互いに視線をかわす二人がいた。

だが二人の距離が二十歩を切った時、男がゆっくりと口を開いた。

「ようやく、貴女と戦う事が出来る……」

まるで騎士同士の決闘の様に、男は恭しく腰を折る。

「こちらも、貴殿と戦いたいと思っていたところだ。礼を言おう」

女も男に呼応するように優雅に礼を返す。

重要な部分のみにつけられた防具が数度金属音を響かせる。

「八茅草流をここまで引つ張ってきた貴殿の力、存分に見せてもらおう」

「八茅草流がここまでこれたのは皆さんの力ですよ……私はなんもしていません」

互いに表情を読ませない微笑みを浮かべ、ほぼ同時に武器に手を伸ばした。

『そつ、それでは御前試合個人戦準々決勝……始めっ！！』

戦いの火蓋は切って落とされたのだった。

闘技場の中心では刀が打ちあわされる……事はなく、動くのは風だけだった。

戦いが始まってから五分ほど経つがその場から二人とも動いていない。

違うのはルーリスがレイピアを抜いている事だけだ。

「来ないのですか？」

「御冗談を、貴女から来てはどうだ？」

言葉だけ聞けば安穩とした会話。しかし、二人の間に横たわる空気は明らかに固まっていた。

ここに来て初めて時雨が太刀を抜く。だがその構えは正眼から少しずれた構え。

攻めてこい、ここなら空いているぞと言う意思表示。

「観客もいる事ですし、始めましょう……『詠^{ヨミ}未^ミ』さんも待っている事ですし」

「……！ いや、驚く事ではない、か」

ルーリスは乾いた笑みと共にレイピアの剣先をゆらりと動かす。

陽炎のように揺らめき、観客がルーリスを見失うと同時に剣戟の音が響いた。

「五本指が一、ルーリス……参るっ！」

「来てから言われても、困るのですが」

まずは初撃、しなやかな動きで突き出されたレイピアは大太刀によって受け流される。

互いに笑みを浮かべると弾けるように距離を取った。

初撃を除いて、剣戟の音が響く事は無かった。
互いの剣は空を貫き、風を斬っていた。

剣舞の様な攻防に観客の声は次第に静まり、大人しくなっていく。二人の頬に汗がうつすらと浮かび始めた頃、演舞は突然終了を告げる。

「予想通りの強者……だがこのままでは平行線」

半身に構えていた体を正面に向け、レイピアを顔の正面に天を突くように構えた。

ルーリスの金色の双眸が、ゆっくりと真紅に染まっていく。

「ようやく……貴女の【天啓】の本気、ですか」

「【天啓】等と、そのような神の力ではない。ただ【朱紅^{あか}き鎖】と呼んでいる」

ルーリスの瞳から血が流れ出したところで変化は止まった。

再び、ゆっくりとレイピアの剣先が時雨に向かう。

「言わずとも知っているだろうが、先程までとは違う……覚悟っ！」

ルーリスの視界には異様な光景が広がっていた。

朱紅^{あか}く彩られた世界に縦横無尽に掛けられた大小様々な鎖。その殆どはルーリスと時雨を繋ぐように軌道を描く。

そしてルーリスはその鎖をなぞる様にレイピアを走らせる。

「切れが悪くなっている、下方修正」

「ふっ、今の貴女相手に剣だけで挑んで……余裕が出せるわけがないじゃないですかっ」

先程までとは打って変わって、大太刀でレイピアを弾く時雨。

余裕がない中でも含ませてくるフェイントも今のルーリスには効果を上げる事ができない。

ルーリスは機械の様な精密さで時雨を追い詰めていった。

「そろそろ、術式を使つてはどうですか？」

ルーリスは自分の声で揺れた鎖を目で追いながら時雨に語りかける。

当然攻撃の手を緩める事はなく、レイピアは確かに時雨の袴の布地を貫いていた。

「集中させてもらえないのに使えるわけがないでしょう……使おうとした瞬間、貴女の【予測視】の餌食だ」

「……………」

ルーリスは再び押し黙る。

新たに生まれ続ける鎖に揺らめく軌道。それらがまるで踊る様に二人を繋いでいた。

第四十六話 朱紅き鎖、予測（後書き）

また微妙なところでぶった切ってしまいました。

次回はルーリスの【朱紅き鎖】の説明から入ります。

……やはり戦闘パートは苦手だ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5738f/>

剣舞-Chain of Blood-

2010年10月21日05時39分発行